

タイトル	日本とイスラーム世界の出会い：明治,大正,昭和時代のメディアを通して
著者	宝利, 尚一; 米吉提, 瑪依拉
引用	北海学園大学人文論集, 39: 15-153
発行日	2008-03-00

日本とイスラーム世界の出会い

— 明治, 大正, 昭和時代のメディアを通して —

宝 利 尚 一・^{ミジティ}米吉提 ^{マイラー}瑪依拉

目 次

序 論

第 1 章 イスラーム世界の広がり

- 第 1 節 黄金の国「ワークワーク」
- 第 2 節 「右手に剣 左手にコーラン」
- 第 3 節 「ユーラビア」の悪夢

第 2 章 ムハンマドと汎イスラーム主義

- 第 1 節 ムハンマド伝の翻訳・著述
- 第 2 節 エルトゥールル号遭難事件

第 3 章 佳人と暴夜物語

- 第 1 節 「佳人之奇遇」とエジプトの不幸
- 第 2 節 千夜一夜物語の日本語訳

第 4 章 ムスリムとクルアーン

- 第 1 節 日本人ムスリムとメッカ巡礼
- 第 2 節 外国人ムスリムの日本訪問
- 第 3 節 クルアーンの日本語訳

結 論

序 論

日本とイスラーム世界の出会いは、古代、中世、近代の日本語文献、中国語文献などにかんがりの記述が見られる。しかし、当時の日本人のイスラーム世界、イスラーム教徒（ムスリム）理解は極めて限られ、多くの誤った情報に基づく不正確なものだった。イスラーム世界の地理的な位置、イスラームの宗教的な概念などについてほとんど理解されていなかった。^(註1) イスラーム教とその預言者、ムハンマド、ムスリムの聖典、クルアーンなどについて、日本で翻訳あるいは著述されるのは明治時代になってからである。^(註2)

明治維新後の新政府は脱亜入欧政策、つまり、欧州諸国による植民地支配にあえぐアジアの現実を直視するのではなく、産業革命後に目覚ましい発展を続けた欧米諸国の政治、経済、財政、金融、法律、軍事、社会、文化、科学、医学、芸術などの導入を優先した。脱亜入欧政策は、欧米諸国から不平等条約を強いられ、植民地化の懸念を深めた明治政府にとって、不可避の選択ではあった。明治政府の脱亜入欧政策は、言い換えれば欧化主義政策であり、日本の伝統的な政治、経済、社会、文化などの諸制度を実質的に“排除”し、多くの分野で欧化主義的な制度と欧化主義的な考え方を重視し、植民地支配を強める欧州列強と同等の国力の保持、つまり富国強兵策を優先する政策だった。

明治政府が欧化主義政策を重視した結果、宗教分野でも欧米諸国から日本へのキリスト教伝播の動きが活発となり、その結果として日本人のイスラーム認識が歪められることになった。イスラームとイスラーム世界の動向は断片的に中国から伝えられていたが、大部分は欧米キリスト教世界を通して日本に伝えられた。欧米諸国から伝えられたものは、預言者ムハンマドについての偏見と誤解、クルアーンについての偏見と誤解、そして無理解を増幅させるものだった。

明治時代に「一世を風靡したキリスト教文化の蔓延と浸潤、そしてこれによって勢を得たキリスト教宣教師、牧師の一群の登場、活躍によって、

日本人は『アーメン』という言葉や『主よ』という言葉覚えると同時に、彼等から余分にも『剣かコーランか』という言葉が附録的に教えられた。^(註3) 明治政府の欧化主義政策と共に、キリスト教宣教師らの積極的な布教活動によって、日本におけるイスラーム受容は当初から偏見と誤解、先入観と固定観念を伴うものとなった。

本論文では主に、明治時代(1868年－1912年)、大正時代(1912年－1926年)の新聞メディア、出版メディアを中心に調査、分析する。クルアーン(コーラン)の日本語訳は明治時代には実現せず、大正時代から昭和時代前半にかけて行われたため、大正時代、昭和時代(1927年－1989年)前期、主に太平洋戦争以前の昭和初期の新聞メディア、出版メディアについても調査した。新聞、出版情報をもとにイスラーム関連情報を収集、分析すると共に、明治時代以降に出版されたムハンマドの伝記、日本語訳クルアーンを通して、日本とイスラーム世界の出会いの一端を検証する。^(註4)

第1章「イスラーム世界の広がり」では、イスラーム世界がアラブ世界、中東世界を超えて広がっていることを考察した。イスラーム世界はアラブ地域からアジア、アフリカ、ヨーロッパ、米国にまで広がる世界である。また、イスラーム世界とキリスト世界の関係についても、ヨーロッパ・メディアのムハンマド風刺画事件、ローマ法王のムハンマド批判などを例に具体的に検討する。

第2章「ムハンマドと汎イスラーム主義」では、第1節で明治時代のムハンマド伝が外国人キリスト教宣教師、日本人学者、宗教者によってどのように翻訳、著述されたかを検証する。同時に英国の歴史家、評論家、トーマス・カーライル^(註5)の影響を受け、ムハンマドが預言者というより英雄、偉人、超人として描かれたことについても考察する。第2節では、明治時代にオスマン帝国から日本に派遣された軍艦エルトゥールル号の遭難事件に、日本人がどのように対応したかを分析する。当時の日本人にとってエルトゥールル号事件は日本人の「慈愛義侠」と「国威発揚」をもたらす事件であり、オスマン帝国のアブデュル・ハミト2世の意図した汎イスラーム主義がほとんど理解されなかった点を明らかにする。

第3章「佳人と暴夜物語」第1節では、明治時代の政治家、小説家、ジャーナリスト、東海散士（本名・柴四郎）の目を通して、日本人のイスラーム世界への理解度を検証する。東海散士は米国に留学中、ヨーロッパ列強がアジア、アフリカ、中南米の弱小国を支配する事実を目撃し、帰国後「弱小国・日本」に警告する政治小説「佳人之奇遇」を発表した。

第2節では、明治時代に「世界の一大奇書」とされた「アラビアンナイト（千夜一夜物語）」の日本語訳について検討した。「アラビアンナイト」の日本初訳は1875年（明治8年）で、1876年（明治9年）に刊行された日本初訳のムハンマド伝より早かった。明治、大正時代の日本人にとって、「アラビアンナイト」は好色文学ではなく、教訓的、学術的であり、児童向けの真面目な「お伽噺」、あるいは英語学習用のテキストでもあった。ここでは、「アラビアンナイト」がアラブ・イスラーム世界の帝王から庶民を巻き込んだ大説話集で、イスラーム世界の人々を活写している点は説明されていなかった。

第4章「ムスリムとクルアーン」では、第1節で日本人最初のイスラーム教徒（ムスリム）について検討した。先行研究では日本人最初のムスリムはトルコ在住通算約18年の実業家で、茶道家でもあった山田寅次郎、とされていたが、最近の研究で日本人ムスリム第1号は時事新報記者で、日本人初のイスラーム世界駐在特派員の野田正太郎、であることがほぼ確実となった。野田をはじめ、明治時代以降の主な日本人ムスリム、メッカ巡礼者について詳述する。また、第2節では、明治時代に日本の政治家、国家主義者、軍人、一般庶民らと精力的に接触したタタール人ムスリム、アブデュルレシト・イブラヒム^(註6)についても調査、分析した。イブラヒムはわずか5ヶ月間の日本滞在だったが、日本人にイスラームについてより正確に伝えようと努めた汎イスラーム主義者だった。

第3節では、クルアーンの日本語訳について調査した。クルアーンの日本語訳は大正時代以降、計9冊に及ぶが、大正時代のクルアーン日本語訳は英語、ドイツ語、フランス語、ラテン語などからの重訳、重々訳で、日本語の意味もあいまいな点が多かった。アラビア語からのクルアーン全訳

は1950年代後半(昭和30年代前半)から1970年代(昭和50年代後半以降)まで待たなければならなかった。

21世紀の現代日本でも、ヨーロッパ史、ヨーロッパ文化論の専門家さえ「イスラームのことはよく知らない」と言って、イスラーム史やイスラーム文化論を忌避することがある。板垣雄三は「本当はイスラームのことを分からなければ、欧米のことが分るはずはないのです。だから『私はイスラームのことは知りません』と言うのであれば、『私はヨーロッパのことも分っていないのです』と告白しているようなものです。ところがそういう人に限って、『自分は西洋文明を知る第一人者だ』と、内心、自信を持っているのでしょ

うでしょう」と書いている。^(註7)

2025年にはイスラーム教徒が世界総人口の3分の1(現在は5分の1)を占めると推定されている。保坂俊司は、「(今、世界で進行中の)イスラーム教の拡大という事実を、日本人が本当の意味で理解するには『伊勢神宮がモスクになる日』というような具体的な現象を想定して考えねばならない」と述べ、一般の人々や保坂の教えている大学の学生に繰り返し話しているという。^(註8)保坂は多くの日本人がイスラームの拡大、復興に無理解で、自ら無宗教、無信心と認識する傾向にあることを危惧し、日本人の「宗教音痴」を警告する意味で「伊勢神宮がモスクになる日」が来ると強調したのであろう。近い将来、世界人口の3人に1人がムスリムになるとすれば、日本社会でもイスラームが可視化される。その時までには、日本人は欧米諸国の一部で強まっているイスラーム脅威論を繰り返すのではなく、イスラームとの文明間対話を強化し、相互理解を深める具体的な方策を見出し、実践する必要がある。

序論 注

1. 小林 元「日本と回教圏の文化交流史——明治以前における日本人の回教及び回教圏知識——」1939年(昭和14年)未刊。中東調査会 1975年(昭和50年)8月復刻。杉田英明「日本人の中東発見——逆遠近法のなかの比較文

化史」中東イスラム世界2 東京大学出版会 1995年6月初版参照。

2. 本論文では主に、明治時代、大正時代、昭和時代前半の新聞、雑誌、書籍の一部を第1次資料として使用している。原資料の漢字、仮名遣いは原則として原文のままとした。ルビについては現代仮名遣いとした。原資料の一部の漢字は常用漢字に改め、句読点、濁点を適宜補った。原資料の文中には「回教」「回々教」「回教圏」「支那」「姦豪」「妾」など、現在の社会通念や人権尊重の立場から適切でない用語が含まれている。これらの用語は原則として、当時の新聞、雑誌、書籍の中の原文を○印または括弧つきで引用する場合に限った。
3. 鏡島寛之「各国におけるコーランの翻訳」大保幸次・鏡島寛之共著『コーラン研究』所収。刀江書院 1950年(昭和25年)12月発行。P.227。
4. 新聞メディアについては、「明治の讀賣新聞(1874年-1912年)(CD-ROM 39枚)」、「大正の讀賣新聞(1912年-1926年)(同29枚)」、「昭和の讀賣新聞 戦前I」(1926年-1935年)(同35枚)、「昭和の讀賣新聞 戦前II」(1936年-1945年)(23枚)、「昭和の讀賣新聞 戦後I」(1946年-1960年)(同39枚)、「昭和の讀賣新聞 戦後II」(1961年-1970年)(DVD11枚)を利用した。その他、時事新報、毎日新聞、東京日日新聞、報知新聞などを参考にした。
5. トーマス・カーライル(1795-1881年/寛政7年-明治14年)はスコットランドの石工の家に生まれる。ドイツ文学を研究、その後ダブリンで「衣裳哲学」(1833-34年)を発表、「フランス革命史」(1837年)の著述で歴史家としての地位を確立した。カーライルは1840年にロンドンで行った講演を基礎に加筆し、1841年(天保12年)「英雄および英雄崇拜論」を出版し、世界的なベストセラーとなった。正式の原題は「英雄・英雄崇拜ならびに歴史における英雄的なるもの」で、本論では老田三郎訳「英雄崇拜論」(岩波書店1949年=昭和24年5月)から関連部分を引用する。
6. アブデュルレシト・イブラヒム(1857年-1944年/安政4年-昭和19年)はロシア生まれのタタール(カザン・トルコ)人ムスリムで、ロシア帝政下でのタタール人らロシア・ムスリムの民族独立をめざした汎イスラム主義者だった。1909年(明治42年)2月に初来日し、日本人のイスラーム理解に影響を与えた。イブラヒム「ジャポンヤ——イスラーム系ロシア人の見た明治日本」第三書館 1991年12月初版発行。第4章第2節で詳述する。
7. 板垣雄三「イスラーム誤認——衝突から対話へ」岩波書店 2003年(平成15年)9月第1刷発行。P.239。
8. 保坂俊司「イスラーム原理主義・テロリズムと日本の対応——宗教音痴日本

の迷走——」北樹出版 2004年8月初版第1刷発行。P.107。

第1章 イスラーム世界の広がり

第1節 黄金の国「ワークワーク」

日本とイスラーム世界との出会いは、7-8世紀に中国経由で「波斯^{はし}」「大食^{たいし}」という言葉が伝わったことが初めてとされる。波斯はペルシャ、大食はアラブの意味で使われていた。波斯の文化は正倉院御物として日本に伝わったことで、特に良く知られている。「日本書記」には乾豆波斯^{げんずはし}(インド在住のペルシャ人か)が日本に渡来したとされる。^(註1)

小林元は「日本人の初期の記録に見えたる波斯、大食、その他の地名、若しくは異邦人名等より察するに、我が国人は早くより無意識裡に回教徒と接し、回教圏に関する知識を與へられたるものの如し。その当時、回教徒の東方進出と共に、彼等の通商範囲も日を逐って拡大しつつありたればなり。然れども、我が国人は、波斯、大食、その他の地名に於て伝えられたる回教圏諸地に関しては、比較的多くの情報入手せるも、尚明確なる地理的知識を欠如す。而も、誤聞に基づく記事無きにしもあらず。」と書いている^(註2)

13世紀の鎌倉時代には、天台宗の僧侶、勝月坊慶政^{けいせい}(1189年-1268年/文治5年-文永5年)が入宋し、中国福建省泉州(ザイトゥーン)で3人の異邦人に「南番文字」で経文の一部を書いてもらった。しかし、明治時代になって慶政上人の「南番文字」は経文ではなく、ペルシャ語の詩句であることが判明、さらに1980年代になって東京外語大学の黒柳恒男、岡田美恵子両教授が2人のペルシャ詩人の詩句であることを究明、解説し、「日本最古のペルシャ文書」として確定した。^(註3)

古代から中世、近代に至る時代を通して、イスラームに関する日本人の知識は中国を通じた間接的なものがほとんどだったが、イスラーム世界のムスリムもまた、日本に関する正確な知識、情報を持ち合わせていなかった。小林元はイスラーム世界の東方への拡大とムスリム商人の活動の広汎

化がムスリムの地理知識を増大させ、その結果日本に関する知識も生まれたとする。9世紀のイラン系地理学者イブン・フルダビーヅフがアラビア語最初の地誌「諸道諸国誌」(850年頃)に、中国の東方に「ワークワーク」という国があり、日本への認識が生まれた。^(註4)

- 支那の東にワークワークといへる国土あり、この国土はすこぶる多量に金を産し、かくてその住民はこの金属をもって犬の鎖および猿の首輪を作れり、かれらは金を鑲めたる服を着す、しかも、この国は上質の黒檀をも産す。
- 支那の果てなるカーンスーの前面にシーラーと称する山多くして、数多の公国に分れたる国土あり、そは豊富に金を産す、この国に赴く回教徒は、この地に種種なる便宜あえば、ここに永住す、されどこの国土のかなたがいつこなるやは、不明なり。^(註5)

イスラーム世界で初めて、「ワークワーク」が日本の「倭国」、「シーラー」が朝鮮半島の「新羅」を意味する中国語からの転訛したアラビア語と見られている。マルコポーロよりはるか以前の9世紀頃、倭国、新羅は共に黄金の産出国として、中国人、アラブ人に知られていたことになる。小林によると、ワークワークの物語はムスリム商人たちの東方進出と彼らの重金主義の所与であるところの金島の探査の物語であるという。

16世紀の大航海時代に入ると、ポルトガル人、スペイン人によるアラブ世界、イスラーム世界についての情報が断片的に日本に伝えられた。18世紀初頭には新井白石(1657年-1725年/明暦3年-享保10年)、西川如見(1648年-1724年/正保5年-享保9年)が世界地理書を執筆、アフリカ、アラビア、ペルシャなどについてより詳しく説明している。

一方、イスラーム世界とムスリムについては、明治時代になっても系統的には理解されなかった。明治時代以降の日本とイスラーム世界の出会いを考えるうえで、イスラーム世界そのものの定義が必要であろう。日本では、中東・イスラーム世界、アラブ・イスラーム世界などと表現されるこ

とが多い。これらの表現ではイスラーム世界が中東・アラブ地域に限定されてしまう懸念がある。イスラーム世界は中東・アラブ地域を超えて、アジア、アフリカを中心に、ロシア中国の一部にまで広がっている。更に欧州、米国にもかなりのムスリムが定住している。

「新イスラーム事典」は日本で最初の「イスラーム事典」発行から20年近くを経て、全面改訂された。^(註6)「新イスラーム事典」には「日本」の項目、「岩波イスラーム辞典」には「日本とイスラーム世界」の項目がある。^(註7)「岩波イスラーム辞典」は表紙裏に「イスラーム世界全図」を掲載している。この全図では、3種類の色分けで「全人口にムスリムの閉める割合」が100-80%、80%未満-50%以上、50%未満-20%以上の3種に色分けしている。また、「ムスリム人口が全人口の20%未満であるが、100万人以上存在する国のムスリム人口実数」も記している。イスラーム諸国会議機構(OIC)諸国^(註8)は太字で示されているが、地図、克明、人口実数とも活字が小さく不明瞭である。

「イスラーム世界事典」^(註9)には「日本とイスラーム世界」の項目があり、明治維新前、明治の開国後、昭和戦前、戦後の日本とイスラーム世界の接触、交流が簡潔に記述されている。^(註10)また、同事典の冒頭で、片倉もとこが「『イスラーム世界』とはなにか」と題して解説している。片倉は「イスラーム世界の広がり」「都市から広がる」「アラビアで誕生したが、全世界で成長」「生活体系としてのイスラーム」「ゆがめられたイスラーム像」などの見出しを付して、具体的に記述している。^(註11)

一方、イスラーム研究者の加藤博は「イスラーム世界とは、イスラーム発祥の地である中東のみならず、中央アジア、インド亜大陸、東南アジア、黒アフリカの一部を含む。現代政治のうえでは、おおむねイスラーム諸国会議機構を構成している国々である」と説明する。^(註12)

また小杉泰も「今日『イスラーム世界』と言うとき、イスラーム諸国の国際機構である『イスラーム諸国会議機構(OIC)』が想起される。」としている。だが、小杉は「『イスラームを文化的な共通項とする諸地域』の集合体を『イスラーム世界』と呼ぶのは、いささか単純かつ静態的な見方であ

る。実のところ、世界史に登場するいわゆるイスラーム世界は、いったん、二〇世紀初頭にほぼ消滅してしまった」と指摘する。^(注13)

羽田正は加藤、小杉らの「イスラーム世界」の定義を整理し、イスラーム世界とは①理念的な意味でのムスリム共同体②イスラーム諸国会議機構③住民の多数がムスリムである地域④支配者がムスリムでイスラーム法による統治が行われている地域(歴史的「イスラーム世界」)、としている。^(注14)

イスラーム諸国会議機構は現在56カ国とパレスチナ解放機構(PLO)が加盟している。ナイジェリアは1991年5月に脱退を表明したが、認められていない。同機構に加盟していない諸国のムスリム人口を加えると、世界のムスリム人口は約13億人で、「世界総人口のうち5人に1人はムスリムといわれている。しかもその数はさらに拡大しつつある。」^(注15)

板垣雄三は「西暦7世紀にイスラーム文明が成立した時点から、人類の歴史は『近代』を迎えた」と規定し、「イスラームのアーバニズム(都市性)とモダニティ(近代性)がヨーロッパ的に展開したものこそヨーロッパの近代だ」と主張し、ヨーロッパ人は「ヨーロッパとアジア」、「西洋と東洋」、「ユダヤ人对異邦人」、「キリスト教世界とイスラーム教世界」という二項対立の2分法をとってきたとする。板垣は、ヨーロッパ人の二項対立の2分法を「二つの世界」論と呼び、「ヨーロッパ人はイスラーム的東洋(オリエント)という鏡に自分を映してみても、イスラームはいかに駄目かと考えながら、逆に鏡に映る自分の姿はなんと美しいことかと惚れ惚れする……、そんな自己愛を梃子にして、イスラームを敵視し、軽蔑しながら自分を成長させた」と断言する。^(注16)

第1章第1節 注

1. 杉田英明「日本人の中東発見——逆遠近法のなかの比較文化史」前掲書 P.16-25。
2. 小林 元「日本と回教圏の文化交流史——明治以前における日本人の回教及び回教圏知識——」前掲書 P.1。
3. 1989年(平成元年)7月10日読売新聞夕刊文化面 岡田恵美子(寄稿)「日

本最古のペルシャ文書」。杉田英明「日本人の中東発見 ― 逆遠近法のなかの比較文化史」前掲書 P.25-34。

4. 杉田同上 P.34-47。小林 元 前掲書 P.22-33。
5. 小林 元 同上 P.24。
6. 「イスラーム事典」平凡社 1982年(昭和57年)4月初版第1刷発行。社団法人日本イスラーム協会 嶋田襄平 板垣雄三 佐藤次高監修。「新イスラーム事典」平凡社 2002年(平成14年)3月初版第1刷発行。監修・日本イスラーム協会 嶋田襄平 板垣雄三 佐藤次高, 編集委員代表・佐藤次高, 編集委員・飯塚正人 栗田禎子 黒木英充 坂本 勉 林佳世子 野間英二 三浦 徹 柳橋博之。

「新イスラーム事典」の「日本」では、「奈良時代からイスラームに関する知識が日本に伝えられ、鎌倉時代には僧侶によるムスリムとの接触が中国で行われた記録がある……」として、その後の安土桃山、江戸時代、更に明治、大正、昭和期(戦前)、第2次世界大戦後のイスラーム研究の流れが簡潔に記されている。P.380-382。

7. 「岩波イスラーム辞典」岩波書店 2002年(平成14年)2月第1刷発行。編集・大塚和夫 小杉 泰 小松久男 東長 靖 羽田 正 山内昌之。

「岩波イスラーム辞典」は「日本とイスラーム世界」の項目で、「シルクロードを介した情報」「イスラームへの知識とその深化」「日本のイスラーム世界への反応」「日本のイスラーム認識の変化」などの見出しを付け、日本とイスラーム世界との接触の歴史を記述している。9世紀のアラビア語地誌に日本が黄金の国「ワークワーク」として登場していたことなどを指摘し、その後の江戸時代から明治、大正、昭和時代における日本とイスラーム世界との関わりを記述している。P.724-726。

8. イスラーム諸国会議機構(OIC) イスラーム国を加盟国とする国際組織。1969年(昭和44年)9月、モロッコの主と、ラバトで開かれた第1回イスラーム諸国首脳会議で設立が決定し、1971年(昭和46年)5月に創設された。加盟の資格に明確な規定はない。ムスリムが少数派であっても、国内にムスリムの居住する国が申請すれば、外相会議で審査し、加盟が認められる。イスラーム諸国間の連帯を強化し、政治、経済、社会、文化などの各分野での協力を推進することなどを目的にしている。最高意思決定機関の首脳会議がイスラーム世界の重要問題を協議し、OICの政策を調整する。3年に1回開催。
9. 「イスラーム世界事典」明石書店 2002年(平成14年)3月初版第1刷発行。編集代表・片倉もところ 編集委員・加賀谷寛 後藤 明 内藤正典。

10. 同上 P.294-296。
11. 片倉もとこ「『イスラーム世界』とはなにか」「イスラーム世界事典」所収 P.3-27。
12. 加藤 博「イスラーム世界論 トリックスターとしての神」東洋叢書10 東京大学出版会 2002年(平成14年)4月初版。
加藤 博は「この世界(イスラーム世界)はイスラーム教徒の人と人との結びつきからなる世界であり、厳密な意味での空間的な境界はない。しかし、これはあくまでも、イスラーム教徒にとっての世界である。現実のイスラーム世界はそれほど単純ではない。そもそも、イスラーム教徒だけからなる世界など、どこにも存在しなかった。たとえその世界がイスラーム教徒によって支配されていたとしても、そこには、イスラーム教徒とならぬ少なからぬ非イスラーム教徒が生活していた。そこで、一般的には、イスラーム世界という言葉は、過去にイスラームを信奉する政治勢力によって征服され、支配されたか、政治的に征服されないまでも、文化的にイスラームを核とした文明に大きな影響を受けた地域に漠然と意味する用語として使われてきた。それは、現在において、その住民の多くがイスラーム教徒の地域である」と記す。P.3-4。
13. 小杉 泰「『イスラーム世界はイラク戦争をどう見るか』『現代思想』総特集イラク戦争 中東研究者が鳴らす警鐘 2003年(平成15年)4月臨時増刊。P.163。
14. 羽田 正「イスラーム世界の創造」東洋叢書13 東京大学出版会 2005年(平成17年)7月初版。序論「イスラーム世界」という語のあいまいさ P.11-12。
15. 片倉もとこ 前掲書 P.12。
16. 板垣雄三「イスラーム誤認」岩波書店 2003年(平成15年)9月第1刷発行。P.228。

第2節 「右手に剣 左手にコーラン」

ヨーロッパ・キリスト教世界のイスラーム認識は、ヨーロッパにとって直接的な脅威としての認識だった。ヨーロッパにとって「サラセン人」「サラセン帝国」は敵であり、異質な世界だった。「サラセン人」は当初ギリシャ、ローマの人々がアラビア半島西北部のアラビア人を指して呼んだ名称だったが、「サラセン帝国」の発展でアラビア人だけでなく、アラビア語を使うイスラーム教徒(ムスリム)もそのように呼ばれ、しばしば軽蔑的な意味

があった、という。^(註1)近代では、東方を意味するアラビア語、シャルク、盗みを意味するサラカ、などと結び付けられた。そして、ヨーロッパ・キリスト教世界にとって、イスラームは破壊と荒廃を意味し、恐怖と野蛮を巻き散らす異教徒だった。

732年、フランク王国の宮宰、カール・マルテル (688年-741年) がポアチエの戦い (トゥール・ポワチエの戦い) でピレネーを越えてガリアに侵入したアラブの総督、ムサー・イブン・ヌサイルのイスラーム軍を破り、ムスリムのヨーロッパ侵入を阻止したが、それ以後もヨーロッパにとってイスラームは懲罰を加えるべき敵だった。^(註2)

英歴史家、エドワード・ギボン (1737年-1794年) は、カール・マルテルのフランス軍がトゥール・ポワチエの戦いでイスラーム軍 (ギボンは「サラセン軍」と記述している) を撃破していなかったならば、ポーランドからスコットランド高地まで全ヨーロッパがイスラーム軍に制覇され、「定めし今頃はオクスフォードの学位試験ではコーランが教授され、この大学の説教壇は割礼を受けた国民にマホメットが啓示した真正な真理を論証する場になっただろう。」と書いている。^(註3) ギボンは同時に「ムア人もしくははイスラーム教徒のフランス侵攻の史実は、その後、騎士道のロマンスの中で途方もなく歪められてイタリアの詩神によって極めて優雅に飾り立てられてきた数々の物語の素地となった」としている。^(註4) 「ローランの歌」はカール大帝 (シャルルマーニュ) のキリスト教軍とスペインの異教徒、サラセン軍との戦いをテーマにしたもので、大帝がサラセン軍に懲罰を加える武勲詩である。

ヨーロッパ・キリスト教世界では、イスラーム教を「マホメット教」と呼び、キリスト教の異端、あるいは模倣という見方が支配的で、クルアーンの一部の表現を歪曲し、「コーランか 剣か」「右手に剣 左手にコーラン」「四人妻」などを例に、偏った見方を取ってきた。「『コーランか 剣か』は十字軍以来、ヨーロッパ人が常用してきたイスラームへの悪口の言葉」だった。^(註5) 「コーランか 剣か」「右手に剣 左手にコーラン」は明治時代以来、イスラームの攻撃性、好戦性を印象付けるため、キリスト教世界か

ら日本に移入された見方である。日本で2番目に出版されたムハンマド伝、坂本健「^{マホメット}麻訶末」も欧州で意図的に伝えられてきた「コーランか 剣か」の見方を踏襲している。

- ^{かの さしゆ さき}彼左手に捧げたる^{アルコーラン}経典には^{アラ}天神の^{ふくいん}福音を^{つた}傳へて^{すう けう そ あほ}一宗の教祖と仰が
れ、^{めて ひっさ}右手に^{ヅルファカール}提げし^{こうぼつ いげふ な ひやくせん えいけつ}利剣もて攻伐の偉業を成して百戦の英傑と稱せら
れし^{ムハメット}麻訶末の^{ごと}如き^{あにき だい いじん}豈稀代の^{うべ}偉人ならずや宜なり。(註6)

「^{さしゆ さき}左手に捧げたる^{アルコーラン}経典」「^{めて ひっさ}右手に提げし^{ヅルファカール}利剣」はまさに「右手に剣，左手にコーラン」という欧州で生み出されたゆがんだイスラーム観を忠実に再現している。また，松本健「麻訶末」の表紙には，ムハンマドと見られる男性の上半身が描かれ，右手に剣，左手でクルアーンと見られる書籍の上部を支えている。また，忽滑谷快天「怪傑マホメット」の中表紙には，腰帯に短剣を差し，左手に大きな剣を持ち，右手を前方に掲げているムハンマドの立像が描かれている。イスラーム教では偶像崇拜が禁じられ，預言者の絵画もイラストも当然禁止される。

また「四人妻」についても，明治時代以降に刊行されたほぼ全てのムハンマド伝で言及されている。口村侘郎は，預言者マホメットが「我有（わがもの）だ，我れ自身の霊と一つだ」として「野聖マホメット」を創作したという。口村も「カヂジャ（筆者注・ムハンマドの最初の妻ハデージャ）さまが，お亡くなりになってから，あなたをお慕ひなさる女人達に対しても，あなたはまたまたその愛の濃やかで，その上そんなにも仮に十一人といふ可なりな恋人をおもちになったことも，また珍しいお方だ，とこれを不思議に思はれないありません。」と記述し，預言者が「好色」であることを間接的に表現している。(註7)

確かに，イスラーム教では男性が4人の妻を持つ事を認めている。しかし，クルアーン第4章「アン・ニサーア（女性章）」第3節にある通り，イスラームが生まれたアラブ社会の歴史的な事情と密接な関係がある。当時ジハード（聖戦）の中心となったアラビア半島では，男性は戦争で大勢亡

くなった。そのため孤児と寡婦の数が増大し、人々の生活は非常に苦しい状態になった。そこでムハンマドは神の啓示として、孤児と寡婦の面倒を見るため、男性が制限を越えない状態で1人以上の妻を持つ事を許したのである。しかし、イスラーム教は決して妻を多く持つ事を提唱しているわけではない。1夫1妻制を提唱しながら、制限と条件があることで、1人の男性が1人以上4人までの妻を持つ事を許可したが、夫は妻達を公平に扱い、誰1人に対しても婚姻上の義務を怠ってはならないとも規定している。

「^{めて}右手に剣、^{ゆんで}左手にコーラン」と「四人妻」は明治時代以来、日本社会に浸透しているイスラームへの誤解と偏見である。つまり、「イスラームは暴力的で好色」という誤解と偏見である。日本社会にそうした歴史的な背景があるにも関わらず、イスラームへの誤解、偏見を思い出させるような題名の著書が2007年(平成19年)3月に出版された。朝日新聞論説主幹が執筆した「右手に君が代 左手に憲法」である。^(註8) 著者は「『右手に君が代、左手に憲法』この本のタイトルをそう決めた後で、似たような歌のフレーズがあったことを思い出した。『片手にピストル 心に花束』である。沢田研二のヒットソングで、阿久悠作詞の『サムライ』だ。……タイトルは『片手にピストル……』でもよかったのかもしれないが、小泉さんは『右手に君が代 左手に憲法』にも思い当たることが多いのではなかろうか。……」とはしがきに書いている。^(註9)

この著者は沢田研二のヒットソングに似たようなフレーズがあったことを思い出して調べたというが、明治時代以来日本で誤解と偏見を与えてきた「右手に剣、左手にコーラン」という、忌むべき「似たようなフレーズ」には気づかなかっただろうか。著者は書名が「右手に剣、左手にコーラン」とよく似ていることについて、全くの偶然というより、全く考えてもいなかったと思われるが、社論の責任者としては、ヒットソングの歌のフレーズと同じような「フレーズ」をつけるのは余りに安易である。書物にとって書名は極めて重要であり、書名を決める際にはより慎重であるべきだろう。メディアこそ、イスラーム世界とムスリムの情報を公正、公平、

正確に伝え、論評する役割があるからだ。

第1章第2節 注

1. 改訂増補「西洋史辞典」京都大学文学部西洋史研究室編 東京創元社 昭和33年6月初版。P.264。「岩波イスラーム辞典」前掲書 P.416。
2. バーナード・ルイス「アラブの歴史」みすず書房 1967年11月第1刷発行。PP.118-119。
3. エドワード・ギボン「ローマ帝国衰亡史」第9巻 中野好之訳 筑摩書房 1992年4月初版第1刷発行。第52章 P.164。
4. 同上 P.163。
5. 藤本勝次「コーランとイスラム思想」世界の名著15 「コーラン メッカ啓示 メディナ啓示」中央公論社 1970年(昭和45年)9月初版発行。責任編集・藤本勝次 訳・藤本勝次 伴 康哉 池田 修。P.9-10。小村不二男「日本イスラーム史」日本イスラーム友好協会 1988年(昭和63年)発行参照。
6. 坂本 健「麻譚末」世界歴史譚第六編 博文館 1899年(明治32年)8月発行。P.146。
7. 口村 朗「野聖マホメット」ライト社 1923年(大正12年)4月発行。P.4, P.449。
8. 若宮啓文「右手に君が代 左手に憲法——漂流する日本政治」朝日新聞社 2007年3月第1刷発行。P.7-8。
9. 同上 P.7-9。はしがきでは「昨今、右手ばかりが大手を振るいがちなのを心配する私も、しかし、ただ左手を信奉するというものでもない。……」とも書いている。

第3節 「ユーラピア」の悪夢

2006年(平成18年)9月12日、ローマ法王ベネディクト16世は、母国、ドイツのレーゲンスブルク大学で講演し、イスラーム教の「ジハード(聖戦)」に言及した。法王は、ビザンチン帝国のマヌエル2世パレオロゴス皇帝が1391年にペルシャ人と交わした対話録の中で「(イスラーム教の預言者)ムハンマドが新たにもたらしたのを見せよ。剣によって自らの説くところを広めよと命ずるような邪悪と残酷さだけだ」と語った、という言葉

葉を引用した。さらに法王は自らの言葉として「皇帝は暴力を使って信仰を広めることがなぜ、不合理であるかを詳しく説明した。暴力は神の本性とも魂の本性とも相いれないからである。彼（ビザンチン皇帝）は『神は流血を喜ばれない。理性的に行動しないことは、神の本性に反する』と言った。信仰は肉体ではなく、魂から生まれる。人は信仰に導こうとするものは誰であれ、暴力や脅迫ではなく、上手に話し、適切に道理を説く能力が必要だ」と語った。^(註1)

ローマ法王は「暴力が神や人間精神の本質とは相容れない」と説いたが、イスラーム世界では、全世界のカトリック教徒の精神的指導者であるローマ法王の発言は「イスラームへの攻撃」と受け止められ、各種のイスラーム組織が抗議声明を出し、イスラーム教指導者が法王に謝罪を要求し、一般住民が抗議デモを繰り広げるほどだった。21世紀になっても、ローマ法王がイスラーム教を暴力的だという歴史的な発言を引用して批判したこと自体、「右手に剣，左手にコーラン」を思い起こさせる。

バチカン市国（ローマ法王庁）のタルチジオ・ベルトー國務長官（首相に相当）は同年9月16日、イスラーム諸国で反発が強まっている法王発言について「イスラーム教徒への攻撃と受け止められたことを、法王は大変申し訳なく思っている」と謝罪する声明を発表し、「深い遺憾の意」を表明した。現法王は教理省長官時代、キリスト教至上主義の保守派として知られ、ムハンマドへの言及もそうした背景から行われたと見ることができる。^(註2)

法王が「信仰は暴力や脅迫ではなく、理性によって広めるべきである」という趣旨の発言をしたことは理解できるが、暴力によって信仰を広めた例としてイスラームとムハンマドをあげたことによって、ムスリムの怒りを買ったといえる。

ヨーロッパ・キリスト教世界では、ムスリム移民人口の増大、イスラーム原理主義過激派のテロ活動などに対する反発が強まっている。EU(欧州連合) 諸国の新右翼政党や極右組織はイスラーム世界からの移民を排除する動きを加速させている。いわゆる、欧州での「イスラーム嫌い」である。

EU諸国の主要なメディアは法王の暴力批判の発言を支持する論調を掲げた。英デイリー・テレグラフ紙は、ヨーロッパがイスラーム過激派のテロの脅威に直面しており、イスラーム教と暴力の関連を議論すべきだと主張した。また仏フィガロ紙は「イスラーム教徒の怒りの爆発は文明の衝突を煽り立てる（イスラーム諸国の）政治、宗教指導者たちにある」とした。その一方で仏ルモンド紙は「法王の発言は政治的に不適切だった」と批判した。^(註3)

ローマ法王の発言は、デンマークの保守系日刊紙、ユランズ・ポンテスが2005年9月30日付紙面でイスラーム教の預言者、ムハンマドの風刺画12枚を掲載し、ノルウェーのキリスト教系の雑誌マガジネットが2006年1月10日付の同誌に風刺画を再掲載したことで、預言者の偶像化を禁じるイスラーム諸国の反発を増大させた、こととも関連している。12枚の風刺画のうち、ムハンマドの黒いターバンを丸い爆弾に見立てて、そこから導火線を延ばした1枚、さらにムハンマドが右手に剣を握った3枚が、イスラーム教徒の怒りを買った。デンマーク駐在のイスラーム諸国大使はユランズ・ポンテス紙に謝罪を要求すると共に、ラムスセン首相に法的措置を検討するよう要請した。ラムスセン首相は2月3日イスラーム諸国の大使ら70人以上と会談し、風刺画掲載は不適切だったと申明したものの、「表現の自由」に触れ、明確な謝罪を避けたという。^(註4) サウジアラビア、リビア政府はデンマークからの大使の召還を決めた。パキスタン、アフガニスタン、パレスチナ自治区、リビア、フィリピンなどでイスラーム教徒がデンマークの国旗を焼いたり、バスに放火したり、一部の国で死傷者まで出た。

風刺画事件が拡大する中でユランズ・ポンテス紙編集長は謝罪の声明を発表したが、ヨーロッパの政府、メディアは「表現の自由」を理由にイスラーム諸国の意図的に政治問題にしたとして、不満を表明している。だが、英米両国のメディアは、「読者を無意味に傷つけない。裸や暴力の写真と同じだ」（英デイリー・テレグラフ紙）「表現の自由は断固信じるが、中傷にはくみしない」（英ガーディアン紙）「表現の自由には、異文化への無

神経さは含まれない。あの漫画はイスラーム教徒の疎外感を増幅させただけだ」(米ネーション誌)として、ムハンマドの風刺画を転載しなかった。^(註5)多くの日本人にとって、イスラーム教、預言者ムハンマド、ムスリム、クルアーンのイメージは非常に遠い世界の言葉と映っているとしても、日本メディアとしても、「表現の自由」とは切り離して、ムハンマドの風刺画の転載を見送ったのだろう。

ヨーロッパからイスラーム世界へと広がった風刺画事件は「表現の自由か」「宗教の冒瀆か」「文明の衝突か」の議論を生み出した。EU 諸国には 1500 万人を超すイスラーム教徒がいる。2001 年の「9.11」米同時多発テロ事件以後、ヨーロッパ市民は日常的にイスラーム教徒過激派のテロに脅えている。ヨーロッパはイスラーム系移民の受け入れにいらだちを強めている。そうした複雑な状況下で、ムハンマド風刺画事件が起き、ローマ法王のムハンマド批判が起きたといえる。

ヨーロッパ社会では、キリスト教の衰退と、イスラーム人口とイスラーム教の台頭に危機感を持つ市民が少なくない。ヨーロッパに住む多くのムスリムは納税し、法律を守る善良な市民で、「9.11」事件を含め、ヨーロッパの諸都市で起きているテロリストの攻撃にはきわめて批判的だ。にもかかわらず、ヨーロッパではギボンが指摘したように、いつの日かオクスフォード大学でクルアーンの解釈が講義され、大学構内にモスクが出現し、教授と多くのムスリム学生が礼拝していることを恐れている。つまりヨーロッパが「イスラーム化」されることへの懸念である。^(註6)100 年前、現在の EU を構成するヨーロッパの人口は世界人口の約 14% を占めていたが、2004 年には世界人口の約 6%、2050 年には世界人口の約 4% になるとされている。(国連推定) ニューヨーク大学のファーガソン教授は「ヨーロッパの人口減少は 14 世紀の黒死病の蔓延以来の減少であり、ヨーロッパ、アメリカの知識人の一部では、『新しいユーラシア』の台頭に言及する人がいる」と指摘する。^(註7)ヨーロッパがアラビア半島を中心とするアラブ地域のイスラーム教徒に占められ、「ユーラシア」という呼称になるという悪夢である。

第1章第3節 注

1. 2006年9月17日付読売新聞朝刊, 同日付朝日新聞朝刊。2006年9月18日付毎日新聞朝刊, 2006年9月26日付朝日新聞朝刊などを参照。
2. 2006年9月23日付朝日新聞朝刊。2006年9月27日付米ニューズウィーク誌(日本語版)「イスラム侮る聖なる失言王」などを参照。
3. 2006年9月20日付読売新聞朝刊。
4. 2006年1月31日付朝日新聞朝刊。
5. 富永 格「ムハンマド風刺画にゆれる欧州——文明の衝突か, 表現の自由の戦いか」『新聞研究』4月号 2006年 No.657。
6. Niall Ferguson, Herzog professor of history at the Stern School of Business, New York University <Eurabia> April 4, 2004 New York Times Magazine
7. 同上

第2章 ムハンマドと汎イスラーム主義

明治時代, 大正時代, 昭和時代の讀賣新聞朝刊, 夕刊, 付録, 号外の紙面^(注1)で記事化されたイスラームに関連する6語, 及びキリスト教に関連する5語の掲載件数を比較すると, 以下の表の通りである。

	明治 (38年)	大正 (15年)	昭和戦前I (10年)	戦前II (9年)	昭和戦後I (15年)	戦後II (10年)
回教	44	24	100	248	208	327
回々教	13	6	3	2	1	0
フィフイ教	16	1	0	0	0	1
マホメット	10	11	13	11	5	9
コーラン	5	2	11	15	30	31
アラビアンナイト	4	9	6	1	26	25
キリスト教	1157	1594	1983	490	1199	1865
基督教	224	217	314	49	62	185
耶蘇教	136	9	3	1	0	0
宣教師	460	156	89	80	111	122
聖書	76	120	197	32	136	283

読賣新聞の紙面検索では項目が重複したり、似たような項目が並列されているため、正確な件数を把握できない場合もあるが、それでも全体的な傾向をつかむことはできる。上記の表で明らかのように、明治時代の読賣新聞の検索では、キリスト教 1157 件、聖書、76 件、宣教師 460 件で、回教 44 件、コーラン 5 件、マホメット（ムハンマド）10 件などとなっており、読賣新聞紙面ではイスラームに関する情報より、キリスト教関連の情報が絶対的に多かったことを示している。

その一方で、読賣新聞の伝えるイスラームに関連する記事は断片的で、イスラーム世界の動きを継続的、系統的には伝えていなかった。1884 年（明治 17 年）、英国によるスーダン支配に抗議するマフディ（マーギー）の反乱に関する記事やムハンマドの持病説、1912 年（明治 45 年）1 月インド人ムスリムの不買運動などの記事を以下に示す。

- 埃及の騒動 マホメット・アミッドといふもの兵を蘇丹地方に起し、既に埃及軍の総督ヒックス侯を破り、賊威ますます盛んなる事は前号の紙上へも出しましたが、アミッドは無名の軍にては人望に協ふまじと思ふより回々教の救世主即ちマーギーなりと宣言して愚民を迷はし、いよいよ猖獗を極むる由。(注2)
- 回々教の祖師マホメットの止動病ありしことは有名なるものにして活発なる妄語を為せしことあり。(注3)
- ラングーン在留マホメット教信者たる印度人は伊土戦争の結果、甚しく伊太利人を憎み、今般伊國品非購買組合なるものを組織……(注4)

第 1 節 ムハンマド伝の翻訳・著述

ヨーロッパの知識人たちにとって、ムハンマドはどのように映っていたのだろうか。イタリアの詩人ダンテ（1265 年－1321 年／文永 2 年－元亨元年）は「神曲」地獄編で、マオメット（ムハンマド）を地獄の第八圏の第九囊に貶めている。「(第九囊は) 世界に不和論争、異端を導き入れた重罪

人の責めさいなまれるところ。マホメットは顔から尻まで真二つに引き裂かれ、見るも無残な有様で我れと我が胸をずたずたに引きちぎっている」^(註5)

- 中板や端板がなくなった樽でも、私がそこで見た、あごから放屁するところまでち割られた一人の者ほど、ひどく破れてしまうことはあるまい。彼の両脚のあいだには腸がぶらさがり、内臓と呑み込んだものを糞にする。汚らわしい囊がむきだしになっていた。私が全身の精力を傾けてそれを凝視していると、その者は両手で胸を開いていった。私のからだがかんんに裂けているか見給え。マオメットがいかにか斬り刻まれているか見給え。あごから髪の生え際まで顔を切られて泣きながら私の前をゆくのはアリだ。……^(註6)

ダンテだけではない。17世紀から19世紀にかけて欧州で伝えられたムハンマドのイメージは「あまりにもあからさまな敵意に、驚かされることになる」。17世紀に活躍した歴史家、ピエール・ベイルはクルアーン学の権威で、一夫多妻と復讐を除けばキリスト教の道德律とそれほど違わないとしながらも、イスラーム教に不当な先入観を持っていた、という。^(註7) フランスの作家、哲学者、ヴォルテール（本名フランソワ・マリー・アルエ）（1694年－1778年／元禄7年－安永7年）の悲劇「狂信、あるいは預言者、マホメット——5幕の悲劇」（1741年＝寛保元年4月リール大劇場初演、1742年＝寛保2年コメディ・フランセーズ）でイスラーム教徒の狂信性を槍玉にあげた。^(註8)

ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ（1749年－1832年／延享6年－天保3年）はヴォルテールの戯曲をドイツ語に翻訳したが、ヴォルテールのムハンマド像がピエール・ベイルやハンフリー・プリドーの見方と同じだったことに批判的だった。ゲーテはペルシャの詩人ハーフィズ（Hafez）の詩やクルアーンを読み、それらに影響を受け、「西東詩集」を残した。ゲーテはまた、1814年（文化11年）「詩と真実・第3部」の中で青年時代に手がけた戯曲「マ

ホメット」のプランを記述しているが、戯曲そのものは紛失したと見られている。現在では、戯曲の断片としてマホメットを称える歌だけが残っている。^(註9)

日本ではイスラームについても、ムハンマド、クルアーンについても、明治時代以前にはほとんど伝播してこなかった。明治以前のムハンマド伝については、1840年（天保11年）中国から長崎へ持ち込まれた書籍の禁書目録に、中国のイスラーム学者、劉介廉（約1655年－1747年／慶安8年－延享4年）によって書かれたムハンマドの伝記「天方至誠実録年譜」が含まれていたという。^(註10)「天方至誠実録年譜」は1721年（享保6年）前後に劉介廉が記述した預言者ムハンマドの伝記を含むイスラームの書で全20巻から成り、1778年（安永7年）ごろに袁国作が刊行したとされる。一般に「天方至誠実録」と呼ばれ、20巻中第3巻が「年譜」に相当するが、長崎で焼却処分されたのは20巻全部という。「天方至誠実録年譜」はキリスト教宣教師で中国キリスト教文学協会のアイザック・メイスンによって中国語から英訳され、1921年（大正10年）上海で出版された。^(註11)

「天方至誠実録」の日本語訳は、日本人ムスリムの1人で2度のメッカ巡礼を果たした田中逸平が1922年（大正11年）9月に翻訳したが、すぐには出版されず、1941年（昭和16年）12月、大日本回教協会出版部から出版された。田中は1922年（大正11年）7月18日付国民新聞に「天方至誠実録年譜の刊行と袁國作に就いて」と題して劉介廉研究の成果を発表、さらに雑誌「日本及日本人」同年10月号に「支那回教の発達と劉介廉」を著している。^(註12)

日本ムスリム協会の樋口美作会長は「(明治時代に)キリスト教が先進国の宗教として、日本人にハイクラスのイメージを与えたのに対し、イスラームはいわば未開の宗教として問われ、およそイスラーム本来の宗教的本質からかけ離れた、偏狭と誤解に満ちたものであった。このイスラームが背負った重いハンディキャップは、今も日本社会の一部にその影を落としている」と主張している。^(註13)

日本で刊行されたマホメット（ムハンマド）に関する翻訳書ないし著書

は約60点にのぼる。^(註14) その中で明治時代と昭和時代前半に刊行された以下の4冊について検討する。

「馬哈黙傳」 ホンフリー・プリドゥ 明教社 1875年(明治9年)5月

「英雄崇拜論」 トーマス・カーライル

警醒社 1900年(明治33年)10月

「怪傑マホメット」 忽滑谷快天 井冽堂 1905年(明治38年)11月

「聖ムハンマッド小傳」 有賀阿馬土・西本幹

日本イスラム布教本部 1935年(昭和10年)4月

1. ホンフリー・プリドゥ著 ^{はやしただす} 林董 訳述 ^{マホメットでん} 「馬哈黙傳」

附録并2冊 本文160ページ 付録92ページ 明教社

1876年(明治9年)5月2日著作権免許

「例言」によると、「馬哈黙傳」の原本は1808年「英国ノ僧正官ナル、ホンフリー・プリドゥ氏ノ著ニシテ原名ヲ『ライフ・オフ・マホメット』ト云ヒ」、浄土真宗本願寺派の僧侶、島地黙雷(1838年-1911年/天保9年-明治44年)（「我が教壇ノ盟長黙雷鳴地」と姓名が逆に記されている）が「諸教ノ概略ヲ遍ネク伺察セン為ニ」西本願寺から海外に派遣され、英国ノリッジの大僧正、ホンフリー・プリドゥ(ハンフリー・プリドー) (1648年-1724年/慶安元年-享保9年)の「マホメットの生涯」を入手し、赤松連城(1841年-1919年/天保12年-大正8年)に翻訳を依頼、赤松が林董(1850年-1913年/嘉永3年-大正2年)^(註15)に「口訳」を要請し、口述筆記したという。^(註16) 島地黙雷は1868年(明治元年)京都で赤松連城と共に西本願寺の改革を建白したたことで知られる。島地は1872年(明治5年)岩倉使節団の一員として欧州視察に行き、赤松連城も随行した。林董も岩倉使節団の2等書記官だった。

杉田英明によると、プリドーの正式書名は「マホメットの生涯に完璧に顕示された詐欺の本質、およびキリスト教擁護のための附説」(1697年=元禄10年初版刊行)で、バルテルミ・デルブロ(1625年-1695年/寛永2

年一元禄8年)の『東洋全書』などと並ぶきわめて偏向した「キリスト教的不寛容の古典的見本」として、今日なおその名を知られている書物である」という。^(注17) デルブロの「東洋全書」では、預言者ムハンマドは「これぞ名うてのペテン師のマホメット。宗教の名を騙るに至った異端、いわゆるマホメット教の始祖にして創立者」と記されている。^(注18)

「例言」も「本傳ハ耶蘇宗ノ僧正タル人ノ手ニ成リシヲ以テ言稍々憎愛に涉リ公平ヲ失スルガ如キ者アルヲ免レズ。之ヲ以テ林先生ノ更ニ近代ノ書中ニ於テ欧州諸大家ノ回教及ビ其教祖ヲ論評セシ者ヲ纂輯セラレシヲ以テ附録トス」と断っている。^(注19) 林董訳述の一部を抜粋する。

- 馬哈默其初メ行ヒ放蕩ニシテ人ヲ殺シ物ヲ奪フ等ノ悪業ヲ好ム^(注20)
- 馬哈默ノ欲スル所ハ其榮華ト色欲ナリ。即チ自ノ版図ヲ拡メシト多クノ妻ヲ蓄ヘタルニテ知ルベシ。此二件其説キタル教中ニ貫通セリ。即チ戦鬪ノ法ヲ示シ、女ヲ自由ニスルコトヲ示シタルニテ分明ナリ。^(注21)
- 彼レ(最初ノ妻ハディージャ)ガ歿スルヤイナヤ直チニ多クノ妻ヲ娶リ、亦妾ヲ養ヘリ。其最モ少キ説ニ因ルニ十五回婚娶ヲ為セリト云フ。他ハ二十一回ナリト云フ。^(注22)

いずれの表現も、ムハンマドが好色漢で野心家、偽善者であることを強調している。「例言」で「公平ヲ失スルガ如キ者アルヲ免レズ」と認めざるを得なかったため、附録では欧州諸国の東洋学者の見解が紹介されたが、それもまたイスラームへの「偏狭と誤解」(樋口美作・日本ムスリム協会会長)を克服するものではなかった。

- 回教ハ(中略)更ニ活機ナシ。繁茂スル能ハズ。変革スル能ハズ^(注23)
- 回教ハ最モ劣リタル者ナリ。……神ノ設備足セル耶蘇教ハ必ズ単味ナル回教ヨリモ尊キアリ^(注24)

ハンフリー・プリドーのムハンマド伝はキリスト教「大僧正」の立場を強く反映していたといえるが、27歳で訳述した林董は、欧州のキリスト教関係者が偏見と誤解をもって描いたムハンマド像に気付かなかったのだろうか。林は17歳から2年間、幕府派遣の留学生として英国に滞在、26歳でミル「弥児経済論」を翻訳するなど、相当の英語力を持っていたと思われる。しかし、林は当時、プリドーに反論するだけのイスラームに関する知識を持ち合わせていなかったのかもしれない。

2. トーマス・カーライル「英雄及び英雄崇拜論」

本文 387 ページ 警醒社 1900 年（明治 33 年）10 月発行。^(註25)

本文 434 ページ 岩波書店 1949 年（昭和 24 年）5 月第 1 刷発行。

1893 年（明治 26 年）7 月 25 日付讀賣新聞に「トーマス・カーライル」の書評が掲載されている。

- 此頃其（『十二文豪』）の魁として出たるは平田久といふ人の『トーマス・カーライル』なり。抑此書は翻訳か編纂か著作か何のはしがきもなければ知るに由なしと雖も、氏が斯る十九世紀の大怪物を捕へ来り、造作もなく料理して彼が性行と歴史とを叙説し、未だ世のカーライルを知らざる人のために紹介の労をとられしを謝す。^(註26)

平田久「トーマス・カーライル」（1893 年＝明治 26 年）は明治 20 年代、30 年代の日本で、「十九世紀の大怪物」カーライルへの関心を一気に高めたとされる。カーライルの「英雄及び英雄崇拜論」の翻訳には、土井晩翠「英雄論」（1898 年＝明治 31 年）、住谷天来「英雄崇拜論」（1900 年＝明治 33 年）、栗原古城「英雄研究」（1912 年＝大正元年）、柳田泉「英雄及英雄崇拜論」（カーライル全集 5）（1924 年＝大正 13 年）、増田藤之助「カーライル英雄崇拜論」（1933 年＝昭和 8 年）、などがある。^(註27) カーライルの「英雄崇拜論」が日本語に翻訳され、世に知られるにつれ、ムハンマドの伝記

への関心も強まった。坂本健「麻詞末」(1899年=明治32年)、池元半之助「マホメットの戦争主義」(1903年=明治36年)、忽滑谷快天「怪傑マホメット」(1905年=明治38年)、松本起「マホメット言行録」、口村信郎「野聖マホメット」(1923年=正12年)等の著作はカーライルの「英雄崇拜論」が影響を与えたと見られる。これらの著作はムハンマドが啓示を受けてイスラーム教を広めた苦難の歴史より、ムハンマドの英雄的、超人的な「生き方」に重点がおかれているように見える。

19世紀前半に出版された書籍で「英雄崇拜論」ほど世界に流布したものはないと言われる。カーライルは卓越した個性、つまり真性、聖性の英雄が歴史を作り出すと信じ、詩人(ダンテ、シェイクスピア)、僧侶(ルター)、文人(ルソー)、帝王(クロムウェル、ナポレオン)としての英雄と共に、「預言者としての英雄」マホメット(ムハンマド)を選んだ。カーライルは、プリドーをはじめ、欧州の知識人の間に広く流布されてきた憶説、「歪んだムハンマド像」を否定し、イスラームに新たな視点を与えた。

- マホメットを以て策略にたけた欺瞞者、虚偽の化身となし、彼の宗教をば山師的詐術と痴呆との集塊に過ぎずとなすが如き、吾等の間に広く流布されている憶説は、今は慥かに何人の心にも支持し難いものとなりかけている。キリスト教に対する善意の熱心さから、この人物の周囲に積み上げられた虚構の説話は、徒に当事者たる吾等の恥辱となる許りである。^(註28)
- ああ実に嘆かわしきはこの種の説である。吾等にして若し神の創造界に於ける何物かに就いて知らんと欲するならば、斯かる説に全然耳を貸してはならぬ。^(註29)
- 然らば、このマホメットを、吾等は決して空虚な、芝居気の多い人物、憐れむべき、自覚的な、野心家の策士とは考えないようにしよう。吾等は彼をかかえる人物と想像することができぬ。彼の伝えた使命は、素朴ながらも眞実なものであった。不可知の深淵からの混乱せる、眞摯な声であった。彼の言葉は偽りではなかった。又この下界に於ける

彼の活動も同様である。決して空虚でもなく、虚飾でもなく、自然そのものの偉大な胸奥から投げ上げられた、灼熱せる生命の塊である。世界に点火すること、それが世界の創造者がこのものに命じたところである。またマホメットの過失、欠点、不誠実すら、かかるものが如何に手際よく彼の不利に立証されようとも、この根本的事実を揺がすに足らぬ。^(注30)

カーライルはムハンマドが「野心的な策士」ではなかったし、「官能的な人間ではなかった」^(注31)とし、「予は又マホメットが偽善的臭味を全く脱している点で彼を好む」^(注32)と言い切る。

3. 忽滑谷快天「^{ぬかりやかいてん}怪傑マホメット」

本文 230 ページ 井冽堂 1905 年(明治 38 年) 11 月 24 日発行。

忽滑谷快天(1867 年—1934 年／慶応 3 年—昭和 9 年)は曹洞宗の僧侶で、駒澤大学(旧曹洞宗大学)第 8 代学長(1920 年—1934 年／大正 9 年—昭和 9 年)、文学博士。同時に埼玉県川越市の蓮光寺住職であった。忽滑谷は明治 20 年曹洞宗大学林を卒業し、明治 26 年慶応義塾大学を卒業、明治 27 年東京曹洞宗中学林長兼教授に就任、明治 44 年宗務および学術視察のため 3 年間欧米諸国に派遣された。^(注33)東隆慎は「僧侶としてはもちろん、一般人としても出色の能力の人であったことが知られる」と評価している。^(注34)

仏教学の専門家である忽滑谷がなゼイスラーム教の預言者、ムハンマドに関心を持ったのだろうか。忽滑谷は「怪傑マホメット」の序で次のように述べている。

- 仏教、基督教、回教、これ世界の三大宗教なり。仏教と基督教とは既に我國に傳はりて、其教祖も亦世人の熟知する所なり。然れども、回教に臻りては未だ我國に傳はらず。従て其教祖マホメットの性行も亦世人之を知る者尠し。……マホメットの生活は徹頭徹尾世間的なり。

渠^{かれ}は単純なる宗教家にあらず。渠^{かれ}はアラビア人の預言者たり。君長たり。將軍たり。政治家たり。故に其性行も亦大に前二者（筆者注・釈尊，キリスト）と異なれり。……マホメットは預言者として多くの妻妾を納れ、……戦争を以て宗教を拡め、敵を殺すこと数を知らず。然れども之を以て渠^{かれ}が惇徳を敢てし、悪逆を逞うしたりといふ者あらば并は過てり。何となれば多数の妻妾を蓄ふるは東洋的君主の常慣にして、軍人が人を殺すは固より基本領なればなり。^(註35)

- 吾人が本傳を草したるは文学的作品としてにあらずしてアラビア的宗教家の面目を讀者に示さんとするの微意に外ならず。吾人は仏教徒なり。されば如何なる宗教にも一分の眞理あるを疑はず。従ひ而して回教の教理と其教祖とに対して尊敬を払ふことを忘れず、讀者も亦公平と寛容とを以て本傳の主人公を見るあらば著者が望外の喜びなり。^(註36)

忽滑谷はイスラーム教が世界3大宗教の1つであるにもかかわらず、日本にほとんど伝わっていない現実を理解し、「アラビア的宗教家の面目」を讀者に示そうとした。忽滑谷が「如何なる宗教にも一分の眞理あるを疑はず、従ひ而して回教の教理と其教祖とに対して尊敬を払うことを忘れず」という考え方は、欧米知識人、宗教家には見られない視点であり、彼らの歪んだイスラーム批判とはっきり一線を画すもので、高く評価すべき点だろう。忽滑谷が仏教徒であり、仏教徒にとって「公平と寛容」が仏教の精髓であることが、ムハンマド理解に役立ったと言えないだろうか。

忽滑谷は「マホメットは偉傑中の怪なるもの」であり、「渠^{かれ}は無学の学者、動物的預言者、怯懦なる勇者、慈悲なる殺人者、一神教的迷信者、一國の君主たる貧民、王國の建設者たる法師、天使と直接に談話を交ふる人間である。一言に之を約すれば渠^{かれ}は神性と動物性を兼有した怪傑である」と説明している。^(註37)

同書には、東京・麻布飯倉6丁目13に住むアーサー・ロイドの1905年（明治38年）11月6日付英文書間がある。ロイドがどのような人物か不明

だが、書簡ではロイドがムハンマドを大変尊敬しているが、ムハンマドの教えには①運命論を信じ、不幸が襲った時に「シカタガナイ」（ローマ字綴り）と言ってしまう②一夫多妻、同棲、奴隷を認めている、等の弱点がある、としている。^(註38)

忽滑谷は「第二章 宗教家としてのマホメット」より、「第三章 政治家并に将軍としてのマホメット」「第四章 個人としてのマホメット」に多くの紙面を費やしている。しかし、ムハンマドの「妻妾」については「老将軍（マホメット）は老いて益々淫蕩となり……」養子ゼイドの妻ゼイナブの美に打たれ、離婚後にゼイナブを6人目の妻とした。「此の如くマホメットはアラビア的道德の標準より見るも尚ほ不倫なるべき結婚も敢てし、之を神意に託して其醜を掩はんとしたのである。憐れ、神意も天啓も之に至りては半文銭の価値もなく、淫蕩なる老翁が浮れたる囁語となったのである。」^(註39)と記し、一夫多妻に批判的な見方というより、「神意も天啓も半文銭の価値なし」と突き放している。

「怪傑マホメット」には巻頭の1ページ全体に「マホメット」の全体像が描かれている。腹部の帯に短剣を差し、左手で剣を下げ、右手を前方に挙げています。堂々とした「怪傑」像である。偶像崇拜を禁じているイスラーム世界では預言者ムハンマドの肖像画は禁じられている。1899年(明治32年)に刊行された坂本健^{マホメット}「麻譚末」の巻頭口絵にも、ムハンマドと見られる男性の半身像が左手で剣を立て、右手でクルアーンと見られる書物を支えている図が掲載されている。同時に「麻譚末」には「左手に捧げたる^{さしゆ}経典^{アルコール}」「右手に提げし^{めて}利^{ひっさ}劍^{ゾルフアカール}」という表現が見られ、ヨーロッパで広がっていたイスラームへの偏見を示す図像や言葉がそのまま日本語訳に移入されたのであろう。^(註40)「怪傑マホメット」と「麻譚末」の図像ではなぜか、剣を持つ手が左手と右手に分かれている。

忽滑谷は最後にカーライルのムハンマド論を掲げ、「^{かれ}渠が全生涯の両面を叩いて読者の賢明なる判断に訴へたのである」と記した。「怪傑マホメット」は、イスラームの宗教的本質を分析、解説したのではなく、「徹頭徹尾世間的なムハンマドの生活」を描くことで、ムハンマドの全体像をつかもうと

したと見られる。

4. ^{あるがあまど}有賀阿馬土・^{にしもとみき}西本幹「聖ムハムマッド小傳」

本文 58 ページ 発兌・イスラム布教本部

1935 年（昭和 10 年）4 月発行。

有賀阿馬土（文八郎）は日本人で 3 人目のムスリムで、日本人ムスリムとして初めてクルアーンの日本語訳を刊行した。第 2 章第 1 節 3 で詳述する。「聖ムハムマッド小傳」はわずか 58 ページの小冊子で、「イスラム教祖聖ムハムマッド師は、唯一眞神の黙示を得て、クルアーン経を口述し、イスラーム経を確立し、僅かに二十有餘年の間に、亞刺比亞全國民を感化し、同國を統一し、皇帝となり、法王となり、大元帥となりて此世を去り給ひしが其法力は、今日全世界に七億の信徒を有するに至る。」と書き出している。^(註41)

有賀から同書の序を懇請された前内務大臣、安達謙藏は「従来我々日本人は欧米人と即ち基督教信者と、より早く接触し、交際したれば、イスラム教に対しては欧米人を通じて之を眺め、基督教を透して之を了解したるものにて直接該教の眞髓に觸れて研究したる者は頗る寂寥たるものなり。明治時代の文豪——欽定憲法の起草者たる故井上毅先生のマホメット論は此の時代思想を代表せるものの如し。今其論旨を約言すればマホメットは姦豪の雄にして妖説を創作し、人民を蠱惑し、四方を略奪す。其勢の向ふ所敵なく、恰かも火の原を燎くが如し。元來教を説く者は釈迦の如き基督の如き皆世俗を離れ、権勢利禄の外に超絶したる者なるが、マホメットは宗教教化を利用して奪略の欲を壇にす其害毒は洪水猛獸も未だ以て譬ふるに足らずと。此の回教觀が明治年間或は大正時代迄をも我々日本人を支配したる概念なりしが如し」と書いている。^(註42)

有賀は同書で「我が國民にイスラム信仰の必要」の一文を書き、大和民族の精神的同盟者はイスラム教徒であるとし、「一日も早く此イスラム教団を日本に出現して、彼の数億の既成イスラム教徒と提携し、以て白人の暴

圧より免るるの策に出づべきことを我が國民に勧告して止まざるところである」とし、白色人種に圧迫される有色人種の団結を呼びかけている。(註43)

有賀はイスラームの唯一眞神と日本の神祖、天の御中主あめみなかぬしの神と「同一なる神様」でありムハンマドの軍事魂と大和魂が「偶然一致するもの」であると主張し、極めて特異な考えをもっていた。有賀は後年の伝道活動のために、携帯が便利な小冊子として「聖ムハンマド小傳」を出版したと思われる。

第 2 章 注

1. 讀賣新聞は 1874 年(明治 7 年) 11 月 2 日に創刊された。発行所は日就社。日就社は 1870 年(明治 4 年) 子安峻, 本野盛亨, 柴田昌吉の 3 人が協力して活版印行所として出発した。創刊時の社長は子安峻, 初代編集長は鈴木田正雄。当初は隔日刊, 定価 1 部 8 厘, 月ぎめ 10 銭。1875 年(明治 8 年) から日刊。総傍訓つきの本格的な大衆新聞だった。合名会社日就社は 1917 年(大正 6 年) 12 月, 讀賣新聞社と改称した。1874 年(明治 7 年) 11 月 2 日 讀賣新聞創刊号社告は以下の通り。

稟 告

此新このしんぶん紙かみは、女おんな童こどものおしえにとて為ためになる事柄ことを誰だれにでも分わかるようかいに書かて
だす旨趣つもりでござりますから、耳みみ近ちかい有あ益いことは文ぶんを談話はなしのようしたたに認おなめて御名おな
まえ所ところがきをしるし、投書よせぶみを偏ひとえに願ねがいます

○

廣しらせ告みせびら, 見世開うき, 賣だり出だしなど, 何なにによらず御頼おたのみし次第だいに此新聞紙このしんぶんしへ入いれて諸
方ほうへお志しらせ申まします

○

弊わたくし社どもの儀ぎは活版印行かっぱんいんこうに御座ごりますれば活版一式かっぱんいっしきに何物どんなものでも摺立すりたて又は本類ほんるいの
仕立したても御望おのぞみ次第だい極ごく提手て早はやく至いたし、廉価ねやすにいたします故御用ゆえのほど願ねがいます

本局 東京都虎之門外琴平町一番地 活版印行所 日就社

編集 鈴木田正雄

印行 伊藤 重義

2. 1884 年(明治 17 年) 3 月 5 日付讀賣新聞朝刊。

3. 1884年(明治17年)12月2日付讀賣新聞朝刊。「才子多病」の記事で「或る西字新聞」から引用している。検索見出しは「狂気と天才は紙一重 西洋の名士・豪傑の挙動を外国新聞から紹介」。
4. 1912年(明治45年)1月10日付讀賣新聞朝刊。

第2章第1節 注

5. 井筒俊彦「マホメット」講談社学術文庫 講談社 1989年(平成元年)5月第1刷発行。P.18。笠間杲雄「ダンテ新曲に及ぼせるイスラム思想の影響」『月刊回教圏』第4巻第10号所収。1940年(昭和15年)10月発行 PP.2-7 参照。
6. 野上素一訳「ダンテ」世界古典文学全集35 筑摩書房 1964年(昭和39年)7月発行。地獄篇第28歌 P.92。アリはムハンマドの従弟で後に女婿、第4代カリフとなった人。
7. アンヌ・マリ・デルカンブル「ムハンマドの生涯」改訂新版 PP.148-150。
8. 同上 P.152。鈴木邦武「ゲーテとコーラン——『西東詩集』成立に関する比較文学的研究, その1」南江堂 1977年(昭和52年)1月初版発行。PP.27-29。
9. 鈴木邦武 同上 P.55, P.71。「マホメット賛歌」の日本語訳は同 PP.57-63。
10. 大庭 脩「江戸時代における中国文化需要の研究」同朋舎出版 昭和59年6月初版第1刷発行。PP.60-62。大庭脩によると「天方至誠実録年譜 右者初而持渡候処専邪宗門之儀認候書ニ付申上候処天保十二年丑年四月九日於聖堂焼捨被仰付以来御禁書ニ相成申候」と記されている。「貞享2年以後、書物改めはきわめて嚴重になり、キリシタンの書ではないムハンマド伝まで禁書とされた。書物改役が回教の書であることを認識した上で邪宗門と見なしたかどうかは明らかでないが、この時に禁書の判断が下り、4月9日に焼捨処分にされた」という。この他、以下の文献を参照。
杉田英明著「日本人の中東発見——逆遠近法のなかの比較文化史」中東イスラム世界2 東京大学出版会 1995年6月初版。P.145。
藤本勝次「コーランとイスラム思想」世界の名著『コーラン』中央公論社 1960年9月初版発行。P.9。
「中国伊斯蘭百貨全書」四川辞書出版社 1994年刊行。
傳統先著 井東憲訳「中国回教史」原書房 昭和17年刊 昭和50年2月復刻。
11. <THE ARABIAN PROPHET A Life of Mohammed From Chinese

and Arabic Sources> A Chinese Moslem Work by LIU CHA-LIEN, Translated by ISSAC MASON of Friends' Foreign Mission Association, and Christian Literature Society for China, Honorary Secretary, Royal Asiatic Society, North-China Branch Printed by the Commercial Press Limited Shanghai 1921

12. 坪内隆彦「イスラーム先駆者 田中逸平・試論」参照。田中逸平(1882年—1934年/明治15年—昭和9年)については第2章第1節4を参照。
13. 樋口美作「日本におけるイスラーム50年の歩み」。2001年5月9日アラブ・イスラーム学院新装開校記念シンポジウム「日本とアラブの文化交流について—その歴史及び将来」での講演。
14. 国立国会図書館書誌(和図書)検索条件「マホメット」で検索すると、計60点が表示される。そのうち主なムハンマド伝は以下の通りである。

「馬哈默傳」ホンフレー・プリドゥ		明教社 1876年(明治9年) 5月
「麻譚末」坂本 健		博文館 1899年(明治32年) 8月
「マホメットの戦争主義」池元半之助	春山房	1903年(明治36年) 7月
「怪傑マホメット」忽滑谷快天	井冽堂	1905年(明治38年) 11月
「マホメット言行録」松本 赳	内外出版会	1908年(明治41年) 7月
「野聖マホメット」口村侷朗	ライト社	1923年(大正12年) 4月
「聖ムハムマッド小傳」有賀阿馬土, 西本幹		
	日本イスラム布教本部	1935年(昭和10年) 4月
「マホメット」中川 重	日本社	1935年(昭和10年)
「神の預言者マホメット」須田整一	東洋閣	1937年(昭和12年)
「マホメット伝」ワシントン・アーヴィング		
	東邦書院	1940年(昭和15年)
「マホメット伝」エミル・デルマンゲム		
	白水社	1940年(昭和15年) 12月
「マホメット伝」桜井 匡	三省堂	1942年(昭和17年)
「マホメット」内藤智秀	広島図書	1950年(昭和25年)
「マホメット」井筒俊彦	弘文堂	1952年(昭和27年)
「マホメット」沢田 謙	偕成社	1954年(昭和29年)
「マホメット」嶋田襄平	角川書店	1966年(昭和41年)
「ムハンマド—預言者と政治家」モンゴメリー・ワット		
	みすず書房	1970年(昭和45年) 12月
「マホメット」藤本勝次	中央公論社	1971年(昭和46年)

- 「マホメット」嶋田襄平 清水書院 1975年(昭和50年)
- 「マホメット」井筒俊彦 講談社 1989年(平成元年)5月
- 「マホメット」アンヌ・マリ・デルカンブル
創元社 1990年(平成2年)12月
- 「予言者マホメット」ワシントン・アーヴィング
新樹社 1991年(平成3年)4月
- 「マホメットの生涯」ビルジル・ゲオルギウ
河出書房新社 2002年(平成15年)8月
- 「ムハンマドの生涯」アンヌ・マリ・デルカンブル
創元社 2003年(平成15年)9月
15. 林 董 (1850年-1913年/嘉永3年-大正2年) 佐倉・順天堂を開いた佐藤泰然の5男として生まれる。1862年(文久2年)横浜で幕府御典医, 林洞海の養子となる。西洋医学を学ぶと共に英語を学ぶ。エルトゥール号遭難事件当時, 兵庫県知事として生存者の対応, 政府との連絡などに当たった。1900年(明治33年)イギリス公使となり, 1902年(明治35年)日英同盟協約に調印, その功績を認められ, 子爵(後に伯爵)となった。日露戦争勝利後の1905年(明治38年)12月大使館昇格に伴い, イギリス大使となり, 帰国後の1906年(明治39年)外務大臣となった。1911年(明治44年)第2次西園寺内閣で逓信大臣, 外務大臣を務めた。「佐倉市郷土の先覚者 林董」千葉県佐倉市教育委員会 1997年(平成9年)9月発行。
16. ホンフリー・プリドゥ「馬哈黙伝」「例言」P.1。
17. 杉田英明 前掲書 P.146。羽田正「イスラーム世界の創造」東洋双書 13 東京大学出版会 2005年7月初版。PP.110-115参照。
18. エドワード・サイード著「オリエンタリズム」上, 今沢紀子訳 P.154。
19. ホンフリー・プリドゥ前掲書「例言」P.2。
20. 同上七十丁。
21. 同上七十一-七十一丁。
22. 同上七十一丁。
23. 同上附録四十二丁。
24. 同上附録四十四丁。
25. トーマス・カーライル著・住谷天来訳「英雄崇拜論」(全387ページ) 警醒社 1900年(明治33年)10月発行。訂正増補版(全512ページ) 警醒社 1917年(大正6年)発行。住谷天来(1869年-1944年/明治2年-昭和19年)は群馬県高崎で養蚕業を営む住谷弥平次の次男として生まれた。1888年(明

- 治21年)前橋教会で洗礼を受けた。その後東京に出て慶応義塾を卒業し、雑誌「警世」の記者となった。数多くのキリスト教関係の訳本を出版、伊勢崎教会の牧師にもなった。
26. 1893年(明治26年)7月25日付讀賣新聞朝刊1面。「最近出版書」の見出しで平田久「トーマス・カーライル(京橋区日吉町民友社発行)を紹介している。
 27. 杉田英明 前傾書 P.168。他に成田山仏教図書館蔵書目録などを参照。
 28. トーマス・カーライル 前傾書 P.65。
 29. 同上 P.66。
 30. 同上 P.69。
 31. 同上 P.102。
 32. 同上 P.104。
 33. 東 隆眞「忽滑谷快天とその著『怪傑マホメット』のこと、二、三」『イスラム世界』57 特別寄稿 2001年(平成13年)8月発行。PP.45-62。東 隆眞(1935年=昭和10年生まれ)は曹洞宗僧侶、文学博士、駒澤女子大学学長。イスラム協会会員。多くの仏教関連の著書があるが、本論では「日本の仏教とイスラーム」春秋社 2002年(平成14年)1月第1刷発行を参照。
 34. 同上東隆眞 前傾書 P.47。
 35. 忽滑谷快天「怪傑マホメット」序 PP.1-2。忽滑谷は同書の「注意四則」の中で「マホメットを指したる代名詞は必ず渠^{かれ}の字を用ひ、他は彼の^{かれ}字を用ふ」として、ムハンマドと他の人物を区別している。
 36. 忽滑谷快天 前傾書 P.3。
 37. 同上 P.1。序論・第1章 マホメットが生まれたる社会 第1節 総序参照。
 38. 同上。13. Iigura, Rokuchome, Asabu, Tokyo. 6. Nov. 1905 Arthur Lloyd の献呈文2ページ分が巻頭に掲載されている。
 39. 同上 PP.191-195。「第四章 個人としてのマホメット 第一節 マホメットの妻妾」。
 40. 坂本 健「麻譚末」世界歴史譚第6編(本文146ページ)博文館 1899年(明治32年)8月発行。「緒言」2ページ。坂本健(健一)については第3章第1節クルアーン翻訳で詳述する。
 41. 有賀阿馬土・西本 幹「聖ムハマッド小傳」P.1。
 42. 同上 P. (1) - (2)。
 43. 同上 P. (6) - (8)。

第2節 エルトゥールル号事件と汎イスラーム主義

1. オスマン・パシャ来日

明治政府は列強との不平等条約の改正を模索する中で、オスマン・トルコ帝国（1299－1922年／正安元年－大正11年）との外交関係樹立にも関心を示しつつあった。1876年（明治9年）2月、在英公使館勤務を終え、帰国途中の中井弘と同じく外交官の渡辺洪基がイスタンブールを非公式に訪問した。^(註1) オスマン帝国外務省は日土間の外交関係の樹立に関心を示したが、予備的接触のままに終わった。また1881年（明治13年）には外務省理事官、吉田正春がトルコを訪問し、皇帝アブデュル・ハミト2世（在位1876年－1909年／明治9年－明治42年）と会見、日土両国間に修好条約締結の推進で合意した。^(註2) しかし日土両国とも西欧との不平等条約問題などを抱えていたこともあって、交渉は前進しなかった。

1887年（明治20年）10月には、欧米視察を終えた陸軍中将・小松宮彰仁親王が帰国途上にトルコを訪問し、アブデュル・ハミト2世と会見した。翌1888年（明治21年）5月、トルコ皇帝に対し明治天皇の「御親書」が送られた。皇族である小松宮彰仁親王のトルコ訪問と明治天皇の「御親書」はトルコ側に対日外交関係の樹立にかなりの関心を引き起こさせたといわれる。

1889年（明治22年）、アブデュル・ハミト2世は明治天皇への答礼とトルコ海軍軍艦の練習航海を兼ねて、軍艦エルトゥールル号（当時はエルトグロール、エルドグロウル号などと表記）を日本に派遣した。エルトゥールル号（全長76尺、幅15尺、2334トン）は1864年（元治元年）建造の木造老朽艦で、同艦の性能が遠洋航海に適さないなど、国内で派遣反対の動きが出て、出港が大幅に遅れた。乗組員は総勢650人、司令官兼特派公使オスマン・パシャ海軍少将が艦長を務めた。^(註3)

1889年（明治22年）7月14日、エルトゥールル号は日本に向けて出航したが、7月27日にスエズ運河で座礁し、修理のため1ヶ月以上も滞在、スエズを出航したのは9月23日だった。10月7日アデン、10月20日ボンベイ着、11月1日にコロomboに寄港し、11月15日シンガポールに到着し

た。エルトゥール号は各寄港地でムスリム（イスラーム教徒）から「大歓迎」されたという。^(注4)だが、エルトゥール号は財政的に窮地に陥り、石炭購入も難しくなり、帆走に適した時期まで待ったため、シンガポールに4ヶ月余り滞在することになった。司令官兼特派公使、オスマン・パシャは数名の将校とともに客船で日本に向かう案を検討したが、アブデュル・ハミト2世の許可が下りなかった。

1890年（明治23年）3月22日、エルトゥール号はシンガポールを出港し、サイゴンで石炭を調達したが、悪天候のため香港に4月26日に到着した。同号は5月5日に出港したが、再び悪天候に見舞われ、長崎には5月22日に到着、最終目的地の横浜に入港したのは6月7日のことだった。イスタンブール出港後、11ヶ月余りも経ていた。当初、トルコ、日本の間の航海は往復6ヶ月と計画されていたが、往路だけで2倍近い日数を費やしたことになる。^(注5)

1890年（明治23年）6月13日、オスマン・パシャ一行が参内し、明治天皇に拝謁し、アブデュル・ハミト2世の親書、勲章などを奏呈した。

- 土耳其の使節参内す。勲章捧呈として来朝されたる土耳其國使節の一行は昨十三日午後六時参内されたる由にて宮内省よりは御料の馬車を鹿鳴館へ差廻されたりとぞ。^(注6)
- （オスマン・パシャ一行は）随行員と共に同港永楽町の妓楼神風楼に登り一夕の歡を盡されしといふ。^(注7)
- 豫て記したる如く今度来朝の土耳其大使海軍少将エミン・ラスマン・パシャは勲一等に叙せられ、旭日大綬章を贈興し、尚其の他の随行員一同も勲三等旭日中綬章以下勲五等雙光旭日章を贈興せられたり。^(注8)

さらに6月29日には、かつてオスマン・トルコ帝國を訪問した小松宮彰仁親王がオスマン・パシャ一行を東京・駿河台の自邸に招待し、「宮内省官吏を始め各士官の打毬を一覧に供せし上饗宴を開かれしといふ。」^(注9)

2. エルトゥールル号遭難

オスマン・パシャ一行は東京、横浜で日本の皇族や民間人から大いに歓迎されたが、エルトゥールル号の日本訪問（横浜港停泊）には数々の不運が続いた。第1の不運は出航前にトルコ国内で安全性をめぐる議論があり、出航後は艦船の座礁、修理などから航海が大幅に遅れ、アジアの各寄港地でトルコ軍艦に対する不正確な批判や風評が続いたことである。^(注10)

第2の不運は、11ヶ月余りの長い航海の後、横浜港に入港し、オスマン・トルコ皇帝から明治天皇への親書、勲章の奉呈を無事に済ませたものの、7月になって日本各地で猛威を振るっていたコレラに感染し、乗組員ら計33人が発病し、うち11人が死亡したことだった。^(注11)

- 富時横浜に停泊中なる土耳其軍艦エルトグロール號の乗組水兵某は、一昨十八日上陸し、市街を徘徊し、帰艦すると間もなく虎列刺病を發し、遂に同日午後十時頃死亡せしに付昨十九日午前七時半頃艦長より其由を居留地警察署へ報告し、合せて水葬を行ふ旨出しを以て取敢ず、同署よりは縣廳の檢疫委員へ急報せしゆえ、同廳よりは檢疫委員曾根盛鎮氏以下三名出張し、艦長と協議の上艦内に充分の消毒を施行し、死体は檢疫規則に依れば火葬せしむべきも、土耳其の國教は水葬の外他葬は許さざる趣きなるにぞ、種々熟議を遂げ、同港より三哩以上を距てし相模灘に於て水葬する事に決し、午前十一時頃同艦の端舟にて委員二名と巡查二名附添ひて同所に赴き、水葬の後長浦消毒所に於て同船の消毒法を行ひたり。
- 又同艦は昨十九日より五日間陸地との交通を絶つ事、並に艦長外四五名の士官を除くの外上陸を差止め、客船と雖も一切同艦に近接せしめざる様、水上警察署に於て注意する事に談判整ひし由なるが、同夜右患者の外に一名死亡せし者ありし由。尤も是は慢性病なりしとの事にて水葬は虎列刺病患者と同一の場所に於て執行したりと云う。

同艦は艦内消毒のため檢疫所のある長浦に回航された。讀賣新聞の報道

によると、死者の取り扱いについてトルコ側と日本側で意見が違ったという。日本側は検疫規則からコレラに感染し、死亡した者について火葬を主張したが、トルコ側は「国教は水葬の外他葬は許さざる趣」から、水葬にした様子うかがえる。トルコの国教はイスラーム教(回教ないし回々教)で火葬を禁じているためだが、記事ではイスラーム教についての言及はなかった。

神奈川県民の一部はコレラで死亡したトルコ人の遺体を相模灘に水葬したことに對して神奈川県知事に「異議」を申し立てたが、満足の行く回答はなかったという。^(註12) エルトゥールル号は5月下旬長崎に到着後に水兵1人が肺炎で死亡し、水葬にしたというが、コレラ患者の疑いがあったという。^(註13) 当時、日本全国でコレラが蔓延しており、讀賣新聞紙面では連日各府県別のコレラ患者数と死者数が伝えられていた。同年7月28日現在、全国のコレラ患者総数は1409人、死者は627人と伝えられたが、8月5日までの患者総数は2893人、死者は1530人と急増した。^(註14)

同艦は、横浜船渠で艦体の修繕を望んだが、コレラ患者の発生で許可が降りず、横須賀海軍船廠で修理したという。^(註15)

そして、同艦を襲った第3の不運は、横浜港を出港した後、紀州沖で暴風雨に見舞われて座礁、沈没し、600人近くが死亡したことである。日本側は台風の接近を知り、トルコ側に出航延期を申し入れたが、トルコ側は予定外の修理や資金の出費、コレラ禍で帰国が大幅に遅れていたため、台風シーズンにも関わらず9月15日、横浜港を出航し、9月16日夕、紀伊半島沖で遭難した。遭難の様子は各新聞で大々的に伝えられた。遭難4日後の9月20日付讀賣新聞は遭難の状況を詳報した。^(註16)

- 土耳其軍艦の沈没五百八十七人の溺死 土耳其國皇帝陛下の使命を奉じ我が天皇陛下に勲章捧呈の為め来朝せる同國軍艦エルドグロウ号は、使命終りて帰國の途横濱より神戸へ向け進航中、去る十六日午後四時頃和歌山県紀州牟婁郡大島樫野岬燈台沖近傍に於て機関に損傷を生じ、且つ岩石に打付けたる為め艦体沈没して、艦長大使ヲスマ

ンパシヤ^{はじ}始め乗組員^{のりくみいん}六百五十名^{めい}の内^{うち}五百八十七人^{むな}、空しく艦^{かんちゆう}中^{できし}に溺死^{でんぼうさくちようごぜん}せり、との電報^{でんぼうさくちようごぜん}昨^じ朝^{あさ}午前^{ごぜん}二時^に頃^{ころ}兵庫^{へんち}、和歌山^じ縣^{けん}知事^{ちじ}より外務^{がいむ}、海軍^{かいぐん}、内務^{ないむ}三省^{さんしやう}へ達^{たつ}したり聞説^{きんせつ}。土耳其^{とるこ}皇帝^{こうてい}陛下^{へいか}は同じ^{おな}東洋^{とうよう}列国^{れつこく}の内^{うち}にも特^{とく}に我國^{わがくに}を欣慕^{きんぼ}せられ、曾^{かつ}てより両國^{りやうこく}間の^{かん}國際^{こくさい}條約^{じやうやく}を結^{むす}び其親交^{そのしんこう}を保^{たも}たん^と我國^{わがくに}の渡航者^{たこうしや}に對^{たい}しても屢々^{しばしば}優渥^{ゆうあく}なる待遇^{たいぐう}を為^なし玉^{たま}ひし由^{よし}なるも、尚^なほ之^{これ}に満足^{まんぞく}せられず遙々^{はるばる}遠洋^{えんやう}萬里^{ばんり}を隔^{へだ}てし我國^{わがくに}へ向^{むか}つて大使^{たいし}を特^{とく}派^はし、其好意^{そのこうい}を表^{ひょう}せられたるに、不幸^{ふこう}にして過般^{かはん}艦^{かんちゆう}中^{びやう}にコレラ病^{びやう}の發生^{はっせい}したるため少^{すくな}からぬ迷惑^{まいわく}を感じ、大^{かん}に其歸期^{おおい}を延^のばすに至^{いた}り、此^{この}頃^{ごころ}漸^{ようや}く本國^{ほんこく}へ歸航^{きこう}するを得^うることとなりしに、突然^{とつぜん}斯^{かく}慘憺^{さんたん}たる大^{だい}不幸^{ふこう}を見る^みに至^{いた}らんとは余輩^{わがはい}異邦^{いぼう}の人^{ひと}なら尚^なほ且^かつ涙^{なみだ}に咽^むせんで言^いふ處^{ところ}を知らざるなり。天涯^{てんがい}の故國^{ここく}に指折^{ゆびお}り算^{かぞ}へて其歸朝^{そのきちゆう}を待^まつ死者^{ししや}の妻子^{さいしけん}眷^{けん}属^{ぞく}の嘆^{なげ}きは蓋^{けだ}し又^{また}如何^{いか}許^ばりぞ。之^{これ}を思^{おも}えば慘憺^{さんたん}眼曇^{まなこくも}り暗戾^{あんるい}鯨波^{げいば}を起^{おこ}す。

エルトゥールル号の遭難と生存者の救助、生存者の本国送還をめぐる、日本、ドイツ、ロシア3国の間で厳しい外交上の駆け引きが繰り返されてきたことが、1890年(明治23年)9月23日付讀賣新聞の紙面から分かった。遭難情報が東京、神戸などに伝えられると、現場近くの大島村に最初に向かったのは、当時神戸港に停泊していたドイツ軍艦ウオルフ号(ヴォルフ号)だった。同艦は現場に急行、負傷したトルコ人乗組員60人を乗艦させ、神戸港に戻った。また、大島村で台風を避けていた汽船防長丸も2名の生存者を収容して神戸港に向かった。現場到着がウオルフ号より遅れた日本の軍艦八重山は大島村での葬儀のため残っていたトルコ士官2人を乗せて一日遅れで神戸港に着いた。ウオルフ号がいち早く現場に急行した背景としては、日本政府とは別に在神戸ドイツ領事館がエルトゥールル号遭難の情報を入手し、ウオルフ号に救援活動を要請した、と見られる。9月20日付大阪朝日新聞によると、林董兵庫県知事は日本政府の救援活動を優先すべく、ウオルフ号の出港を見合わせるよう要請したが、ドイツ側がこれに応じなかったため、兵庫県外事課員を同号に乗艦させたという。^(註17)

讀賣新聞によると、ドイツ軍艦が「神速機敏」に行動し、「抜け目のない」ロシア公使が「日本外務省の承諾」を得て、エルトゥールル号の生存者をロシア艦隊がオスマン・トルコ本国に送り届ける、という情報は、当時衰退傾向にあったオスマン帝国をめぐるロシア、ドイツの思惑をうかがわせた。オスマン帝国のアブデュル・ハミト2世は1877年(明治20年)の露土戦争、1882年(明治15年)のイギリスによるエジプト侵攻で、英国への不信を増大させ、ドイツへの接近を図っていた。日本でのロシアの行動は、対トルコ関係の改善を視野に入れたものかもしれない。東京でのロシア公使の行動は、オスマン帝国をめぐるイギリス、ドイツ、ロシアの思惑と無関係ではないだろう。

海軍将校は「外務省の承諾」に「激昂」したというが、外務省はロシア公使の申し出に対し「承諾」したことはなく、ロシアがトルコと接触することには干渉しない、という趣旨を伝えたい。(註18)

○ 此の如くに獨逸軍艦は、神速機敏の働きを為し、其慈善義俠を天下に
 發揚したることなれば、遭難者を土耳其の都コンスタンチノーブルに送
 り返す丈は、我國にて担當すべきところなりと思ふ折柄、東京にては外
 交に抜目なき露國公使が、我が外務省の承諾を受け、土國政府に電報を
 發して、生存者は露國義勇艦隊を以て送り届けたき旨を照會し、土國政
 府の承認を経たりと、是亦神速機敏の働きを為し、其慈善義俠を天下に
 發揚したるものと云うべし。……我國の処置は神速機敏ならずして、遂
 に外國の為に先鞭を着けられたり。然ば則ち之にて已むべきか。然らず、
 土耳其既に軍艦を派して我に好意を表せり。我亦軍艦を派して彼に好意
 を表せざる可らず。況や今回の遭難に就ては特に其君臣を慰問せざる可
 らざるなり。宜しく我軍艦を土耳其に派せしめよ。義捐金日々其額を増
 さんとす。他日我旭日旗を掲ぐる軍艦、彼の新月旗を翻す國を訪ふの日
 には、即ち此義捐金を携えしむべし。

讀賣新聞をはじめ新聞各紙は、ロシア艦隊による生存者送還の「風評」

に強く反発し、生存者の送還のためオスマン帝国へ日本の軍艦を派遣するよう強く主張した。政府は1890年（明治23年）9月26日、軍艦比叡、金剛を派遣することを早々と決定したが、ドイツ、ロシアの動きをけん制したものと受け取れる。10月5日、比叡、金剛両艦は品川を出港、神戸を経て、10月13日長崎着、16日長崎を出港、21日香港、11月1日シンガポール、16日コロombo、12月10日アデン、18日ポートサイドに寄港した。トルコ側はダーダネルス海峡の外国船通過不可能と通告し、トルコ側がポートサイドで生存者を引き取ることを求めた。両艦長はイスタンブールでの生存者引渡しを強く主張した。日土政府間の交渉の結果、イスタンブールへの入港が認められ、1891年（明治24年）1月2日、イスタンブール港に到着した。^(註19) アブデュル・ハミト2世は1月5日、両艦の艦長、士官らを宮殿に招き、謁見した。アブデュル・ハミト2世は日本側の好意に謝意を示し、艦長、士官らに勲章を授与され、陪食を仰せ付けた。

3. 義捐金募集運動

軍艦比叡、金剛のオスマン帝国派遣以前に、日本国内ではエルトゥールル号の遭難に対し、皇室をはじめ、政府閣僚、民間人に至るまで、朝野をあげて哀悼の意を表すと共に、生存者と犠牲者の遺族のための義捐金募集運動が全国に広がった。義捐金募集運動に最も熱心だったのは新聞社だった。東京日日新聞、神戸又新日報が他紙に先駆けて1890年（明治23年）9月19日に号外を発行して遭難事件の第一報を伝えた。そして東京日日新聞と時事新報が9月20日の紙面で義捐金募集の広告を掲載した。2紙の募金広告は新聞各社の中で最も早いものだった。讀賣新聞は自社による義捐金募集を行っていなかったが、9月27日付附録に時事新報と毎日新聞の義捐金募集の広告を掲載した。^(註20)

◎ 土耳其軍艦沈没の悲惨

広く義捐金を募集して憐む可き罹災者の心情を慰め、日本人の慈愛義侠を海外に表明せんとす

○ 土耳其帝國は未だ我國と修交の約あるに非ず。唯だ近時、日本帝国の東方に屹立して文明の進歩日に著しきを見、極東の帝政國大に富強の名あるを喜び、我天皇陛下に勲章を奉らんが為、特に軍艦エルトグロールを派したるものにして土國が我國に對するの厚誼は既に日本人の知悉して深く感謝する所なり。然るに去る六月中、同艦の我横濱港に到着して使命を終るや否、不幸にも艦内にコレラ患者を發し、病毒蔓延の勢い猛然を極め、同病に罹るもの日々絶えず、日本帝国に對する一片の厚誼を遠く萬里の波濤を越えて此の極東の國に來り、僅かに使命を終れば艦内斯る有様にて萬里海外の異郷に在りて鬼籍に上りたるもの十数名、終に長浦に廻航して消毒の事に数十日を消し、其の間艦員の憂苦實に見るに忍びざるものあり。萬里渡來の國賓之れを厚遇するの も無く、憂鬱の間に日を渚さしめたるは日本人の心情堪える能はざる所なりし。近日に至り艦内病毒の跡を絶ち、帰航の準備漸く整うて去る十五日長浦を抜錨し、僅かに帰國の途に就きたるに、翌十六日紀州沖に於て不幸にも機関に損所を生じたるに、暴風之に加わりて進退自由なる能わず、遂に巖礁に触れて艦体破損し、オスマン・パシャを始め艦長以下五百余名は紀州海底の魚腹に葬られ、僅かに六十三名の乗組員、大島村民の救援に依りて萬死に一生を得たるのみ。此の生残れる人々も大抵は負傷し居りて、今尚ほ治療中なりと云う簡單なる電報、未だ事の詳細を悉さずと雖も、罹災の顛末を想像すれば、實に悲惨に堪へざる者あり。日本の港灣に着して途に就けば、艦体忽ち沈没して五百余名の者一時海中に溺死す。生残れる人々は同艦同國の人五百余名を一時に失ひ、未だ身の負傷を悲むもの無く、海に望んで唯だ茫然たらんのみ。本社、此の極めて不幸の人六十三名の心情を察し、黙して止む能はず。日本國人の慈愛義俠なる斯る悲惨の報に接して又座視する能はざるを知り、茲に広く義捐金を世人に募り之を以て罹災者の心情を慰むるの資に供し、極東の文明國慈愛義俠に富む事を世界に表明せんと欲す。此の事 独り慈愛義俠の心を満足せしむるのみならず、亦た一國の声価に関するものあり。讀者、幸に此の計画を贊助して義金を本社に投ぜられん事、切に企望する所なり。

明治二十三年九月

時事新報社

義捐金受取手続

- 一 義捐金は一口十銭以上とす
- 一 本社義捐金を受け取りたる時は、其の金額を並に義捐者の姓名を本紙上に記載し、之を以て金員受領の証しとす
- 一 募集申込の期日は来る十月十日を以て限りとす

横濱並に接近地義捐者の便の為め時事新報賣捌所たる同市本町四丁目鈴木清之助に義捐金受取方を托したるに付 同所に申込みあれば直ちに本社に達すべし

○ 嗚呼土耳其軍艦は沈没せり。五百八十七人の丈夫は逝けり。而して萬死を出でて尚生死の関に値ふもの六十三人、其の境遇實に憐れべきに非らずや。我等は土耳其皇帝の厚意により、我が邦に敬礼を致せし者なり。而して今此の空前の不幸に遭遇し、事変異の然らしむる処と雖も、抑も亦我邦の為めに死せしものにあらずや。吾人豈に袖手傍着以って雲爛に附せる忍びんや。我同胞の諸君邦家の為なり。願はくば相来りて其の志を尽せよ。

- 一 義捐金は一名十銭以上なるべし
- 一 義捐金は右の内何れへ義捐せらるるか^{とくだね}を明記せらるべし
- 一 義捐金額並に姓名は本紙に記載し取纏の上相当の手続を以て罹災者に送附すべし
- 一 義捐期間は来る十月十五日迄とす

毎日新聞社

時事新報の広告は同社が9月20日に掲載した広告と同文のものだった。当時、新聞社間の特種合戦が激しくなっていた中で、讀賣新聞が競争紙2紙の広告を掲載したことは異例のことではないか。義捐金募集のための世論を喚起するうえで、メディアの存在は欠かせなかったといえる。

エルトゥールル号事件は日本で起きた事件だが、遭難者は全て外国人であり、外国人のための義捐金募集は日本で初めてのことである。1882年(明治15年)福沢諭吉によって創刊された時事新報は「広く義捐金を募集して憐む可き罹災者の心情を慰め、日本人の慈愛義俠を海外に表明せんとす」として、市民の協力を呼びかけた。東洋大学社会学部助教授、三沢伸生によると、明治時代に数多くの新聞社が誕生したが、新聞社の行う義捐金募集の性格が徐々に変わってきたという。三沢は「義捐金は従来までの単なる地域的相互扶助の精神やヒューマニズムの枠を越えて、日本社会のナショナリズムを表象する社会的・政治的存在へと昇華したのである。言い換えれば、義捐金には募集の核となった新聞社の世論換気の企画意図、そして民衆自身の社会的意志決定の過程とが顕現されるようになったと見ることも可能である」と指摘している。^(註21)

時事新報の広告全文は、トルコ人の生存者と犠牲者の遺族に義捐金を送ろうとする日本人の「慈愛義俠を海外に表明する」機会と位置づけている。^(註22)つまり、「慈愛義俠」(ヒューマニズム)と「国威発揚」(ナショナリズム)を巧みに融合させたものといえる。時事新報は他紙を圧倒して、4248円97銭6厘(2万倍と仮定すると現在の価格で8000万円超)という多額の義捐金を集めた。時事新報は当初、募金受付を10月10日までとしていたが、10月3日付紙面で、比叡、金剛両艦がトルコに向けて出港する期日が迫っているため、義捐金募集を10月3日限りにすると伝えた。つまり、この時点で時事新報は、自社記者を比叡ないし金剛に乗艦させ、義捐金を直接オスマン・トルコまで持参することについて、海軍省の許可を得ていたといえる。

比叡、金剛は10月5日に品川を出港したが、時事新報は入社間もない野田正太郎(1868年—1904年/明治元年—明治37年)を10月6日横須賀港で比叡に乗艦させた。野田の乗艦がいかにあわただしかったかが推測できる。野田は比叡乗艦時、寄港地ごとに「日本軍艦土耳其航海記事」を郵便で時事新報に送った。野田はイスタンブール到着後、精力的に取材をしたが、アブデュル・ハミト2世から軍将校に日本語、日本文化を教えるよう

要請された。野田は皇帝の要請を受け、その後2年間イスタンブールに滞在した。つまり、野田はオスマン帝国に滞在した最初の日本人であり、同時に中東・イスラーム世界に最初に派遣された新聞社の特派員となった。野田については第4章第1節で詳述する。

一方、個人レベルで義捐金募集を行ったのが山田寅次郎（1866年－1957年／慶応2年－昭和32年）だった。当時文筆活動を続けていた山田は、日本新聞社の陸羯南をはじめ福本日南、朝比奈知泉らと親しかったといわれ、エルトゥールル号遭難事件の義捐金募集で協力を頼んだとされる。そして、複数の新聞に広告を掲載すると共に、指原安三、山崎太吉らと義捐金募集のための演説会を東京各地で計15回行った。^(註23)

山田らの集めた義捐金は約5000円（2万倍と仮定すると、現在の価格で約1億円）に達したという。^(註24) 山田は義捐金のオスマン帝国送付について青木周蔵外相に相談したが、青木外相は募金運動に奔走した山田自身が持ってゆくことを提案したとされる。1891年（明治24年）10月、山田はエルトゥールル号遭難の義捐金募集をほぼ終え、自らトルコを訪問する意向を示した。讀賣新聞は山田の送別会について以下のように伝えた。

○「^{やま}山田寅次郎^だ氏の^の送別会^を 先に^に土耳其^{軍艦}エルトグロール号^が沈没^{の際}、^ぎ義捐金^募集^に奔走^{せし}山田寅次郎^{氏は}此程[、]義捐金^募集^の事務^整理^{せし}を^以て、^も近々^該金^を携^帯し、^{きん}土耳其^國に^渡航^{する}由^にて、^と来^三日^蛸殻^町の^有楽^館に^於て^其の^送別^会を^催し、^ゆ余^興と^{して}府^下有^名なる^芸人の^諸芸^を演^ずると^いう。^(註25)

しかし山田の出発はさらに遅れた。山田は、フランスで竣工した軍艦松島の引渡しをツーロンで受けるため、海軍がチャーターしたイギリス船に便乗させてもらうことになり、1892年（明治25年）1月30日、海軍士官約170人と共に横浜港を出港した。3ヵ月後、ポートサイドに到着すると、山田は下船し、海軍士官一行と別れた。そしてカイロに短期間滞在し、アレキサンドリアから出港し、4月4日イスタンブールに到着した。^(註26) 山田

については、第4章第1節2で詳述する。

4. 汎イスラーム主義の実践

エルトゥールル号の日本親善訪問はアブデュル・ハミト2世の強い希望で実現した。アブデュル・ハミト2世の目的は、日本との修交条約締結を目指すと同時に、アジア、極東東地域で汎イスラーム主義を宣伝する意図があったと見られている。オスマン・トルコ帝国は19世紀に入って西欧列強の干渉もあって、政治的影響力を失いつつあったが、歴代皇帝はイスラーム国家の最高権威者を示す「カリフ」の称号を保持してきた。アブデュル・ハミト2世は「国内外のムスリムに、カリフとしての存在を再認識させることによって、国内の自由主義者、国家主義者、改革派といった反対勢力を抑え、国外のムスリム世論を、自分を支持する側に集めることが期待された。そして、列強、特に英国に対しては、ムスリムへの潜在的な影響力を誇示することによって、カリフの名を、一種の外交戦力上の武器として使用しようとしたのである。」^(注27)

内藤智秀によると、アブデュル・ハミト2世は「一、汎回教主義宣伝の為め、二に日土条約締結促進の為め、三に一八八七年(明治20年)に吾が小松宮彰仁親王殿下が御息所御同伴土京を訪問せられたる事に対する答礼として、四に練習艦隊の遠洋航海を兼ね、……日本に派遣したのであった。」という^(注28)

内藤は、アブデュル・ハミト2世が「その練磨せる外交的手腕を以て土耳其国力発展のため多大の尽力を敢てし」「『その巧妙な外交的術策はマキャヴェリー以上であった』と謂われている」と記している。^(注29) 従って、エルトゥールル号の日本訪問は、アブデュル・ハミト2世の外交戦略の一環であったとする。

内藤は訪問の目的を①汎イスラーム主義の宣伝②日土条約締結の促進③小松宮親王への答礼④練習艦隊の遠洋航海、としたが、小松香織は、内藤智秀著「日土交渉史」がエルトゥールル号事件に関する唯一の研究書であり、多くの内外文献を渉猟した大著であると認めながら、新たな興味ある

史料の発見もあって、内藤説にはいくつかの疑問がある、と指摘した。そして、小松は内藤智秀が指摘した4点のうち、②③④が名目にすぎなかったと指摘している。^(註30)

小松によると、近代における汎イスラーム主義運動とは「十九世紀以降、ヨーロッパ列強の直接的間接的植民地支配の圧迫を、ムスリムの連帯によって跳ね返そうとする運動の総称で、当時のヨーロッパ人は、アブデュル・ハミト2世を汎イスラーム主義運動の中心人物と捉えていた」という。アブデュル・ハミト2世の「汎イスラーム主義」は「列強、特に英国に対しては、ムスリムへの潜在的な影響力を誇示することによって、カリフの名を一種の外交戦略上の武器として使用しようとしたのであり」このような現実的な意図の上に成り立っており、決して全世界のムスリムの統一といった理想主義的なものではなかったということである。^(註31)

アブデュル・ハミト2世は「啓蒙的な専制君主」としてイスラーム的近代国家を目指すとともに、対外的にはカリフとしての権威を高めるために汎イスラーム主義を誇示した。^(註32) その一方でアブデュル・ハミト2世は、汎イスラーム主義が「シンボルとして使えると同時に、逆にシンボルとして利用される危険性も持っていることを承知していたと思われる。^(註33) 1891年（明治24年）から1892年（明治25年）にかけて行われたイギリスのエジプト占領、フランスのチュニジア占領で、英仏両国は汎イスラーム主義を「狂信的」な動きとして、対外宣伝に利用した。

アブデュル・ハミト2世にとって、英独露3国のうち、当面の最大の脅威は英国であった。小松によると、アブデュル・ハミト2世の外交政策の基本は「英国と直接対決することは絶対避け、独、露に接近することで牽制する。ロシアには、オスマン・トルコとの友好の価値を認識させる方向で懐柔に努める」ことだという。^(註34)

エルトゥールル号は日本に向かう途中、数々の困難に遭いながらも、アブデュル・ハミト2世の汎イスラーム主義を実践し、かなりの効果をあげた。同艦がアデン、ボンベイ、コロンボ、シンガポールなどの寄港地で、現地のムスリムから「熱烈歓迎」されたことは記述したが、ボンベイでは

「土耳其兵士が立派な服装で慇懃な態度を以て上陸して来た時は一同驚いた。これ等の兵士は何れも金曜には回教寺院に参詣したので印度市民は大に尊敬を払うと共に其の土耳其軍艦なる事を一般に知るに至った」という。^(注35) またオスマン・パシャが土国海軍省に宛てた報告によると、コロomboでは停泊中のエルトゥールル号にイスラーム教徒が訪れたという。^(注36)

その一方で、コロombo寄港時や4ヶ月余り停泊していたシンガポールでは、現地のメディアがエルトゥールル号の財政上の負担増大、同艦の再修理などを伝え、風評が広がったこともあったという。^(注37)

エルトゥールル号の乗組員らは日本までの各寄港地で、すべてのムスリムに課せられた五行の一つである礼拝(サラート)を続けていた。^(注38) また、エルトゥールル号には、汎イスラーム主義の実践と国威発揚のため、20人編成の軍楽隊(イスマイル・エッフエンディ)の他、「三等僧侶クラーン暗記係 アリー・エッフエンディ」ら複数のイマーム(イスラーム教導師)が同行したと見られる。^(注39)

エルトゥールル号は横浜港などに3ヶ月余り長期停泊していたが、アジア各国の寄港地で見られた汎イスラーム主義の宣伝活動を行った形跡はなかった。日本到着後に、イスラームの礼拝行為や、日本人に対するイスラーム教宣教の記録が見られないからだ。乗組員らは日本滞在中、個人的にムスリムとしての宗教行為を続けていたものと推測できるが、アブデュル・ハミト2世の汎イスラーム主義を実践するうえで、最終目的地の日本での宣教、布教活動は重要なものではなかったのだろうか。明治の新聞をはじめ、先行研究書などにも、日本でのエルトゥールル号乗組員らの宗教行為ないし宣教活動についての資料を発見できなかった。

明治時代の日本には、モスク(イスラーム寺院)そのものが存在しなかったし、政府、民間の間では、イスラームへの理解はほとんどなかったと見られる。1890年(明治23年)6月7日に横浜港に到着したオスマン・パシャ一行は日本滞在中の7月中旬に乗組員の中にコレラ患者が発生し、9月15日の横浜出港直前まで、艦内の消毒、患者の手当て、艦体の修繕などに追われたことも、汎イスラーム主義を宣伝する余裕などはなかったと推測で

きる。日本人はエルトゥールル号遭難事件後、負傷した生存者を手術する際、彼らがアルコールの使用を拒否したこと、生存者が豚肉でなく鶏肉を食べたこと、犠牲者を火葬でなく水葬にしたことなどから、わずかにイスラーム教のいくつかの規律を知ったものと思われる。

オスマン・パシャは日土両国の親善、更には日土条約締結を希望していたと見られるが、実現しなかった。明治政府はイギリスなど列国との不平等条約の改正交渉を急ぐ一方、衰退傾向にあるオスマン帝国の厳しい現実を知るにつれ、条約締結に踏み切れなかった。エルトゥールル号事件後も、日土両国は条約交渉を続けたが、日清戦争(1894年8月—1895年3月／明治27年8月—明治28年3月)、日露戦争(1904年2月—1905年9月／明治37年2月—明治38年9月)、クレタ事件(1896年＝明治29年、西欧列強の対トルコ干渉)ギリシャ・トルコ戦争(1897年＝明治30年)などで、交渉は再び棚上げされ、両国の国交樹立はトルコ共和国が宣言された翌年、1924年(大正13年)まで待たなければならなかった。

第2章第2節 注

1. 白岩一彦「明治期の文献に見る日本人のトルコ観」池井 優・坂本勝編『近代日本とトルコ世界』勁草書房、1999年(平成11年)2月第1版第1刷発行。PP.12-16。
2. 杉田英明「日本人の中東発見——逆遠近法のなかの比較文化史」東京大学出版会、1995年(平成7年)6月初版。PP.135-136。
3. 内藤智秀「日土交渉史」泉書院、1931年(昭和6年)8月発行、限定版非売品。同書では総勢608人となっている。PP.110-114。
4. 小松香織「アブデュル・ハミト二世と19世紀末のオスマン帝国——『エルトゥールル号事件』を中心に」東京大学文学部内史学会『史学雑誌』第98編第9号、1998年(平成10年)9月。P.66。内藤智秀 前掲書 PP.123-124。
5. 詳細な行程については、小松香織 同上 PP.3-50。
6. 1889年(明治23年)6月14日付讀賣新聞。
7. 1889年(明治23年)6月19日付讀賣新聞。
8. 1889年(明治23年)6月26日付讀賣新聞。

9. 1889年(明治23年)7月1日付讀賣新聞。
10. 小松香織 前掲書 P.44-45。
11. 1890年(明治23年)7月20日付讀賣新聞。患者33人のうち11人死亡、全治10人、治療中12人と伝えている。同年9月20日付讀賣新聞では死亡14人、としている)
12. 1890年(明治23年)7月26日付讀賣新聞。
13. 1890年(明治23年)9月18日付讀賣新聞。
14. 1890年(明治23年)7月30日付讀賣新聞、同年8月7日付讀賣新聞参照。
15. 横須賀海軍船廠史(1915年=大正4年刊)。白岩和彦 前掲書。1890年(明治23年)9月20日付東京朝日新聞参照。
16. 1890年(明治23年)9月20日付讀賣新聞。三沢伸生「1890年におけるオスマン朝への日本軍艦比叡・金剛の派遣：エルトゥール号遭難に対する日本社会の反応」東洋大学社会学部紀要第39-2号(第67集)2002年(平成14年)2月。波多野勝「エルトゥール号事件をめぐる日土関係」池井 優・坂本勉編『近代日本とトルコ世界』参照。
17. 三沢伸生 同上(紀要第39-2号) P.62。
18. 1890年(明治23年)9月25日付讀賣新聞。
19. 1891年(明治24年)1月1日到着の記述もある。
20. 1890年(明治23年)9月27日付讀賣新聞附録。
21. 三沢伸生「1890年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金募集活動：『エルトゥール号事件』の義捐金と日本社会」東洋大学社会学部紀要40-1号(第69集)2002年(平成14年)12月。P.77。
22. 1890年(明治23年)9月27日付讀賣新聞附録。
23. 三沢伸生 前掲書(紀要第40-1号) P.90。波多野勝 前掲書 P.53。
24. セルチュク・エセンベル「世紀末イスタンブルの日本人——山田寅次郎の生涯と『土耳其画観』」P.77。三沢伸生「1890-1892年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金処理活動：日本にとっての『エルトゥール号事件』の終結」東洋大学社会学部紀要第41-1号(第72集)2003年(平成15年)11月。P.72。
25. 1890年(明治23年)10月1日付讀賣新聞朝刊。
26. 山田寅次郎「土耳其画観」中の「追憶録」PP.5-7。三沢伸生 同上。セルチュク・エセンベル同上 PP.77-78。
27. 小松香織 前掲書 P.58。
28. 内藤智秀 前掲書 P.36。

29. 同上 PP.35-36。
30. 小松香織 前掲書 P.54。
31. 同上 PP.57-58。
32. 新井政美「トルコ近現代史」みすず書房 2001年(平成13年)4月発行。
PP.96-106。
33. 同上 P.99。
34. 小松香織 前掲書 P.56。
35. 内藤智秀 前掲書 PP.120-121。
36. 同上 P.124。小松香織 前掲書 P.66。「3万人以上のムスリムの訪問を受けた」と記述されている。
37. 小松香織 前掲書 PP.48-49。
38. 五柱は信仰告白(シャハーダ), 礼拝(サラート), 喜捨(ザカート), 断食, 巡礼で, ムスリムの宗教的義務。六信とはアッラー, 天使, 啓典, 来世, 予定(カダル)を信じること。「イスラム事典」平凡社, 1982年(昭和57年)4月初版第1刷発行, 「岩波イスラム辞典」岩波書店, 2002年(平成14年)2月初版発行, 「イスラーム世界辞典」明石書店, 2002年(平成14年)3月初版第1刷発行, などを参照。
39. 小松香織 前掲書 P.44。内藤智秀 前掲書 PP.112-114。

第3章 佳人と暴夜物語

第1節 東海散士とエジプトの不幸

1. 憂国・亡国の士の物語

- 東海散士^{フィラデルフィアインデペンデントホール}一日費^{より}府ノ独立閣ニ登リ、仰テ自由ノ破鐘(欧米ノ民大事アル事ニ鐘ヲ撞テ之ヲ報ズ。始メ米國ノ獨立スルニ當テ吉凶必ズ閣上ノ鐘を撞ク。鐘遂に避ク。後人呼ンデ自由ノ破鐘ト云フ)ヲ觀、俯テ獨立ノ遺文ヲ讀ミ、當時米人ノ義旗ヲ舉テ英王ノ暴政ヲ除キ、卒ニ能ク獨立自主ノ民タルノ高風ヲ追懷シ、俯仰感慨ニ堪ヘズ。愴然トシテ窓ニ倚テ眺臨ス。會々^{たまたま}二姫^{めぐり}アリ。階ヲ繞テ登リ来ル。翠羅面ヲ覆ヒ、暗影疎香白羽ノ春冠ヲ戴キ、輕縠の短羅ヲ衣、文華ノ長裾ヲ曳キ、風雅高表實二人ヲ驚カス。一小亭^{カーペンターホール}ヲ指シ相語テ曰ク、那ノ処ハ即チ是レ一千七百七十四年、十三州ノ名士始メテ相會シ、國家前途ノ國是ヲ計画セシ処ナリト。

- 晚霞丘^{バンカーヒル}ハ慕士頓府^{ボストン}東北一里外ニ存リ。左ハ海湾ヲ控キ、右ハ羣丘ニ接シ、形勢巍然實ニ咽喉ノ要地ナリ。一千七百七十五年米國忠義ノ士、夜ヒソカニ此要害ニ占拠シ、以テ英軍ノ進路ヲ遮ル。明朝敵兵水陸合擊甚ダ鋭シ。米人善ク拒ギ再ビ英軍ヲ破ル。敵三タビ兵ヲ増ス。而シテ兵上ノ軍、外援兵ナク内硝薬竭キ、大将窩連戰没シ力支ユル能ハズ。卒ニ敵ノ軍ノ陥ル所トナル。後人碑を此処ニ建テ、以テ忠死者ノ節ヲ表ス。散士明治十四年暮春晚霞丘ニ遊ビ、古ヲ吊ヒ今ニ感ジ世ヲ憂ヒ時ヲ悲ミ、放翁ガ憤世ノ慨アリ。詩ヲ賦シテ懷ヲ述ブ。(註1)

これは「明治ナショナリズムを鼓吹した政治小説の傑作」(註2)といわれ、明治時代に大ベストセラーになった東海散士著「佳人之奇遇」巻一の出だしである。憂国の士である主人公、東海散士は1881年(明治14年)春のある日、米フィラデルフィアの独立樓に登り、自由の鐘を見て、アメリカ人が独立戦争で英軍を破って勝利したことを懐かしむ。そこで、たまたま

「二姫」（2人の佳人＝美女）と出会う。美女の一人は紅蓮^{コーレン}と名乗るアイルランド人で、23、4歳、もう一人は幽蘭^{ユーラン}といい、20歳位のスペイン人だった。紅蓮は祖国アイルランドの独立をめざし、幽蘭は祖国スペインの王位継承争いに敗れたドン・カルロスを助けるため、米国で活動する男勝りの憂国の美女だった。同じ頃に知り合った范卿^{はんけい}という老中国人も明朝の遺臣で、清を倒し、明の再興のために運動しているという。3人は新興国日本の散士を羨むが、実は散士も戊辰の役（1868－69年／明治元年－2年）で破れ、辛酸をなめた会津藩士で、憂国というより亡国の士だと話すと、4人はそれぞれの奇遇に驚く……。こうして波乱万丈の物語が始まる。

東海散士はポーランドやハンガリーの愛国者らから、強国の横暴と弱国の悲惨、圧制に苦しむ小国の苦悩を聞く。散士と紅蓮はある日、エジプトでイギリスの圧制に抗議して立ち上がったアラビー・パシャを知り、エジプトの主権回復を目指すアラビー・パシャの挙兵に感動する。紅蓮はアイルランドを支配するイギリスと戦うためエジプトに向かうが、アラビー・パシャは敗北し、国外退去を命じられる。

散士らは、イギリスがエジプトから南洋へ、フランスがマダガスカルから中国大陸へ、ロシアがトルコ北部から清国西方、朝鮮へと植民地支配を企てていることに強い危惧を抱く。散士はメキシコを訪問した後、帰国すると日本が朝鮮問題で清国と対立し、日清戦争勃発への懸念を強める。散士は世界の弱小国、弱小民族の例として、ヨーロッパではスペイン、アイルランド、ポーランド、ハンガリー、ギリシャ、中東ではエジプト、トルコ、アジアではインド、ベトナム、ビルマ、中米ではメキシコ、サントドミンゴ、アフリカではリベリア、スーダン、マダガスカル、などに言及している。散士は紅蓮、幽蘭の2佳人との別離と邂逅を繰り返しながら、ヨーロッパ列強の犠牲となる弱小国の悲話を語る。

散士が作中で強調するのは、ヨーロッパ列強による弱小国支配を見て、「弱小国、日本」の運命がどうなるか、である。散士は、当時の明治政府のエリートをはじめ多くの知識人が「欧化主義」の名のもとに西洋崇拝に酔いしれていることに義憤を持ち、小説の形で警告を発したといえる。「佳人

之奇遇」は政治小説であるが、明治10年代の民権小説時代から国権小説時代の最初の小説とされている。^(註3)

作者の東海散士は本名、柴四郎(1852年—1922年／嘉永5年—大正11年)で、会津藩士、柴佐多蔵由道の4男。幼少のころから病弱のため、白虎隊に参加できなかった。16歳の時、鳥羽伏見の戦いに出陣、その後会津に戻り、外国語を学び、会津藩から海外留学の一員に選ばれたが、病弱のため派遣されなかった。明治元年、官軍による会津討伐で降伏し、柴四郎はまさに亡国、亡藩の士となった。(散士は会津藩降伏の悲惨から名づけられた)

柴四郎の悲惨はその時から始まった。会津戦争の際、81歳の祖母、50歳の母、そして姉妹が自刃した。会津藩は酷寒の下北半島、斗南^{となみ}の僻地に移され、窮迫した生活が続いた。四郎は一家の開墾を手伝うが、向学心に燃え、函館、弘前、会津若松を経て、1875年(明治8年)長兄太一郎の世話で、横濱税関長、柳谷謙太郎の書生となった。四郎は初めて窮乏生活を脱し、以後3年間勉学を続けることができた。1877年(明治10年)の西南戦争に出征し、谷干城をはじめ多くの人々と知り合い、その縁で1879年(明治12年)、岩崎家の援助で米国へ留学した。

柳田泉によると、横浜時代に散士が寄宿していた柳谷謙太郎が当時サンフランシスコ日本総領事になっていたので、同地の商法学校に通い、1881年(明治14年)春、マサチューセッツ州ケンブリッジのハーバード大学に入学、政治学、経済学を学び、同年末ペンシルベニア州フィラデルフィアのペンシルベニア大学に入った。1884年(明治17年)12月に「バチェラー・オブ・フィナンセス(理財学士)」の学位を得て卒業した。^(註4) 散士はこの間、アメリカ各地を旅行すると共に、アメリカの政治、経済事情を調査し、三菱系の「東海経済新報」など日本の新聞、雑誌などに投書した。散士は1885年(明治18年)1月に帰国した時、33歳になっていた。彼は滞米中に欧米列強の植民地支配の現実、スペイン、アイルランド、エジプトなどの民族自決運動、独立闘争を知る。幕府支持であった会津の解体、青森県の僻地への移封、など柴四郎自身の苦悩をも交えて、「佳人之奇遇」を執筆、一躍

有名になった。

「佳人之奇遇」初編（巻一，巻二）は1885年（明治18年）10月に刊行され，1897年（明治30年）10月第八編（巻十五，巻十六）まで，全文が漢文読み下し体で，文中に多くの漢詩を載せている。同書は12年にわたって書き続けられたが，作者の政治思想の変化，小説の筋書きの変化などもあって未完，とされている。前半の物語は散士と2人の佳人，亡命客の4人を中心に自由民権思想を前面に出していたが，後半は散士1人が中心で，朝鮮半島問題を含めナショナリズムの色彩を強めている。

- 散士幼ニシテ^{ぼしん}戊辰ノ^{そうほう}変乱ニ^{りくちんちゆんてんりゅうり}遭蓬シ，全家陸沈^{ちゆんてんりゅうり} 逶迤^{ちゆんてんりゅうり} 流離^{りゅうり}，其後或ハ東西に飄流シ，或ハ筆ヲ投ジテ軍ニ從ヒ，^{こうこうそうそう}遑々^{いとま}草々^{いとま}席暖ナルニ暇アラズ。既ニシテ^{きゅう}笈ヲ負テ海外ニ遊ビ，^{むつぱ}専ラ^{むつぱ}實用ノ業ニ志シ，^{きゅうきゅう}經濟，^{きゅうきゅう}商法，^{きゅうきゅう}殖産ノ諸課ヲ修ムルニ汲々^{きゅうきゅう}タリシヨリ，殖産利用ノ心日ニ長ジテ，花月風流ノ情日ニ消ジ，文ヲ練リ詩ヲ咏ズルノヨ閑ニ乏シ。然レドモ多年客士ニ在リ，國ヲ憂ヘ世ヲ慨シ，千萬里ノ山海ヲ^{ばっしょう}跋涉シ，物ニ触レ，事ニ感ジ発シテ筆トナルモノ積テ十余冊ニ及ベリ。是レ皆^{とうかん}偷閑ノ漫録ニシテ，和文アリ漢文アリ時ニ或ハ英文アリテ，未ダ^{いま}一體ノ文格ヲ為サズ。今年^{あたみ}帰朝病ヲ熱海ノ浴舎ニ養ヒ，始テ六旬ノ閑ヲ得タリ。及チ本邦今世ノ文ニ^{なら}倣ヒ，之ヲ^{さくせい}集録^{なづ}削正シ，名ケテ佳人之奇遇ト云フ。^(註5)

東海散士は「佳人之奇遇」の自序（一部）で以上のように記述している。散士は「全家陸沈（一家滅亡の意）」「逶迤流離（行き悩み，流浪する意）」の境遇から「笈ヲ負テ（本箱を背負って旅をする意，遠く故郷を離れて勉学する意）米国で經濟，商法，殖産など多くのことを学んだ。散士は「國ヲ憂ヘ世ヲ慨シ，千萬里ノ山海ヲ^{ばっしょう}跋涉シ」自らの考えを十余冊のノートに記し，それを元に「佳人之奇遇」を著したと説明している。

日本では当時，欧化主義の全盛期で，鹿鳴館時代といわれた。鹿鳴館は1883年（明治16年）東京に立てられた洋風の建物で，政府が条約改正のため外国の賓客や外交官を招き，明治政府高官が夫人や令嬢を伴ってダンス

に興じるための社交場だった。「佳人之奇遇」は、鹿鳴館に代表される欧化主義の動きが加速していることに危機感を強めた散士が政治小説の形で自らの考えを著した作品といえる。

柳田泉は「未完成ながら傑作は傑作といってよいと思う。……文壇、非文壇をとわず、明治の青春の情熱をこれほど真実に、これほど十分に、心から歌いあげた作品がほかにあろうか。やはり無条件で初期傑作の随一といってよかろう」と、高く評価している。^(注6) 当時の讀賣新聞は「最近出版書」という見出しで、「佳人之奇遇」第3編(巻五、巻六)、第4編(巻七)について次のように伝えている。

○ 佳人之奇遇第三篇 大早に雲霓を望むともいふべきほど讀者の待ちたる佳人之奇遇第三篇上巻一冊が此ほど出版せり。此篇には両姫策を廻らして幽將軍を救ふの事を述べ、悲憤の氣、紙上に溢れたり。^(注7)

○ 佳人之奇遇 近年著述中に於て最も評判高き東海散士の佳人之奇遇巻六が此ほど久松町の博文堂より出版したり。此篇には紅蓮女史、仏のガンベッタと語るより聖ドミンゴの独立、埃及國の不幸等を説き、例の満腔の熱心 迸り出で警世の文となりしものなれば、徒に小説を以て見るべからず。^(注8)

○ 佳人之奇遇巻の七 東海散士、柴四郎氏の著にして世に鳴り響きし佳人之奇遇は此ほど巻の七を例の博文堂より発兌したり。氏は海外漫遊の後ち勇退高踏し、高山名川の間に在りて此書を著はされしなれば、前巻に比して一層の高趣あり。我が社友天台道士も此巻の後に一言を添へたり。^(注9)

2. アラビー・パシャへの共感

「佳人之奇遇」は、讀賣新聞の「最近出版書」と題する書評欄で「悲憤の氣、紙上に溢れ」「満腔の熱心 迸り」「一層の高趣あり」などと評され、読

者が強い関心を示していたことを裏付けている。東海散士は、1881年(明治14年)、イギリスによるエジプト支配に反対して立ち上がったアラビー・パシャ(ウーラビー・パシャ)に同情するが、アラビー・パシャはエジプトに出兵した英国軍に敗れ、1882年(明治15年)12月セイロン島(現在のスリランカ)へ流刑された。^(註10)

東海散士は1886年(明治19年)3月、伊藤博文内閣の農商務大臣として入閣した谷干城が欧米諸国視察旅行に秘書官として随行した。一行は香港、シンガポール、セイロン、エジプトを経由してオーストリア、ドイツ、イタリア、フランス、イギリス、アメリカなどを訪問し、1887年(明治20年)6月に帰国した。散士らはエジプトの敗将、アラビー・パシャ、オスマン・トルコ帝国の名将、オスマン・パシャ、ハンガリーの革命志士、コッスートらと会談した。その後アラビー・パシャらは「佳人之奇遇」に次々と登場することになる。

柳田泉によると、伊藤博文が谷干城を洋行させたのは「保守的な谷の頭に欧化の洗礼を与えさせるにあつたが、谷は東洋から西洋を廻って見て、東洋の不振と西洋の侵略の勢いに驚き、欧化どころか、強いナショナリズムの思想を益々強めて帰ってきたのである。然るに日本では却って欧化主義全盛で、夜毎に大臣主催の仮装舞踏会が続く有様であり、ただただ外人の意を迎えるに汲々としていた。」という。^(註11)

1887年(明治20年)7月、谷はこうした日本の現状に憤慨し、伊藤に意見書を送り、辞職した。散士も谷と共に秘書官を辞職した。散士はエジプトの歴史的事実をもとに「佳人之奇遇」で、イギリスの支配を受け、保護国となったエジプトの悲劇を描きながら、日本もまた「欧化主義」を進める過程で、ヨーロッパ列強の進出を許すことになると警告した。「佳人之奇遇」におけるエジプトはイスラーム国であるが、ヨーロッパ列強に支配される悲劇を強調することで、明治時代における日本の国家存立の危機を警告している。

散士は当時の弱小国にエジプトとマダガスカルを加えている。散士にとって、イギリスに支配されたエジプト、フランスの植民地となったマダ

ガスカルの実情は日本でも起こりうるとして、危機感を強めたのである。藤田みどりは、「佳人之奇遇」を「明治中期に、アフリカ人に対する日本人の連帯感を熱烈に述べた、まさに奇書ともいうべき作品」と評価し、「(散士にとって) エジプトやマダガスカルは……『土人』国などではなかった。日本と同憂の国であり、同志の国であった。したがって、エジプトでもマダガスカルでも、日本人と同じ喜怒哀楽をわかちあえる人々が、あるいは思想信条ともに同列の人々が、国家の存亡を賭けて最後の戦いに臨もうとしていたのである」と書いている。^(註12)

散士はアフリカの弱小国の悲哀に同情しつつも、ヨーロッパ列強の支配下に置かれたアフリカ諸国との「連帯感」を訴えたわけではないように思う。彼は日本がアフリカの弱小国のように列強に支配されないためには、「十尺の自由を内に伸ばさんより、寧ろ一尺の国権を外に暢ぶるにあり」として、個人の自由を追求するよりも、国家の独立、つまり国権を守ることが先決だと訴えている。「佳人之奇遇」が国権小説といわれた理由である。

散士は「佳人之奇遇」を執筆しながら、ヨーロッパの文献を調査すると共に、セイロン島で会ったアラビー・パシャの反英闘争にいたる歴史をまとめ、1889年(明治22年)に「埃及近世史」として出版した。^(註13) 谷干城は同書に次のような序文を寄せた。

○ 凡庸の政治家、國を計らず、民情を察せず。徒に己れの好嗜に任せ、
 欧風に之れ模擬し、終に沐猴冠たるの誹りを免れざるもの。猶ほ田舎漢
 が東京の壮観に心酔し、俄に旧屋を破壊し、田畝を典質し、都風の家
 屋、衣服を新造し、隣里郷党に誇称すが如し。眞に是れ一時の夢幻の
 み。彼の政局に當る者、月に酔ひ、花に狂するの余暇、此書を繙き、
 之を目に見ずして而して心に視ば、及ち内外の政務を料理するに於て
 身自ら誤らざるのみならず、亦以て上君を誤り、下民を誤るの咎を免
 るるに庶幾からん手

谷干城はエジプトの不幸を目の当たりにして、平凡な政治家が国家の大

計も、国民の気持ちも考えずに欧化主義を模倣するのはおかしいと主張し、鹿鳴館などで日本の政治家、外交官たちがヨーロッパの賓客たちと会食し、親しげに踊ることを強く戒めた。^(註14)

散士は「埃及近世史」をセイロン島のアラビー・パシャに贈るため、ヨーロッパ留学の途中コロンボに寄港した日本人医学士に託したが、医学士に時間的な余裕がなかったため、当時コロンボに留学していた僧侶に依頼し、僧侶がアラビー・パシャに贈呈したところ、アラビーは大変喜んだという。

- 埃及近世史^{えいぶとぎんせいし}をアラビー・パシャ^{あらびー・ぱしゃ}に贈^{おく}る医学士^{いがくし}入澤達吉氏^{げつざん}は日耳曼^{にちじまん}へ赴^{おもむ}かんとし、先^{さき}ごろ同國^{どうこく}に向^{むか}いたるが、氏^しは途上^{とじょう}コロンボ^{きこう}へ寄港^{きこう}したるを幸^{さいわ}ひ、アラビー・パシャ^{あらびー・ぱしゃ}に面会^{めんかい}せんとせしも、出帆^{しゅつぱん}の時^じ刻^{こく}迫^{せま}りて其^その意^いを果^{はた}たさざりしにぞ、止^やむを得^えず物^{もの}を贈^{おく}りて其^その意^いを致^{いた}さんと欲^{ほつ}し、彼^かの久^{ひさ}しくカイロ府^ふに在^{あつ}て埃及^{えいぶと}の近事^{きんじ}及びアラビー・パシャ^{あらびー・ぱしゃ}追放^{ついほう}の^{ほう}ことを探^{たん}求^{きゆう}したる東海^{とうかい}散士^{さんし}、柴四郎^{しばしろう}氏^しの著書^{ちよしょ}、埃及近世史^{えいぶとぎんせいし}（アラビー・パシャ^{あらびー・ぱしゃ}の肖像^{しょうざう}入^{いり}）を贈^{おく}らんとて、同地^{どうち}に留學^{りゅうがく}せる僧^{そう}、善連^{ぜんれん}法彦^{ぽうげん}氏^しに托^{たく}し、自^じ分の^{ぶん}名刺^{めいし}に添^{そえ}て之^{これ}を贈^{おく}らしめしに、氏^しはカルペデ^{かるぺで}に於^{おい}てアラビー・パシャ^{あらびー・ぱしゃ}に面会^{めんかい}し、入澤^{いらいもの}氏^しの依^い頼^{らい}物^{ぶつ}を届^{とど}けし処^{ところ}、パシャ^{ぱしゃ}は殊^{こと}の外^{ほか}喜^{よろこ}び、終^{しゅう}生^{せい}この書^{しょ}を珍^{ちん}蔵^{ぞう}すべき旨^ねを告^つげ、且^{かつ}つ右^{みぎ}の入澤^{いらいもの}氏^し及び同^{およ}書籍^{しよせき}の著^{ちよ}述^{じゆつ}者^{しゃ}へ此^この喜^{よろこ}びを伝^{つた}へられん事^{こと}を乞^こふと呉^{くれ}々^{ぐれ}も善連^{ぜんれん}氏^しに依^い頼^{らい}したりと。^(註15)

「佳人之奇遇」は、セイロン島に流刑されたアラビー・パシャの要請で幽蘭の父、幽将軍がスーダンで「マフディ（マージ）の反乱」を助けることになるが、散士はマフディーを「偽聖魔治^{ぎせいまじ}」と書いているが、マフディーがイスラームの經典に忠実でムスリムの反英闘争を指導した史実をかなり正確に記述している。また、アラビー・パシャについても愛国心、宗教心の強い人物として描いているが、イスラーム教、イスラーム世界についての論評はほとんどない。「佳人之奇遇」は「弱小国」エジプトの不幸が日本で繰り返されないことを呼びかける警世の書であり、後半は日本の散士が

主人公で、朝鮮半島をめぐる清国との争いに巻き込まれる。

散士は1897年(明治30年)10月に「佳人之奇遇」第8編(巻15-巻16)を出版したが、未完に終わった。散士は「佳人之奇遇」を執筆中の1892年(明治25年)の衆議院議員選挙で福島県選出の衆議院議員に当選、国権伸張と東亜振興を訴えた。1894年(明治27年)立憲革新党を結成、その後進歩党、憲政党、大同倶楽部などの幹部として活躍、1898年(明治31年)には農商務次官、大正4年に外務参政官に就任した。

第3章第1節 注

1. 東海散士「佳人之奇遇」『明治文学全集6 明治政治小説集(二)』著者代表 東海散士筑摩書房 1967年(昭和42年)8月発行。巻一P.4。
2. 「日本文芸鑑賞事典——近代名作1017選への招待——」第1巻(明治3年-28年)ぎょうせい 1987年(昭和62年)8月第1刷発行。P.79。
3. 柳田 泉「政治小説の一般(二)」『明治文学全集6 明治政治小説集(二)』P.445。
4. 柳田 泉「『佳人之奇遇』とその作者について」『明治文学全集6 明治政治小説集(二)』P.477-478。
5. 東海散士 前掲書 自序P.3。
6. 柳田 泉「『佳人之奇遇』とその作者について」PP.483-484。
7. 1886年(明治19年)8月10日付讀賣新聞朝刊。
8. 1887年(明治20年)2月10日付讀賣新聞朝刊。
9. 1888年(明治21年)1月25日付讀賣新聞朝刊。
10. 1882年(明治15年)12月15日付讀賣新聞朝刊。「前号に記載せし埃及のアラビーはいよいよ与党の者と共に印度のセイロン島へ遠流さる事に決定せし旨、去る八日龍動発の電報に見えたり」アハマド・ウラービー大佐(1841年-1911年)はエジプトの英仏共同管理などに反対し、立憲制の確立を目指して民族主義闘争を展開したが、1882年に英軍に鎮圧され、他の首謀者6人と共にセイロン島に流された。
11. 柳田 泉「『佳人之奇遇』とその作者について」前掲書P.478。
12. 藤田みどり「アフリカ『発見』——日本におけるアフリカ像の変遷」世界歴史選書 岩波書店 2005年5月第1刷発行。PP.127-128。
13. 1889年(明治22年)12月2日付讀賣新聞。アラビー運動と「埃及近世史」

などについては、杉田英明「日本人の中東発見」前傾書 PP.112-129 参照。

14. 1889 年 (明治 22 年) 12 月 2 日付讀賣新聞朝刊。谷干城將軍 (隅山居士) 序文掲載。

15. 1890 年 (明治 23 年) 11 月 11 日付讀賣新聞朝刊。

第 2 節 千夜一夜物語の日本語訳

1. ヨーロッパの「千夜一夜」熱

「アラビアンナイト (千夜一夜)」物語はアラビア語で書かれた大説話集で、インドやペルシャなどの古い説話が起源とされる。西暦 9 世紀ごろペルシャ語の「ハザール・アフサーナ」という書がアラビア語に翻訳され「アルフ・フラハ (千の不思議な物語)」ないし「アルフ・ライラ (千夜物語)」と呼ばれたという。もちろんアラブの隊商やベドウィン (遊牧民) の天幕で語り継がれた説話も数多く入っていたと見られる。そして「アルフ・ライラ・ワ・ライラ (千と一夜の物語)」と呼ばれるようになったのは西暦 10 世紀末ではないか、とされる。^(註1)

「アラビアンナイト」は、9 世紀から数世紀をかけてアラブ・イスラーム世界で民衆の口承文学として、写本の伝統の中で伝承されてきた。アラブの民衆の喜び、悲しみ、怒りなどを表現した「貴重な文化財」で「文学史上の華」である。^(註2)そして、アラブ・イスラーム世界の一大文化遺産がヨーロッパに最初に伝えられたのは、フランスの東洋学者、ジャン・アントワーヌ・ガラン (1646 年-1715 年/正保 3 年-正徳 5 年) が「ミル・エ・ユヌヌ・ニューイ (千一夜物語)」第 1 巻を翻訳、紹介した 1704 年 (宝永元年) のことである。ガランの翻訳は 15 世紀の写本を元にした不完全なもので、後半部分はアレppoのマロン派キリスト教徒ハンナーの記憶に頼ったため、ガランが大幅に改変ないし翻案した部分があるという。^(註3)

しかし、ガラン訳の「アラビアンナイト」は当時のフランス上流社会で圧倒的な人気を呼び、英語をはじめヨーロッパ各国語に重訳され、「ヨーロッパにおけるオリエンタリズムの隆盛に拍車をかけた最大の要因だった。」^(註4)ガラン訳は 1704 年 (宝永元年) から 1705 年 (宝永 2 年) にかけて

第1巻から第6巻まで、1706年(宝永3年)に第7巻、1709年(宝永9年)に第8巻、1712年に第9巻と第10巻、1715年(正徳5年)に第11巻と第12巻が出版された。^(註5)このうち第8巻の大部分は、東洋学者のプティ・ド・ラ・クロワがトルコ語の写本から訳した物語で、問題もあったが、欧米各国の市民たちはもとより、ヴォルテール、スタンダール、エドガー・アラン・ポーら欧米の多くの文学者らがガラン訳を愛読し、ヨーロッパに東洋趣味を生み出した。

しかし、アラビア語原典からの完全な「千一夜」全てを含んだ物語は19世紀半ばまで待たなければならなかった。ガラン訳は「千一夜」でなく、4,500夜分しか翻訳しなかったらしい。その後、アラビア語による写本の校訂が進み、新しい物語を加えた写本も発見された。

カルカッタ第1版(1814年-1818年/文化11年-文化15年)全2巻200夜まで。

ブレスラウ版(1825年-1843年/文政8年-天保14年)全12巻。偽写本を含み、学術的評価は低い。

ブーラーク第1版(1835年=天保6年)全2巻。エジプト系写本。

カルカッタ第2版(1839年-1842年/天保10年-天保13年)全4巻
カルカッタ第1版、ブレスラウ版を含む。最も完備した印刷本。

バイルート版(1888年-1890年/明治21年-明治23年)全5巻。ブーラーク版などが底本。^(註6)

ガラン訳はヨーロッパ各国語に重訳されたが、中でも英語訳の「アラビアンナイト・エンターテインメント」が世界中に「千夜一夜物語」を広めるきっかけとなった。1706年(宝永3年)、ガラン版の英訳が「アラビアンナイト・エンターテインメント」として出版され、1712年(正徳2年)に第2版、1715年(正徳5年)に第3版が出版された。1713年(正徳3年)には旧版をまとめた「アラビアンナイト・エンターテインメント」全6巻が出版されている。^(註7)

当時のイギリスでは新しい市民階級が育ち始め、娯楽性とともに見聞文学としてのアラビアンナイトに強い関心が集まった。イギリスでは、「アラ

「ビアンナイト・エンターテインメント」が数多く出版されたが、その内容を教訓的に改変し、児童文学書としての地位を確立する。その一方で、「アラビアンナイト」はサー・リチャード・バートン (1821年-1890年/文政4年-明治23年) の翻訳によって代表的な好色文学としても有名になった。

アラビア語版からの翻訳で知られているのは、ガラン、バートン版の他、エドワード・ウィリアム・レイン (1801年-1876年/享和元年-明治9年)、ジョン・ペイン (1842年-1906年/天保13年-明治39年)、ジョセフ・シャルル・ヴィクトル・マルドリユス (1868年-1949年/明治元年-昭和24年) が良く知られている。レインの部分訳 (1839-1841年/天保10年-天保12年)、マックス・ヘニングのドイツ語全訳 (1895-1899年/明治28年-明治32年)、マルドリユスのフランス語全訳 (1899年-1904年/明治33年-明治37年) はブーラク版、ペインの英訳 (1882年-1884年/明治15年-明治17年)、バートンの英訳 (1885年-1888年/明治18年-明治21年)、エンノ・リットマンのドイツ語訳 (1921年-1928年/大正10年-昭和3年) はカルカッタ第2版から生み出された。^(註8)

2. 日本の「千夜一夜」

「アラビアンナイト」の最初の日本語訳が出版されたのは1875年 (明治8年) 2月であった。訳者は永峯秀樹、題名は「開巻驚奇 かいかんきょうき 暴夜物語 あらびあものがたり」である。^(註9) 「開巻驚奇」は「巻を開きて奇に驚く」の意味で、中国明代の小説集の題名を意識したもので、読者の関心を引き寄せるための命名と見られる。「暴夜 あらびあ」も暴れる夜という文字をアラビアのナイト (夜) に模している。これも読者に奇書であることを強く印象づけるための巧妙な翻訳といえる。^(註10)

- 一 原書ハ「アラビアン・ナイトス」ト云ヒ、専ラ欧州ニ行ハレ毎戸ニ蔵シ、每人讀マサルナク、讀ム者為ニ寢食ヲ忘ルルニ至ルト云フ。
- 一 欧州諸家、此書の出処ヲ論ズルナラズ。或ハ比耳西亜 べるしあト云ヒ、

或ハ印度ト云ヒ、或ハ^{あらびあ}亜刺比亜ト云フ。然レドモ其材料トスル事物ニ至リテハ蓋ク古書中ノ最モ古キ者ノ中に証ヲ取ルベク、其風俗、思想、宗教、蓋ク回教ヲ宗トセルハ諸家ノ一致スル所ナリ。^(注11)

永峯は冒頭の「小引」で、ヨーロッパでは家々毎に人々が寝食を忘れて「アラビアンナイト」を読んでいる、としている、また、「アラビアンナイト」の出処についてはペルシャ説、インド説、アラビア説といろいろな説があるが、描かれた風俗、思想、宗教についてはイスラームに基づいている点ではすべての学者、研究者の意見が一致している、とする。

「暴夜物語」の原書は「英学士『タランスエンド』ノ自序」を「小引」としたことを明らかにしている。つまり、永峯の翻訳はジョージ・フライヤー・タウンゼント「アラビアンナイト」であると推定されている。杉田によると、タウンゼントの「アラビアンナイト」はガランの仏訳系統で、英東洋学者、ジョナサン・スコットが校訂した英訳を、タウンゼントが若者向けに簡略化したものだという。^(注12)

- 昔シ^{サッサニアン}佐々爾安ノ朝ニ一人ノ英主アリ。此帝王、生レナガラ知仁勇ヲ兼備シ、又幕下ニ勇将健卒多ク、臣民ハ之ヲ愛敬シ、敵國ハ之ヲ恐怖シタリ。帝二人ノ皇子アリ。兄ノ皇子ヲ^{スカリア}須加里阿ト名ケ、弟ノ皇子ヲ^{スカゼナン}須加是南ト名ク。共ニ賢明孝慈ノ誉レ高ク、万民^{きき}熙々トシテ君を仰グ。冬日ノ陽、夏日ノ陰ノ如ク、鼓腹シテ泰平ヲ楽シメリ。^(注13)

これはタウンゼントのアラビアンナイト原文の冒頭の部分(粹物語の「発端」)で、永峯の訳文は漢文直訳体と和文体カタカナ交じりで、当時としては読みやすい。^{サッサニアン}佐々爾安(ペルシャ)の^{えいまい}英邁な帝王に2人の王子、兄の^{スカリア}須加里阿(シャハリヤール)と弟の^{スカゼナン}須加是南(シャーゼナーン)がいたが、2人共に王妃の裏切りで女性不信に陥る前段である。

訳者の永峯秀樹(1848年-1927年/嘉永元年-昭和2年)は甲斐の国(山梨県)北巨摩郡出身。旧姓小野、父小野通仙は蘭方医だった。8歳から19

歳まで甲府にいたが、官立の^{きてんかん}徼典館で四書五経、軍書などを学んだ。1867年(慶応3年)永峯姓を名乗り、本式の士族となった。明治維新で、旧幕臣の多い静岡・沼津の兵学校に入学、英語や数学を学んだ。1871年(明治4年)東京・築地の海軍兵学校に入学するつもりだったが、沼津で学んだこと教える教官として勤務した。以後30年近く、永峯は築地、江田島海軍兵学校教官として、数学、航海術などを教えた。^(注14) 永峯は海軍兵学校の教官を勤めながら、経済学、数学、物理、農学、歴史学など幅広い分野の英書を翻訳し、明治前期の翻訳家として知られていた。ウォーカー「富国論」、チェスターフィールド「子に与うる書翰」、ミル「レプレゼンタチブ・ガバメント」(抄訳)、ギゾー「歐羅巴文明史」(英語からの重訳)「開卷驚奇 暴夜物語」などが代表的な翻訳書である。^(注15)

特に「暴夜物語」は明治時代前期に翻訳されたもので、英語からの重訳としても先駆的な翻訳であり、貴重なものと言える。明治維新後の日本人が欧米諸国の書籍に対する探究心と翻訳力を強く持っていたことを裏書している。永峯に次いで、明治時代に2番目に「アラビアンナイト」を翻訳したのは井上勤(1850年-1928年/嘉永3年-昭和3年)である。井上は1883年(明治16年)、「全世界一大奇書」(副題「原名アラビアンナイト」)として報告堂から10分冊、5分冊の合本として出版、1885年(明治18年)には同じ報告堂から1冊本として出版、さらに1886年(明治19年)に廣知社から1冊本、1888年(明治21年)に福田栄造(出版者)から第11分冊を加えた1冊本を出版した。井上訳は永峯訳と同じタウンゼンド版だが、永峯訳より数倍長く、版を重ねたことにより多くの読者を獲得した点、永峯訳より影響力があった。井上は「魯敏孫漂^{ろびんそんひょうりゅうき}流記」の翻訳でも知られる。柳田は「『魯敏孫漂^{ろびんそんひょうりゅうき}流記』は、井上氏の訳本中の白眉であろう。このころとしては逐字訳に近いといってよいもので、誠に珍しい。その点、井上氏の語学力の秀抜を証して余りある。装釘も当時としては面白いものである」と高く評価している。^(注16)

井上は阿波徳島の出身で、父井上春洋は蘭方医だった。7歳の時、オランダ人のドンケル・クルチウスに英語を学び、16歳の時、神戸のドイツ領

事館で通訳として働いたという。1881年(明治14年)大蔵省関税局の翻訳掛, 1883年(明治16年)には文部省で翻訳に従事した。井上は1882年(明治15年)にトーマス・モア「ユートピア」の邦訳「良政府談」, 1883年(明治16年)にはジュール・ヴェルヌ「月世界一周」, 「亜非利加内地三十五日間空中旅行」, シェクスピア「西洋珍説 人肉質入裁判」, デフォー「絶世奇談 魯敏孫漂流記」を翻訳している。^(注17) 明治時代の讀賣新聞を「アラビアンナイト」, 「千夜一夜物語」で検索すると, 計4件見つかった。

- 英文小説集 宗十郎町の吉岡商店より第一冊を出版したり。是にはアラビアン・ナイトとトンプソン・ホルの二つを載せられたり。^(注18)

- 新年早々議論でもあるまいし, ……室内旅行と言えは只書物でも繙く位なものである。……夜になって火の上のモーカ珈琲から立ちのぼる蒸発気に, アラビア物語の光景を眼前に浮めるといふ処があった。アラビアの夜物語は極めて愉快な讀みものである。お正月の讀みものとしては頗る相応しい。^(注19)

- アラビアンナイトの一節に, ロック鳥が両翼を張りて日光を遮りたりとありたればとて, ……我が古事記に存在せる或るものを以って, アラビアンナイトの他の部分を対照するも, 亦決して唐突の事なりと言ふべからず。……^(注20)

- 数世紀前の怪鳥の卵 半ば化石の状態なるものをマダガスカルより発見せり。……駝鳥の卵の六倍, 鶏卵ならば百五十個も合わせたる位ありて之れを食用に供する時は六人分の食料に充つることを得る……。「亜刺比亚夜物語」の中の「亜刺比亚の商人がマダガスカルへ行って卵を見た」とある彼のロックといふ鳥の事は(アフリカの怪鳥)エーピオルニス^{こと}の事には非ずやなど, 或学者は云えり。……^(注21)

明治時代の「アラビアンナイト」は永峯、井上訳のほか、十数点が出版された。主なものは以下の通りである。

◇矢野龍溪「波斯新説 烈女之名譽」文泉堂（村上真助）1887年（明治20年）「絵入教育改良小説」と銘打っている。「アリババと40人の盗賊」の日本語初訳。^(註22)

◇中川重麗「一千一夜譚」『通俗学芸志林』第9, 10号 1887年（明治20年）2-3月。

「ハザン、アルハバルの話」の部分訳。「ホジャ・ハサン・アル・ハッパールの話」の邦訳。^(註23)

◇横山峰一「波斯奇談 奇遇夢物語」盛春堂 1888年（明治21年）ドイツ訳「アラビアンナイト」の日本語訳と見られる。^(註24)

◇長尾藻城（玉藻生）「^{アラジン}亜刺丁物語 一名怪シノランプ」『西洋叢談』第1号 1888年（明治21年）「アラジンと魔法のランプ」の翻訳とされる。

◇尾崎徳太郎（紅葉山人）「やまと昭君」文庫 1889年（明治22年）8月出版 「アラビアンナイト」の中の「夫と鸚鵡」の翻案とされる。

◇高橋七郎（太華山人）「宝ばなし」青木嵩山堂 1896年（明治29年）5月出版 「アラビアンナイト」の「アラジン」を翻案したものと見られる。

◇尾崎紅葉「東西短慮之刃」春陽堂 1902年（明治35年）1月「アラビアンナイト」の中の「三つの林檎」の翻案とされる。

◇深沢由次郎「アラビアンナイト物語」世界奇書第1編 英語世界社 1904年（明治37年）4月発行。

◇井上 勤「アラビアンナイト物語」改訂 服部書店 1908年（明治41年）2月発行。

◇村田祐治・中村徳助「アラビアンナイト」精華堂 1909年（明治42年）9月発行。

◇巖谷小波編「世界お伽噺」63冊 博文館 1898年（明治31年）-1908年（明治41年）

そのうち「奇体の洋灯」「不思議の馬」「九番人形」が「アラビアンナイト」の話とされる。

◇ 巖谷小波編「世界お伽噺」27冊 博文館 1908年(明治41年)－1913年(大正2年)

そのうち「妖怪壺」が「アラビアンナイト」の話とされる。(註25)

このうち尾崎紅葉(1868年－1903年/明治元年－明治36年)の「やまと昭君」「短慮の刃」の成立過程が興味深い。尾崎は「やまと昭君」の自序で次のように記している

○ このものがたりもと 此物語は原『あらびあん ないと』に見えたる、THE HUSBAND AND THE PARROT (夫と鸚鵡)の作意を翻案せしに、稿成つてののち ばきんおう ぼんせきべいざん き み これ に きやくしよく せんじん すでにかく物したまへるからは、毛延壽が姿絵より、なほこれの醜かるべし。面曝さむも羞かはしと、古筐の底に陰れ、満面の古沙に浅ましく衰え果、うき年月を過しける。……(註26)

この物語は本来「アラビアンナイト」の「夫と鸚鵡」を翻案したものだったが、作品が完成した後に、尾崎紅葉は江戸時代後期に活躍した曲亭馬琴の「盆石皿山記」が同じような話であったことに気づき、恥ずかしくもあったので原稿を古箱に入れたまま年月がすぎてしまった……というような意味だろう。毛延壽は漢代の画家で後宮の美女、王昭君の肖像を醜く描いて皇帝に見せたことで有名だった。「夫と鸚鵡」は嫉妬深い夫が留守中、記憶力のよい鸚鵡に妻の間男を探らせる物語だが、間男を見つけられて懲らしめられた妻が逆に鸚鵡の周りで騒ぎ立て、帰宅した夫が鸚鵡の話を偽りだと怒って殺してしまう。その後夫は妻の企みを発見し、妻と間男を殺してしまうという話である。

また、「東西短慮之刃」の正式題名は「武蔵の名香 阿剌比亞の林檎 東西短慮之刃」である。この話は1899年(明治32年)12月、讀賣新聞が主

幸した「口演百譚」、現代風に言えば「学者・文学者講演会」の講演原稿だった。

- 口演百譚 日本人が兎角話下手にて、品善くして趣味ある物語を
談ずるの習なきを憂い、茲に学者講談会とも称すべきもの起り、其の
発会の席上、坪内逍遙氏の「ソクラテス」、巖谷小波氏の「架空旅行」、
長田秋濤氏の「大邦翁の臨終」、尾崎紅葉氏の「短慮の刃」等、二十世
紀的講談ありたり。本社は乞うて之を讀賣新聞に連載し、猶第二回以
後、諸大家の百譚に及ぶべし。(註27)

尾崎紅葉の口演は1900年(明治33年)1月23日から2月5日まで、讀賣新聞に13回連載され、その後出版された。紅葉の口演によると、「武蔵の名香」の原書は、錦文流著「本朝諸士百家記」全10巻(1709年=宝永6年版行)の中の「武蔵國花房空之丞短慮之事」で、「阿刺比亞の林檎」の原書は「アラビアンナイト」の「三つの林檎」で、よく似た2話を合体させたものだという。(註28)

「三つの林檎」は「やまと昭君」と同じように、夫が第三者の言葉を軽率に信じ、無実の妻を殺してしまう話である。ハルーン・アッ・ラシード時代のバグダッドで病気の妻が林檎を食べたいと言ったので、夫は2週間かけて南部の港町バスラで林檎3個を買って帰宅するが、妻はもういらなくなった。ところが、街頭で出会った一人の黒人の男が林檎を持っていたので話を聞くと、彼の情婦のところから1個もらってきたと自慢げに言った。夫が家に戻ると林檎は2個しかなかった。怒りに駆られた夫は妻を殺し、死体を切り刻んでティグリス川に捨てた。家に戻ると長男が泣いていた。林檎を持ち出したのは息子で、それを黒人の男に取られたという。(註29)

他方、「武蔵國花房空之丞短慮之事」は主人公、花房空之丞の妻が隅田川に納涼に行った際、若侍の狼藉にあい、夫が殿から拝領した名香の箱を川に投げ込んだ。香箱は空之丞の同僚が下流で見つけ、後日「濡事一件」として作り話をした。これを聞いた空之丞が妻の父に伝えると、昔かたぎの

父がその場で娘を打ち首にした、という。

「東西短慮之刃」には末尾に英語書名として、The Japanese Desdemona, tr. by Miss T. Kimoto (日本のデズデモーナ) と記されている。尾崎紅葉は、シェークスピアの「オセロ」で主人公のオセロが嫉妬から妻のデズデモーナを殺してしまう話についての知識を持ち、その話をかなり意識していた、ということになる。

紅葉は「名香めいこうを使った所つかは日本的ところ、そこを林檎りんごとは歐羅巴的ヨオロッパてきで、比較ひかくしてみると、面白おもしろい所ところがある」と書いている。「アラビアンナイト」の「三つの林檎」を「歐羅巴的ヨオロッパてき」としているところから判断して、「アラビアンナイト」がアラブ・イスラーム世界の物語であるという認識はなかったといえる。だが、明治時代に、日本の古い物語(説話)とヨーロッパ経由で伝えられた「アラビアンナイト」の説話を比較、検討し、類似性を発見したことは重要な点だろう。題名を「東西短慮之刃」としたことは、紅葉が東西説話の比較という明確な視点を持っていたことを示している。

大正時代から昭和時代初めにかけて、「アラビアンナイト」は木下杢太郎、日夏耿之介、北原白秋、菊池寛らの文学者に影響を与えた。井上勤訳「全世界一大奇書」は1908年(明治41年)2月、「アラビアンナイト物語」改訂として出版され、さらに読者を増やしたといわれる。その後も「アラビアンナイト」の日本語訳は続いた。

◇杉谷代水「アラビアンナイト」上下巻 富山書房 1914-15年(大正3-4年)

◇日夏耿之介「一千一夜譚」上巻『世界童話大系』第12巻(亞刺比亞編) 1925年(大正14年)^(注30)

◇菊池 寛「アラビア夜話集」興文社 1928年(昭和3年)

◇中村 伸「アラビアンナイト」〈ARABIAN NIGHTS' ENTERTAINMENTS〉英文世界名著全集 第24巻 英文世界名著全集刊行所 1928年(昭和3年)1月

◇大宅壮一「千夜一夜物語」全13巻 中央公論社 1929-30年(昭和4-5年)^(注31)

◇森田草平「千一夜物語」第1－4巻 国民文庫刊行会 1930年（昭和5年）

◇大木篤夫「千夜一夜詩集：アラビアンナイトより」春陽堂 1941年（昭和6年）

明治、大正、昭和初期の「アラビアンナイト」日本語訳を読むと、いくつかの特徴が浮かび上がってくる。第1の特徴は、日本初訳の永峯秀樹訳に見られるように、漢文学の素養を生かし、「知仁勇」「孝慈」「冬日ノ陽」「鼓腹」などの言葉を使って訳していることである。明治時代のムハンマド伝がそうであったように、訳語に仏教用語、「中庸」などの中国典籍を使用している例が多い。第2の特徴は、「アラビアンナイト」の持つ娯楽性である。尾崎紅葉は江戸時代の曲亭馬琴の読本「盆石皿山記」などを参考にして物語を組み立て直している。好色文学としても有名な「アラビアンナイト」はバートン版の翻訳まで待たなければならなかった。昭和時代の戦前期では、バートン版の好色部分は検閲で削除されるなど、軍国主義の傾向が強まり、娯楽性を失わせていった。

第3の特徴は、「アラビアンナイト」を娯楽書としてではなく、教訓物語、あるいは児童書として刊行したことだった。横山峰一「波斯奇談 奇遇夢物語」では序文で「児女を教育する」とあり、高橋七郎（太華山人）「宝ばなし」でも緒言で「^{はしがき}子供の友に^{こども}供せん^{とも}とて、^{きょう}此に書肆の^{ここ}需むる^{しよし}が^{もと}まま^{そうこう}草稿を授けて^{さず}剗^{きけつ}に^ふ附せしむるになん」と書いている。^(注32) また巖谷小波編「世界お伽噺」、日夏耿之介「一千一夜譚」『世界童話大系』などは児童書として出版された。以下は大正時代の讀賣新聞の「批評と紹介」欄に書かれた寸評である。

- アラビアンナイト物語（少年通俗教育会編，上巻「世界童話」第三集）本文全部四号活字振仮名附で尚ほ児童の讀物として如何わしい節は原作から削除するなどの注意も行き届いている。優美な挿絵も豊富であり、童話集として正に代表的の価値が充分である。^(注33)

第4の特徴は、「アラビアンナイト」が英語を学ぶ手法の一つとして出版されたことである。1904年(明治37年)に出版された深沢由次郎訳「アラビアンナイト物語」は英語世界社という出版社で、同出版社は他にも「英文珍談逸話集 STORIES AND ANECDOTES」,「英文愛読叢書 第一編 英文冒険談 TALES OF ADVENTURES」などを出版している。同出版社は「アラビアンナイト物語」末尾で「全世界最も広く讀まれたる物語は此のアラビアンナイトに非ずや。従って、此の書中より引用せる故事熟語等頗る多きを以て、英語を学ぶ者は必ず一読すべきものに属す。単に娯楽として繙くも奇想天外より落ち、一度開かば再び閉ずるを忘れしめ、奇と呼び、快と叫ばしむ。巻末に添えたる註解は最も詳細を極め、最も正しく文法、字義、熟字を丁重に説明せり」。(註34) 明治時代に「アラビアンナイト」が英語学習のために利用されていたことは非常に興味深い。

また、1928年(昭和3年)に出版された中村仲訳「アラビアンナイト」は英文、和文対訳で、正に英語学習用のものである。表紙も目次も英文で、本文は左ページが英文、右ページが和文で、全てのページに註解が付いている。(註35) ここでも「(此の物語は) 風俗習慣を微細に涉って描写してあって、公衆殊に青年男女の讀物としては、不適當に思われる。……種々迷った結果、純學術的のもの、純童話的なもの、又は、風紀を害するの恐あるものを、一切避け、比較的穩健で、文藝的価値も、相当豊かなりと思われるマクミラン版を選んだのである……」と断っている。(註36) 「アラビアンナイト」が「純學術的」かどうか疑問だが、昭和に入っても英語力向上に役立てようとする出版社の意図が読み取れる。

第5の特徴は、「アラビアンナイト」の翻訳書のどれも見ても、アラブ世界、イスラーム世界、あるいはイスラームについての知識を伝える意図がほとんどないことである。一部の訳書は脚注などでイスラームの奴隸制などについて解説しているが、正確ではない。またアッラー、ムハンマド、クルアーンなどの訳語を使っているが、その内容について注釈、注解などはない。「アラビアンナイト」の日本語訳はほぼすべて英語版で、挿絵もヨーロッパ的な衣装、建物などが描かれている。

例えば、1888年（明治21年）に出版された長尾藻城訳「^{アラジン}垂刺丁物語」で使われた挿絵は「魔術師からもらった銀貨を母に見せるアラジン」となっているが、母親はヨーロッパ風の長いスカートをはき、アラジンは上着にチェックのズボン姿、遠景には、尖塔に十字架の付いた石造りの教会の建物が描かれている。アラブ・イスラーム世界の物語とはまったく似つかわしくない挿絵となっている。^(注37)

第3章第2節 注

1. 「千夜一夜物語と中東文化」前嶋信次著作選1 前嶋信次著 杉田英明編 東洋文庫 669 2000年4月初版第1刷。PP.23-27。
2. 同上 P.165。
3. 保坂修司「千夜一夜物語翻訳事始——前嶋信次『アラビアン・ナイト』の歴史的意義について」『日本中東学会年報』第1号 1986年。P.362。
4. 同上 P.362。
5. 西尾哲夫「アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語」岩波新書 1071 岩波書店 2007年4月第1刷発行。P.41。
6. 前嶋信次，保坂修司，前掲書 西尾哲夫 同上参照。
7. 西尾哲夫 同上 PP.68-70。
8. 西尾哲夫 同上 PP.75-88。
杉田英明「日本語：『アラビアン・ナイト』翻訳事始——明治前期日本への移入とその影響——」『外国語研究紀要』第4号（1999）東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 2000年3月発行。P.2。
9. 永峯秀樹「開巻驚奇 暴夜物語」（半紙木板和装2冊本 卷之一40丁，卷之二45丁）奎章閣 1875年（明治8年）2月発行。
10. 杉田英明 前掲書 P.3。
11. 永峯秀樹 前掲書「小引」。
12. 同上。〈The Arabian Nights' Entertainments〉 a new edition, Revised, with notes, by the Rev. Geo. Flyer Townsend, with Sixteen Illustrations by Houghton, Dalziel, etc. London, Frederic Warne and co., 1866.
13. 永峯秀樹 前掲書卷之一 P.一-二丁。
14. 柳田 泉「明治初期翻訳文学の研究」明治文学研究第5巻 春秋社 1961年（昭和36年）9月第1刷発行。1935年（昭和10年）初刊本の復刻版

PP.291-296。

15. 1879年(明治12年)8月5日付讀賣新聞朝刊。「此ほど永峯秀樹氏が纂訳された興産教授農学初歩と經濟小学家政要旨の第二編が出版に成りました。」
16. 柳田 泉 前掲書 P.41。
17. 同上 PP.403-404。
18. 1887年(明治20年)6月22日付讀賣新聞朝刊 最近出版書。
19. 1909年(明治42年)1月10日付讀賣新聞朝刊, 日曜附録・外国文学の読書三昧。「室内旅行」と題した戸川秋骨の寄稿文(一部)。
20. 1910年(明治43年)1月1日付讀賣新聞朝刊。「アラビアンナイトの一説と我が古事記の俳優起源(一)」と題する照山・佐々木安五郎の寄稿文(一部)。
21. 1910年(明治43年)9月14日付讀賣新聞朝刊。
22. 杉田英明 前掲書 P.18。杉田は「矢野訳とされる」としているが, 国立国会図書館書誌情報では翻訳者名がなく, 「責任表示 村上真助抜粹」となっている。
23. 同上 P.22。
24. 柳田 泉 前掲書 P.489。「独逸一千一夜物語」の抄訳としているが, 独逸訳の「アラビアンナイト」としている。
25. 柳田 泉, 杉田英明 前掲書参照。国立国会図書館書誌情報参照。
26. 尾崎徳太郎(紅葉山人)「やまと昭君」自序 P.1。
27. 1899年(明治32年)12月18日付讀賣新聞朝刊。「口演百譚」を「学者講談会」と称しているのが興味深い。
28. 尾崎紅葉「武蔵の名香 阿刺比亞の林檎 東西短慮之刃」春陽堂 1902年(明治35年)1月発行。PP.4-6。尾崎紅葉著ではなく, 尾崎紅葉述, となっている。
29. 同上 P.6。紅葉は「三つの林檎」の原書を「ゼエ ストオリイ オフ ゼエ スリイ アプルス」であるとしている。
30. 日夏耿之介はエドワード・レインの英語抄訳版を「壹千壹夜譚」として, 1925年(大正14年)に上巻, 1926年(大正15年)に中巻, 1927年(昭和2年)に下巻を刊行している。いずれも『世界童話大系』第12巻(亜刺比亞編1), 同第13巻(亜刺比亞編2), 同第14巻(亜刺比亞編3)として刊行した。さらに, 1932年(昭和7年)春陽堂・少年文庫として「アラビアンナイト」1-6を出版している。
31. 大宅壮一「千夜一夜物語」はリチャード・バートンの英語完訳版である。

32. 高橋七郎 (太華山人) 「宝ばなし」 青木嵩山堂 1896年 (明治29年) 5月出版。P.2。
33. 1921年 (大正10年) 4月6日付讀賣新聞朝刊。
34. 深沢由次郎 「アラビアンナイト物語」 世界奇書第1編 英語世界社 1904年 (明治37年) 4月発行。
35. 中村伸 「アラビアンナイト」 〈ARABIAN NIGHTS' ENTERTAINMENTS〉 英文世界名著全集 第24巻 英文世界名著全集刊行所 1928年 (昭和3年) 1月発行。
原書はマクミラン・ポケット・クラシック (マクミラン版) でジョナサン・スコットが英訳したことを記している。
36. 同上 「小序」 P.5。
37. 杉田英明 前掲書 P.22。

第4章 ムスリムとクルアーン

第1節 日本人ムスリムとメッカ巡礼

エルトゥールル号事件は日本とトルコ (オスマン・トルコ帝国) 両国の友好関係をおある程度促進したが、日土修交条約締結などの具体的な動きとは結びつかずなかつた。しかし、明治以降の日本と日本人にとって、エルトゥールル号事件と、事件後の生存者送還のための軍艦比叡、金剛のオスマン帝国派遣は、イスラームとイスラーム教徒、そしてイスラーム国と接触する重要な機会となつた。

軍艦金剛の乗組員だつた大山鷹之介は「土耳其航海記事」の中で「土耳其^{とるこ}國ハ世界の良位置ニアリ。『コンスタンチン』ハ世界ノ良位置ノ最良位置ナリ。魯國ノ垂涎スル所以ナキニアラズ。」と伝え、トルコの地政学上の重要性とロシアの南下政策について簡潔に記述している。同時に大山は、オスマン帝国の財政上の困難さ、軍隊の士気の低下などについても言及している。^(註1) また、オスマン帝国の宗教を「モハメッド」宗とし、男子の服装と女子の服装が異なっていること、「女子ハ特別ノ服アリテ布呂敷ノ大ナルモノヲ纏ヒ唯其面部ヲ顯スノミ」「婦女ハ終日家アリテ家人ノ他外相見ザル

ヲ習慣トス」などと書き、一夫多妻、トルコ式浴場の利用方法についても触れている。大山はイスラーム教がトルコ社会の進歩を妨害しながらも、オスマン帝国全体の結束には役立っているとし、同国の矛盾を指摘している。^(註2)

エルトゥールル号事件後、オスマン帝国を訪問した山田寅次郎が日本人最初のイスラーム教徒(ムスリム)、と見られてきた。小村不二男(ムスタファ・ムハンマド)によると、最初の日本人ムスリムは貿易会社員、有賀文八郎で、1892年(明治25年)頃インドのボンベイで入信、2番目は同年4月イスタンブールを訪れた山田寅次郎で、1902年(明治35)頃、入信したという。^(註3) 杉田は「(山田寅次郎は)茶道の宗^{そうへんりゅう}流家元第八世であるが、一九〇二年頃、日本人最初のムスリムになっている」と記している。^(註4)

一方、長場は「ムスリムになった最初の日本人は1909年(明治42年)11月、メッカ巡礼に赴く途次、ボンベイで改宗した山岡光太郎であるといわれてきた。ところが、それよりも10数年前すでに日本人ムスリムが誕生していたのである。山田がその日本人に違いない、と考えられる」としている。^(註5) 小村は、1902年(明治35年)ごろ山田がアブデュル・ハミト2世にイスラーム入信を勧められ、皇帝自らアブドル・ハリルというイスラーム名を授けたので入信、「ここにアフマッド有賀文八郎とあい前後して邦人ムスリムの草分けが誕生した」としている。^(註6) 杉田も、「最初のムスリム山田寅次郎は、エルトゥールル号事件ののちに赴いたイスタンブールで一九〇二年頃、また有賀文八郎も貿易会社の社員として訪れたインドのボンベイで一九〇二年(一説には一九三〇年代末)に、それぞれ信徒になった」と記している。^(註7) 小村、杉田、長場らの記述はいずれも正確ではなかった。

1. 日本人最初のムスリム・野田正太郎

近年、日本人最初のムスリムは、軍艦比叟に乗艦し、イスタンブールに約2年間滞在した時事新報記者、野田正太郎(1868年-1904年/明治元年-明治37年)、であることが次第に明らかになってきた。^(註8) 野田については、第2章第2節3で触れたように、1891年(明治24年)エルトゥール

ル号の生存者、遺族への義捐金をオスマン帝国政府海軍省に手渡した後、「イスラーム世界における最初の新聞特派員」として約2年間、イスタンブールで取材活動を続けた。^(註9) オスマン帝国側の記録文書によると、野田は山田がイスタンブールに到着する約10ヶ月前の1891年（明治24年）6月、イスラーム教に改宗し、アブデュル・ハリムというイスラーム名を得たとされる。^(註10) 野田のイスラーム教への改宗はイスタンブールの新聞、雑誌が大きく取り上げたため、現地で広く知られるところとなった。^(註11)

先行研究の誤りは、1893年（明治26年）8月4日付毎日新聞によると見られる。毎日新聞は「ある西字新聞」の情報として「2年前、日本貴人の年若きもの一人」イスタンブールを訪れて苛蘭（クルアーン）を研究し、「アブダルハリル」と名乗り、2年間の研究を終え、帰国した、と伝えた。小村はこの「アブダルハリル」を山田寅次郎とし、中田も「どうも山田寅次郎氏以外、これに結びつけられる人物は見当たらないようである」とした。^(註12)

しかし、毎日新聞の伝える「2年前」にイスタンブールに滞在していた日本人は山田ではなく、野田だった。野田は1891年（明治24年）1月にイスタンブールに到着し、新聞特派員として約2年間駐在した。山田のイスタンブール入りは1892年（明治25年）4月だったから、「アブダルハリル」を野田と見る方が妥当だろう。

野田は比叡、金剛が1891年（明治24年）1月2日にイスタンブールに入港し、諸行事を終え、2月10日イスタンブールを出港する際に乗組員らと共に帰国する予定だったといわれる。事情が一変したのは、アブデュル・ハミト2世が日土関係強化のため、日本海軍士官数名を残し、オスマン帝国の国情とトルコ語を学ぶとともに、オスマン帝国の将校に日本語を教授するよう要請したことからだった。比叡艦長の田中綱常大佐、金剛艦長の日高壯之丞大佐の報告書によると、両艦長はオスマン帝国の国情を知り、トルコ語を学ぶことに理解を示したが、日土間に外交関係がないこと、海軍士官は練習候補生の教員で貴重な人材であることなどを理由に、現地に残れないとして丁重に断ったという。^(註13) その後もオスマン側は一部将校

の残留を要請してきたので、両艦長は同行していた時事新報記者、野田を推薦した。2月8日のオスマン側主宰の「告別の宴」に出席した野田は、民間人としてアブデュル・ハミト2世に初めて謁見し、皇帝から握手され、イスタンブール残留を要請されたという。野田は1981年(明治24年)5月24日付時事新報に「前代未聞の事」としてイスタンブール駐在の新聞特派員になると同時に、オスマン帝国士官学校で日本語を教えることになった事情を書いている。^(註14)

野田は1868年(明治元年)1月、青森県陸奥国三戸郡八戸町で士族、野田稗の長男として生まれた。1886年(明治19年)慶応義塾に入塾、経済学、英学、論理学を学んだ。卒業年月は不明だが、福沢諭吉に認められて時事新報記者となった。野田は入社後間もなくエルトゥールル号事件に遭遇したことになる。

野田は10月7日横須賀港で軍艦比叡に乗艦し、10月10日神戸港で同艦にトルコ人士官4人を含む34人の生存者が乗艦し、金剛には35人が乗り込んだ。野田は比叡で3等イマームら3人の士官と親しくなり、オスマン朝やトルコ語などについて「取材」と見られる。^(註15) 彼らはまた、内藤の指摘した「三等僧侶クラーン暗記係アリーエッフエンデー」と同一人物と見られる。^(註16) 野田は10月13日長崎港に寄港すると、長崎新聞社に依頼し、トルコ語(アラビア語)と日本語を印刷した名刺を50枚注文した。おそらく日本で初めてのトルコ文字(アラビア文字)の名刺で、野田はイスタンブールに到着後、取材に利用したと見られる。^(註17)

野田の取材活動は比叡航海中でも積極的だった。彼は比叡、金剛が1891年(明治24年)1月2日イスタンブールに到着するまで、各寄港地から「日本軍艦土耳其航海記事」として郵便で原稿を東京に送り、計23本が時事新報に掲載された。^(註18) また、比叡、金剛のイスタンブール碇泊中に「君士但丁堡コンスタンチノープルの記」と題した記事計8本が紙面化された。さらに、野田はオスマン帝国駐在の唯一の日本人駐在特派員として、1891年(明治24年)1月から離任する1892年(明治25年)12月までに駐在したが、この間計41本の原稿が時事新報に掲載されたという。^(註19) 日本人初のイスラーム世界

駐在特派員の貴重な記事内容について、今後綿密に検討する必要がある。

野田は病気を理由に1892年（明治25年）12月中旬、イスタンブールを離れた。しかし野田は約2年間、オスマン帝国の士官学校で5人の士官に日本語を教えた功績で、アブデュル・ハミト2世から勲章を授与されている。野田は汽車でウイーンに向かい、その後パリに滞在、大西洋を渡ってアメリカを訪問し、更に太平洋を渡って日本に帰国したと思われる。野田が病気だったというより2年間のオスマン帝国滞在を区切りに、離任の約8ヶ月前にイスタンブール入りした山田寅次郎に日本語教師の職を譲った可能性がある。^(註20) 山田は「當時比叡艦に便乗したる時事新報記者野田正太郎氏は、日本語学の教師として暫く同國士官学校に留まり、士官五名に日本語を教授したりき」とだけ記述している。山田は野田の帰国後、士官学校の日本語教師になったのだが、野田についてはわずか2行しか触れていない。^(註21)

野田は帰国後の1893年（明治26年）5月から8月までの間にオスマン帝国の一般社会の生活、などについて計25本を執筆している。^(註22) 三沢は「イスラーム世界との接点が薄かった当時の日本社会にとって、実体験に基づく野田の記事は真新しい情報であふれていた。日本にオスマン朝を紹介することにおいて野田は極めて先駆者として大きな足跡を残している」と評価している。^(註23)

その後、野田は時事新報を退社し、別の新聞社で働いたと言われるが、詳細は不明のまま。野田については1896年（明治29年）9月、私印私書偽造事件の容疑者として拘引された、という。^(註24)

1897年（明治30年）3月13日付讀賣新聞は、野田が私書偽造罪で東京地裁で重禁固1年を津等として東京控訴院に控訴したが、棄却されたと伝え、翌3月14日大審院に上告の申し立てをした、と伝えた。野田は最終的に有罪となったが、1900年（明治33年）7月23日、華族北小路俊岳詐欺被告事件の関係者として再び拘引された。^(註25)

○ 野田正太郎の控訴棄却 こうそ ききやく 野田正太郎は私書偽造罪に依り先に東京地 の だしょうたろう ししよ ぎぞうざい よ さき とうきょうち

ほうさいばんしよ おい じゅうきん こ ばっきん えん かんし はんけつ う
方裁判所に於て重禁固一年、罰金二十圓、監視六月の判決を受けたるを
ふとう とうきょうこうそいん こうそちゆう ところ さくじつどういん みぎ こうそ りゆう
不當とし、東京控訴院へ控訴中の処、昨日同院にて右の控訴は理由なき
ものとして控訴棄却の判決を与えられたるよし。(3月13日付)

- 野田上告 ^{さぎはん の だしょうたろう だいいっしんはんけつ ふとう} 詐欺犯の野田正太郎は第一審判決を不當とし、^{こうそ} 控訴したるも、^{きぎやく} 棄却となりしに付、^{つき またまたこれ ふとう} 又々之を不當とし、^{さくじつだいしんいん じょうこく もうしたて} 昨日大審院に上告の申立をなしたり。(3月14日付)

- ^{かぞくきたこうじ れんるいしゃこういん} 華族北小路の連累者拘引せらる。 ^{だんしゃくきたこうじしゅんがく さぎ ひこくじけん} 男爵北小路俊岳詐欺被告事件の ^{れんるいしゃ の だしょうたろう} 連累者なりといふ野田正太郎といへるは ^{さきころ ぼうしんぶんしゃ い やま} 先き頃まで某新聞社に入りて ^{だしょうたろう ぎぬい い もの よし} 山田正太郎と偽名し居たる者の由なるが、^{さくじつ ござん じ ふんけいしちよう} 昨日午前十一時三十分警視庁の ^{て こういん} 手に拘引せらりたりと。(7月23日付)

野田は1904年(明治37年)4月27日に死去した。37歳だった。野田が後年、事件に関与したことは遺憾だが、日本人で初めてイスラーム世界に駐在し、現地情勢を伝えた新聞特派員だったこと、日本人最初のムスリムだったこと、に変わりない。野田については、今後再評価されるべきではないだろうか。

2. 日本人2人目のムスリム・山田寅次郎

山田寅次郎(1866年—1957年/慶応2年—昭和32年)は日本とトルコが国交を樹立するはるか以前から、両国間の友好関係に寄与した点で特筆すべき人物である。多くの先行研究で「日本人最初のイスラーム教徒」とされてきたが、前述したとおり、「日本人2人目のムスリム」であると思われる。

山田は1866年(慶応2年)8月23日、旧沼田藩江戸詰め家老、中村雄左衛門の次男として生まれた。10代のころに漢学、英語、ドイツ語、中国語を学び、さらに横浜で英語、フランスを学んだという。1883年(明治16年)茶道の宗家、宗徧流家元、山田宗寿の養子となり、山田姓を名乗った。

東京に戻った山田は日本新聞社の陸羯南、福本日南、朝比奈知泉らと親交を結び、文筆活動に入った。^(註26)

山田はエルトゥールル号遭難事件を新聞で知ると、日本新聞社のジャーナリスト、陸羯南、福本日南らに相談し、演説会や演芸会、あるいは新聞広告を通して、遺族らのために義捐金募集の運動を始めることに決めた。日本新聞社は新聞社としての義捐金募集は行わず、山田の演説会、演芸会などを支援する形で協力したと見られる。山田は新聞各紙に遭難事件が報道されてから3日目の9月21日に第1回演説会を東京上野で開催し、10月12日まで計15回開催したという。^(註27) 山田のトルコへの渡航する際の送別会が1891年（明治24年）10月3日に行われるという予告記事があるが、実際の渡航は翌年1892年（明治25年）1月30日なので、送別会からかなり遅れたことになる。^(註28)

また、山田が個人的な義捐金募集運動で、最終的にどのくらいの義捐金を集めたのかは不明のままである。山田の回顧録にも、評伝にも正確な数字は出てこない。^(註29) トルコの日本研究家、セルチュク・エセンベルは「エルトゥールル号遭難事件から二年が経った一八九二年、山田は大々的なキャンペーンによって日本各地から寄せられた遺族への義捐金五、〇〇〇円（現在の価格で約1億円）と要人の紹介状を携えてイスタンブールへと赴いた。」と書いている。^(註30)

しかし、時事新報社が全社的な義捐金キャンペーンを続けて4248円余を集め、野田正太郎がトルコに持参したのに対し、山田の個人的な努力でこれほどの大金を集めることができたか、明確な証拠が発見されていない。トルコ側の資料を詳細に検討する必要があるだろう。

1892年（明治25年）4月4日イスタンブールに到着した山田は、外務省、海軍省に行き、正式に義捐金を手渡した。その後山田はアブデュル・ハミト2世に拝謁し、山田家に伝わる兜、甲冑、陣太鼓などを贈った。トルコ側は日本との修交・通商条約の締結を強く望んでいたこともあり、山田はトルコとの交易の可能性を模索することになる。オスマン帝国政府は山田に士官学校の士官に日本語を教授するよう求められた。士官学校では1年

以上前から野田正太郎が士官に日本語を教えていたから、一時期、山田と野田の2人が教えていたことになる。

山田はアブデュル・ハミト2世の厚遇を受け、同時にトプカプ博物館の東洋美術工芸品の目録作成に協力した。山田のトルコ滞在の目的は、アジアで独立を保持しているのは日本の他は中国とトルコしかないとし、トルコは近年国勢が振るわないとはいえ、「彼我交通の道を開かんこと、決して無用の事にあらざる可し」として二国間関係の強化を目指したようだ。^(註31) 山田は1886年(明治29年)2月帰国し、日本産品の調達と日本・トルコ両国の交易の可能性を探った。山田は青木周蔵外相の後任となった榎本武揚外相に面談し、両国間の親善を強化するため、通商、貿易の促進を訴えたという。^(註32) 榎本外相の協力もあって、山田は東京、大阪で講演会を開き、トルコの政治、経済事情などについて講演した。^(註33)

山田は同年12月、日本の絹物、茶、陶器、漆器などの雑貨を持ってイスタンブールに戻り、販売したという。^(註34) アデュル・ハミト2世は日本の繊細な工芸品に関心を示した他、日本の鳥類や植物などを要望した。山田は1899年(明治32年)7月再び帰国し、イスタンブールで世話をした名士たちのうち、東伏見宮親王よりちゃぼ一番、細川護成より黄鳥小錦鳥、徳川頼倫より駒鳥瑠璃鳥、青木周蔵元外相より金銀製の短刀一振り、小倉久和歌山県知事よりオスマン・パシャ以下の遭難者の墓石などの写真を託され、同年12月イスタンブールに戻った。^(註35) 当時の報知新聞によると、オスマン帝国の皇室では日本風建築を取り入れたり、親日家のアブデュル・ハミト2世が画筆、墨などの日本画用品一式を注文したことなどが報道された。^(註36)

山田は異例なことに、アブデュル・ハミト2世に計3回、謁見を許されたが、ある時日本品を販売する店を開くように勧められ、「中村栄一という日本人と一緒に中村商店という名前の雑貨店で商業、貿易業を営むことにした」という。^(註37) 中村商店がいつ開店したのか、山田の友人とされる中村栄一についてもほとんど不明である。ただ、前述の1898年(明治31年)8月31日と1899年(明治32年)1月21日付報知新聞によると、トルコ

皇室の日本風御殿の建築のため大工道具などを用意したのが「大阪東区今橋三丁目中村又兵衛氏」、さらにアブデュル・ハミト2世が要望した日本画用品一式を用意したのが「同国（トルコ）に商業を営む大阪市東区三丁目中村商店」とあるので、中村栄一は本店の中村又兵衛と何らかのつながりがあると思われる。^(註38)

- 土耳其皇室にては、今回皇女某殿下とカジーオスマンパシャの次子と御婚儀をあげさせらるるに付き、その御婿入りの時に用いらるる新御殿を、全く日本風にて建築し、室内の装飾も純然日本品を用いんと思立たれ、その建築方を同国コンスタンチノーブル、ヘラ街日出商会に命ぜられしかば、同会はその本店主なる大阪東区今橋三丁目中村又兵衛氏に通報したるに、中村氏は畢生の名誉なりとて、京都の名士に托し、古代より日本の宮城御造営に用いたる器具に模し、大工道具一式、彫刻道具一式、建切道具一式、鍛冶道具一式を新調せしめ、このほど之に古代宮殿造営の図面五種を添え、土耳其に向け差し送りたる由。その大工は、日出商会にて使い居る者を用うるはずなりと。(1898年=明治31年8月31日付報知新聞)

- 土耳其帝と日本画 同皇帝には、かつて我が邦にて土国軍艦の本邦沿海で難破の当時救助に応じ、かつ救命士官を送還せし事あるを以ってすこぶる同情を寄せられ、現に同国に商業を営む大阪市東区今橋三丁目中村商店のごときは、土地家屋を貸し与えられ、皇室に納むべき物品は関税免除の特典さえ与えられ居るとぞ。殊に近来同皇帝には日本画を好みたまひ、素を展べて彩豪を揮わるるをこの上なき楽しみとしたまう所より、先頃同店へ日本画用品いっさいの注文を仰せ付けられたれば、大阪なる同本店にて、それぞれ名工に托して調整せしめたるが、このほど完成の上、昨日神戸出帆の汽船にて輸送せりと。其の品々は紫金石日月形硯（八十一翁上田耕沖氏が、老松の蒔画を施したるもの）、墨台（青磁）、寿芝形筆架（石磁と青磁の二種）、水滴（如意形純銀製）、筆立（石磁、

業平養老滝見の図), 大極殿形墨及び画筆, 刷毛, 絵具一式, 水晶印材, 角切形肉池入, 絵具入(菊花蒔画), 絵具皿, 石磁山水筆洗, 文鎮, 錦鶏鳥大掛物, 花鳥画帖等, その他数種にて, いずれも精巧目を驚かせるものばかりなりと。(1899年=明治32年1月21日付報知新聞)

山田は1904年(明治37年)2月に勃発した日露戦争の際, ウイーンの牧野伸顕公使からロシアの黒海艦隊がトルコのボスポラス海峡を通過するかどうか監視するよう指示されたという。山田は十数人のトルコ人を雇い, 監視を続け, 同年7月3隻のロシア軍艦がダーダネルス海峡を南下したと牧野公使を通して報告し, 日本で高く評価された, という。^(註39) 日露戦争における日本の勝利はトルコ国民を感動させ, 日本への認識を深めるきっかけとなった。^(註40)

山田は第1次世界大戦の勃発した1914年(大正3年)に帰国するまで, 通算約18年トルコに滞在した。1925年(大正14年)7月, 東京にトルコ大使館が開設された。1923年(大正12年)5月, 山田は宗徧流8世家元を襲名した。16歳で宗徧流家元山田家を継いでから40数年を経ていた。1925年(大正14年)11月大阪で日土貿易協会(後に近東貿易協会と改称)を設立, トルコとの経済交流に意欲を示した。帰国後の山田は実業家として, 東洋製紙株式会社を設立, さらに三島製紙株式会社の社長, 会長を歴任した。山田は1931年(昭和6年)9月, 大阪商工会議所員2人と17年ぶりにトルコを訪問し, 旧知のトルコ人らと再会した。首都アンカラではケマル・パシャ(後のケマル・アタチュルク大統領)に面談した際, かつて士官学校で山田から日本語を教えられた, と打ち明けられた, という。^(註41)

問題は, 山田がいつムスリムになったか, であるが, 先行文献でも山田自身の記録でも直接言及されていない。山田は1902年(明治35年)頃イスラームに改宗したとされているが, 山田自身は「回教の僧侶とも交わったが, 宗教の方には研究のいとまはなかったが, 回教徒の心理と風俗習慣はよく諒解し, 自分も回教徒と同じ心持で交わっていた。」と書いている。^(註42) 山田の孫は, 祖父がトルコに渡ったのは茶の湯を広めに行ったので

はなく、エルトゥールル号の義捐金を遺族らに渡すためだったとしているが、イスラーム教に改宗したことには触れていない。^(註43)

山田は「ギリシャ名誉領事，日土協会評議員，近東貿易協会理事長」の肩書きで，1938年（昭和13年）7月16日付讀賣新聞朝刊でトルコ事情を伝えている。山田はトルコ女性が「ヴェールをかなぐり捨ててタバコ工場などを志願しだした」と伝えると共に，トルコ名物の浴場やコーヒー好きの国民性などについても解説しているが，ここでもムスリム名を使用していない。^(註44)

山田がトルコ滞在中にムスリムになった可能性は大きいですが，トルコから帰国後，実業家としての地歩を固め，同時に宗徧流第八世家元として，茶道の普及のために全国各地を回っていたことなどから，ムスリムを名乗ることに慎重だったのではないかと推察される。田澤拓也は「ムスリム・ニッポン」の中で「息子の宗圀にも，父（寅次郎，宗徧流家元第8世）が本当に日本人初のムスリムだったのか，またそのムスリム名が『アブダルハリル』だったのかどうかは不明のままだった。」という。また息子は，父が茶道の家元として，禅宗なら分るが，イスラーム教だと問題になると思って，人前ではイスラームの話は言わなかったと話している。山田は「新月」と号していたが，息子に皇帝の命令で白いアラビア服を着て聖地に行ったことを話したという。^(註45) この話が事実なら，イスラームの聖地メッカにはムスリムしかは入れないから，山田は間違いなくムスリムだったことになる。山田は1957年（昭和32年）2月3日，90歳で波乱に満ちた生涯を終えた。

3. 日本人3人目のムスリム・有賀文八郎

有賀文八郎（アフマッドあるいはアハマド，阿馬土）（1868年－1946年／慶応4年－昭和21年）は1868年（慶応4年）3月5日，福島県西白河郡東村字釜で有賀家の末子として生まれた。先祖の一人は信州の諏訪神社宮司だったという。^(註46) 有賀は白河から宇都宮に行き，16歳で小学校の代用教員になり，18歳で村の小学校校長となった。ところが，山田が学童に修身講話をしても聞かず，父兄の関心も低く，学童の修身講話に効果がなかつ

たため、儒教、神道、仏教などを通して講話をしたが、全く効果が上がらず、最後にキリスト教によって学童、父兄に説教したところ、教育効果が上がったという。^(註47)

有賀は小学校校長時代の22歳の時、4歳下の同僚、仲子と結婚した。「茲に(基督教に)興味を感じ、身自ら基督信者となり、遂に東京に移住して傳道するに至った」という。^(註48)が、具体的にどのような形で基督教の伝道をしたのか不明である。有賀は東京に出る前に横浜で英語を学び、その後旧幕臣で明治政府の外相となった榎本武揚の知遇を受け、明治24年榎本が提案した南洋貿易の「恒信株式会社」を設立し、第1次貿易船をパラオ島に派遣する際、現地パラオの副支店長の資格でパラオに赴任した。^(註49)

有賀は1892年(明治25年)ごろ、インド貿易のためボンベイを訪れ、「貿易業務のかたわら、止宿しているホテルの近くにあるモスクに日参して礼拝を見学しているうちにインド人ムスリムで実業家でもあるヘーダラリーという篤信家からイスラムに帰依し、其のモスクのイマムからアフマッドというイスラム教徒名を命名された。」^(註50)

有賀自身は「明治二十五年に至り私は商用を帯びて印度に行きたる時、図らずもイスラム教を聞き、爾来基督教との比較研究を重ねること四十年、遂に此宗教が最も日本國民に適當する宗教なることを確知し、昨年九月実業界を退き、此宗教を日本國民に傳道することが私に対する唯一真神の命令なりと自覚するに至ったのである。」と書いている。^(註51)有賀は「私は大正二年に、事業界を退いてイスラム教の傳道に従事せんと欲し、時の総理大臣大隈侯に相談したことがありましたが、大隈さんの賛成を得られませんでした。依って時機未だ到来せぬものと思ひ、昨年まで躊躇していたわけであります」と書いている。^(註52)

昭和戦前のイスラーム研究者として知られた笠間杲雄は、有賀が昭和の初めに神戸でイスラームに入信した、としている。

「日本人の回教徒の長老に有賀文八郎氏がある。氏は明治二十五年頃、南洋に渡航した当初はキリスト教徒であったが、後インド貿易に従事し、ボンベイに滞在中図らずもイスラムの信徒を友人にもち、その教義の簡明、

教徒の純真な信仰に動かされて、現代宗教の優秀なるものと信じ、昭和の初年ころ神戸に於てインド人の教徒から、入信式を行ってもらひ、爾来日本流の回教徒として多数の弟子を持ち、熱心に伝道している。」^(註53)

東京のイスラミック・センター・ジャパン館長のサーリハ・サマライ博士は日本人最初のムスリムを野田正太郎、2人目を山田寅次郎、3人目を有賀文八郎とし、1900年(明治33年)ボンベイで改宗した、としている。^(註54) 有賀の入信の時期は諸説あって特定できないが、有賀はイスラーム教を「迅速に我が国民に宣伝して」、世界7億のイスラーム信徒の9割が有色人種であるから「日本人が有色人種の盟主となり、我が皇室は有色人種全体の仰ぐ処となり、遂に世界は白色人種と有色人種の二大国となるやも知れず」と主張している。^(註55) 笠間は「有賀氏の所謂日本イスラーム教は、日本人としての愛国的精神から出て居り、イスラームの本義を提唱するにあつて、その末節である些細な戒律等は必ずしもアラビア人やトルコ人の奉ずるものに盲従しないのである。譬へば経文も、祈祷も日本語でやり、皇室に奉敬し、父母兄弟同胞の相愛を説き、日本精神を中心にした進歩的回教を説くのである。勿論入信の式としても、割礼を行はないのである。」と記述している^(註56) 有賀のイスラーム理解は伝道が目的であるが、四戸は「日本の非イスラーム社会での伝道にあたってはイスラーム法的解釈を必要とした。それは法学、教典学などを含めたイスラーム学の発展を刺激するものであった」とし、有賀が「日本におけるイスラーム法学の先駆者」と位置付けた。^(註57)

有賀は「昨年九月実業界を退き、此宗教を日本國民に傳道することが私に対する唯一真神の命令なりと自覚するに至つたのである」と書き、引退後イスラーム教の布教活動を行い、数ヶ月の間に約70人を入信させ、賛助員として200人以上の署名を得たという。^(註58) 有賀は信者に1日5回の礼拝を守るように教えたが、同時に「日本に於けるイスラーム教徒の信仰箇条」を定めた。有賀の礼拝の規則(3か条)、信仰箇条(28か条)は異彩を放つたもので、アラビア半島のムスリムから見ると「逸脱行為」と受け取られかねない。特に飲酒について「酒は飲まざるを宜しとする。但し多年の習慣上害なき人は、此の限りにあらず。」とし、皇室崇敬については「天

皇皇后両陛下並に皇族御一同を尊敬すべき事。」としている。

○ コーラン経に定められたる、毎日五度の礼拝は、之を守ることとし、其の時間は、全然アラビアの習慣を改めて、左の如く決めました。

一、毎朝洗面を終わらば、直ちに礼拝せよ。

一、朝食時と昼食時と、晚餐時に、必ず礼拝せよ。

一、就寝前に必ず礼拝せよ。

五度の礼拝を定めたるは、真神に対する、神恩感謝の念を忘れざらんが為にして、若し閑あらば、幾十度御祈りするも、其れは信者の自由であります。

○ 私は日本に於ける、イスラム教徒の信仰箇条を、左の如く定めて発表しました。

一、我々は、世界万物を造り、人類を造り、人類を、常に支配し給ふ処の唯一真神を信ず。

而して、聖マホメット師は、神の預言者なりと信ず。

一、我々は、唯一真神に對して、一日五度の、礼拝を守る事。

一、金曜日には、正午より午後一時まで、一定の教会へ集合し、傳道師の指揮に従ひ、共同礼拝をなし、各々感謝をなし、互ひに信仰上の奨励をなす事。

一、信徒は、己の職業の余暇には、必ず傳道する事。

一、愛は道德の本源なり、故に信徒は、互ひに相愛し、一団となりて、世界に活躍すべき事。

一、礼拝の時は、唯一真神に對して、感謝し、懺悔し、神威を讚美する事。

一、コーラン経を常に愛読して、神意を知るに努むべき事。

○ また、イスラム教の道德箇条を左の如く発表しました。

一、唯一真神を崇敬し、其預言者聖マホメット師を、敬愛すべし。

- 一、天皇皇后両陛下並に皇族御一同を尊敬すべき事。
- 一、両親に、孝行を尽すべし。
- 一、兄弟、姉妹、相愛すべし。
- 一、夫婦、互ひに、相愛すべし。
- 一、信徒は互ひに、相愛すべし。
- 一、我が國家を愛護すべし。
- 一、純良なる傳道師を、敬愛すべし。
- 一、教会費及び傳道費として、応分の喜捨をなすべし。
- 一、結婚式には、傳道師の立会を求むべし。
- 一、葬儀には、傳道師の指導を受くべし。
- 一、傳道師の訪問を歓迎すべし。
- 一、親は、子を愛育すべし。
- 一、孤児、貧民を、救助すべし。
- 一、上長老者を、敬愛すべし。
- 一、一家には、必ず過去帳を備へ、死者の姓名を明記し置き、其記念日には、祈祷を捧ぐべし。また、墓参を怠るべからず。
- 一、酒は飲まざるを宜しとす。但し多年の習慣上害なき人は、此限りにあらず。
- 一、煙草は禁ずるを宜しとす。但し多年の習慣上健康に害なき人は、此限りにあらず。
- 一、豚肉は喰はざるを宜しとす。但し他に適當なる食物なき時は、此限りにあらず。
- 一、嚴禁事項 殺人、窃盜、不孝、中傷、虚偽、誹謗、賭博。
- 一、金曜日の共同礼拝を守るべき事。^(註59)

有賀は日本精神とイスラームの調和を目指し、皇室崇敬を加えたのだろう。四戸は「有賀は（ボンベイで）インド人ムスリムの實際を目撃し、イスラーム法解釈の實際を理解したのだろう。彼の皇室崇敬は、インドのイスラーム教徒たちの英国女王への忠誠に倣ったものと推定できる。」と解釈

した。^(注60)

有賀のイスラームは「日本イスラーム教」であって、日本の実情に合ったイスラームを日本人に伝えようとした。有賀は1935年(昭和10年)4月、西本幹との共著で「聖ムハマッド小傳」を出版、1938年(昭和13年には)高橋五郎との共訳で「イスラーム教典・聖香蘭経」を刊行したが、これもイスラーム教伝道に役立てるためだったのではないか。^(注61)

有賀の息子、有賀鉄太郎はキリスト教の洗礼をうけ、その後キリスト教博士となり、神戸女子学院大学学長を務めたという。かつてキリスト教信者だった有賀は、息子との間で宗教論争があったとされたが、日本人ジャーナリストとして初めてイスラーム世界に駐在した野田正太郎とともに、イスラーム教を日本人に布教した人物として、再評価されるべきだろう。

4. 日本人最初のメッカ巡礼者・山岡光太郎

山岡光太郎(1880年-1959年/明治13年-昭和34年)は1880年(明治13年)3月8日広島県福山に生まれた。岡山の関西中学から東京外国語学校(現・東京外国語大学)ロシア語第1期生として入学、1904年(明治37年)4月1日に卒業した。^(注62) 明治政府は当時、対ロシア活動に従事するロシア語に通じた若手専門家の育成を急いでいた。外国語学校卒業直前の同年2月、日露戦争が勃発したため、山岡は志願して陸軍通訳官となり、満州に渡った。戦争後もしばらく大陸にとどまり、満州の昌図軍政署や朝鮮軍司令部に勤務していたという。^(注63) 昌図軍政署の長官は山岡と同じ広島県福山出身の軍人、大原武慶(1865年=慶応元年6月生まれ)で、日露戦争後も同郷の縁で上司の大原に引き立てられ、山岡は堪能なロシア語を生かして朝鮮、中国、ロシアとの国境方面で情報、諜報活動に従事したと見られる。^(注64)

大原は1907年(明治40年)陸軍中佐で予備役に編入されたが、ロシア、中国情報、諜報活動の中でムスリム対策の重要性に着目したと思われる。山岡も1904年(明治37年)から1908年(明治41年)にかけて満州、蒙

古、シベリア、朝鮮で活動し、中国の回族、ロシアのタタール人などのイスラーム教徒が帝政ロシア、清王朝に強く反対していることを認識し、ムスリム対策の必要性に着目したという。^(#65)

1909年(明治42年)2月に来日したアブデュルレシト・イブラヒム(第2章第2節で詳述する)はわずか5ヶ月足らずの日本滞在中に明治時代を代表する政治家、軍人、文化人、一般庶民らと精力的に会合を続けた。1909年(明治42年)6月7日、イブラヒムと大原武慶、中野常太郎、頭山満らは日本、アジアでのイスラーム弘布のため東京に亜細亜義会という結社を作った。大原は結社創設の中心となって活動すると共に、自らイスラームに改宗し、イブラヒムから第2代カリフと同じアブー・バクルのイスラーム名をつけてもらったという。^(#66)大原がムスリムになった時期は野田、山田、有賀よりは後だが、山岡よりも早くイスラームに改宗したことになる。

イブラヒムは離日前、亜細亜義理会関係者との会合でムスリムのメッカ巡礼について講演したところ、「フクシマ」という人物がイブラヒムの旅に日本人を同伴させ、メッカ巡礼を実現させたいと提案した。「フクシマ」とは、対ロシア政策からムスリム問題の重要性を認識していた福島安正参謀本部次長と見られている。^(#67)

福島、大原は、満州以来大原の指示を受けて活動してきた山岡を日本人初のメッカ巡礼者に選んだ。山岡が選ばれたのはロシア語に詳しく、タタール人でロシア語を話すイブラヒムとの会話を重視したことにもよるようだ。イブラヒムは当初山岡と一緒にメッカに向かう予定だったが、事情があってイブラヒムが先に出発し、ボンベイで待ち合わせることになったが、イブラヒムはメッカへの同伴者が山岡だと知らされていなかった。イブラヒムは1909年(明治42年)6月17日、下関港から朝鮮半島に向かい、天津、北京、上海を訪れ、上海からシンガポール、カルカッタを経て、9月下旬ボンベイに到着した。

一方、山岡は10月2日東京を出発、故郷の福山で家族、親族に別れを告げ、下関から上海、香港、シンガポール、コロンボに行き、コロンボから鉄道でボンベイに11月1日に着いた。

ボンベイでイブラヒムに会えた山岡は宿主らにメッカ巡礼を話したところ、地元のムスリムから異教徒と疑われたため、「回教徒たることを公言せざるべからざるに至りぬ。……速成教授を受け、速成教徒となりて目的地に向かい、諸事多大の便宜を得たり。」^(註68) 港町ボンベイは巡礼の季節を迎え、インドや東南アジアのムスリムたちであふれていたため、見慣れない日本人の存在に注目が集まり、インド官憲までが監視し始めたという。山岡は、聖地メッカにキリスト教徒などの異教徒が入れば、直ちに惨殺されると警告され、速成のムスリムになったらしい。

メッカ巡礼は世界各地のムスリムにとって一生に一度は実行する義務であり、巡礼に必要な十分な資金と時間を必要とする。ムスリムが多くの苦難を乗り越えてメッカ入りしても、劣悪な衛生状態、酷暑と砂嵐に見舞われ、死亡することも多い。しかし、山岡はわずか1ヶ月前ボンベイで「速成教徒」となっただけで、アラビア語も話せず、イスラームの教えもほとんど理解していない。

ムスリムとなった山岡とイブラヒムは、在ボンベイ・トルコ総領事の好意で即座に査証の発行を受けたうえ、メッカに向かう巡礼船所属会社の社長の紹介を得て、ジェッダまでの無料乗船券を提供された。^(註69) 2人は11月20日ボンベイを出発、ジェッダ経由で12月11日に聖地メッカに入った。山岡は旅の疲れと酷暑から発熱していたにも関わらず、「同行者(イブラヒムのこと)に依りて戦勝国民矣を伝播せられたる眼前の光景に処女に等しき態度も真似られず已むなく犇々と詰かけ来る宿主の親戚故旧に、穴の開く程熟視せられつ、何も彼も無難なれと、笑む心中の苦痛言語に絶ゆ」という状態だった。^(註70)

2人はカーバを7周回り、次にメルワとサフワーの両丘の間を往復3回半巡った。この後、イブラヒムの知人で、タタール人でメッカに移住したウラマー、シェイク・ムハンマド・ムラードの巡礼宿に泊まった。山岡は12月21日高熱を押してアラファートに向かったが、その後のイスラームの行事に参加できないほど体力が弱り、1週間メッカで静養した。

だが、山岡は日露戦争の「戦勝国民」であったことなどから、破格の厚

遇を受け、カーバ神殿の内部の拝観を特別に許されたり、メッカの守護職、シャリーフ・フサインに拝謁、陪食の機会を与えられた。1910年(明治43年)1月10日、2人はメッカを離れ、ラクダのキャラバンでメディナに向かった。山岡はムラードをはじめ、アラビア半島各地を結ぶタタール人ネットワークに注目していた。ムラードはメッカでの宗教行事から旅の案内などについて懇切に対応してくれたという。「シェイフ・ムラード氏は予に取りては永久忘るべからざる救世主たり」と感謝している。^(註71)

山岡は同年2月4日イブラヒムと別れ、ヒジャズ鉄道でダマスカスに向かい、2月18日ベイルートに到着、3月3日船でイスタンブールに着いた。イブラヒムは2週間後にイスタンブールに到着し、2人は市民の熱狂的な歓迎を受けた。日露戦争から5年を経ても日本への期待は大きく、日本人として初めてメッカ巡礼を果たした山岡への称賛と敬意も強かった。2人はイスタンブールでアジア諸民族の覚醒、汎イスラーム主義の必要性などについて何度か講演したという。山岡はロシア語で講演したため、イスタンブールの帝政ロシア大使館に警戒されたが、1910年(明治43年)6月上旬、シベリア経由で日本に帰国した。

先行文献の中には、山岡のメッカ巡礼は「宗教とは何の縁もない冒険旅行のようなものだった」^(註72)「(山岡を含めた)これら巡礼者たちに共通する国粹主義的傾向も見逃すわけにはゆかない」「メッカ巡礼の日本人ムスリムたちは、各個人の真摯な信仰心にも拘わらず、それをもって強固な神道による国粹主義を超越するには至らなかったのである」^(註73)と指摘し、冒険家、大アジア主義者、国粹主義者がイスラームを利用したことを示唆している。当時、日露戦争勝利による国威発揚、欧米諸国の押し付けた不平等条約改正などをめぐって「国粹主義的傾向」があった側面は否定できない。

山岡のメッカ巡礼は、ムスリムとしての義務を果たすためというより、福島安正、大原武慶ら陸軍参謀本部の情報、諜報機関、頭山満ら大アジア主義者、国家主義者らの支援があったことから、ロシア、中国のムスリム対策のため、イスラーム発祥の地、アラビア半島の実情調査、あるいは「探查」「探検」が目的だったのではないか。山岡は「アラビア縦断記」の自序

で「欧米皮相の文化に憧憬し、浮華軽佻一世を蠹毒する而已ならず。……苟くも将来至善至美なる国家を負担すべき多幸なる吾人は、光輝ある我歴史を尊重し、金甌無缺の皇国を擁護すべき本分あると同時に、可憐なる東西民人に対し吾人の天職を尽くすべき義務を有す」^(註74)と書き、「皇国の擁護」と「東西民人への義務」を強調している。

山岡自身がメッカ巡礼を通じて、大アジア主義を実践したかどうか、明らかではない。旅行記でもある「アラビア縦断記」を読む限り、「彼を大アジア主義の成熟した行動家として見ていくことには大きな無理があるように思われる。」^(註75)

山岡光太郎は1959年(昭和34年)9月15日、堺市伏尾196、社会福祉邦人福生園で老衰のため79歳で没した。山岡は妻も子もなく、天涯孤独だったが、没後の1960年(昭和35年)7月25日、小村不二男・日本イスラーム友愛協会会長が福生園を訪れ、中辻園長から山岡の遺品を見せてもらったという。遺品の中に明治37年4月1日付、文学博士高楠順次郎校長名で東京外国語学校露語第一期生の卒業証書があったという。また、卒業とほぼ同時に陸軍通訳官として従軍した功により、勲六等単光旭日章授与の勲記と勲章があったという。^(註76)

山岡のメッカ巡礼後、1924年(大正13年)7月田中逸平、1934年(昭和9年)田中逸平、中尾秀男、1935年(昭和10年)3月鈴木剛、細川将、郡正三、山本太郎、1937年(昭和12年)鈴木剛、細川将、榎木桃太郎、1938年(昭和13年)鈴木剛、がメッカ巡礼を果たした。^(註77)

日本人で2人目のメッカ巡礼者となったノーラ・モハメッド田中逸平は1924年(大正13年)1月13日、中国山東省済南の清真南大寺(イスラーム寺院)でイスラーム教に入信、同年6月20日、メッカ巡礼を果たした。「イスラーム巡礼——白雲遊記」によると、田中逸平は1882年(明治15年)2月2日、東京府下小金井村に生まれ、幼少時に漢学、神道を学び、その後海老名弾正よりキリスト教を学んだ。田中家の宗門は臨濟宗だったが、1900年(明治33年)台湾協会学校(拓殖大学の前身)に第1期生として入学、中国語と儒学を学び、1902年(明治35年)卒業と同時に北京に遊学し

た。1904年田中は台湾協会学校に復学したが、この年2月に日露戦争が勃発し、従軍通訳官として満州に出征した。1905年（明治38年）9月日露戦争は終結したが、田中は満州の地下資源調査団に加わり、3年間調査した。その後山東省齊南で儒教文化など中国思想を研究するうちにイスラームへの関心を強め、遂にはイスラーム教徒となった。^(註78)

田中は1924年（大正13年）5月8日香港を出発、5月24日シンガポールを出発、6月15日ジェッダに着いた。6月18日ラクダに乗ってメッカを目指し、20日聖地メッカのカーバ神殿で礼拝した。当時のメッカ巡礼は過酷な旅で、田中の「イスラム巡礼——白雲遊記」の日誌によると、6月20日午後、中国人回教徒80人がメッカに到着したが、うち29人が死亡したという。また、7月8日には「炎天熱砂の露営と、騎行と修礼、又難行苦行と云うべきなり、死者続出酸鼻を極む」と記されている。^(註79)

田中は古神道とイスラームの融和を模索し、神道もイスラームも普遍性において同一だと主張した。田中は日本人のイスラーム理解を促進するとともに、神道、儒教、仏教、キリスト教、イスラームが共通点を持つという「五教帰一論」を主張するようになった。1934年（昭和9年）3月、田中は重い病気にも関わらず、2回目のメッカ巡礼を果たしたが、帰国後病気を悪化させ、同年9月15日に死去した。田中の葬儀はアブデュルレシト・イブラヒムによって日本初のイスラーム式で執り行われた。

第4章第1節 注

1. 大山鷹之介「土耳其航海記事」P.71。大山（1869年—1938年／明治2年—昭和13年）は茨城県士族で、海軍少将。明治23年7月、軍艦金剛に海軍少尉候補生として乗組。なお、海軍省水路部は1891年（明治24年）「軍艦金剛土耳其國航海報告」、1893年（明治26年）「海軍比叻土耳其國航海報告」を刊行している。
2. 同上。トルコの浴場についてはPP.64、モハメッド宗についてはPP.65-66、貧富の格差についてはPP.71-72、「トルコ人は多淫？」についてはPP.82-83参照。

3. 小村不二男 (ムハンマド・ムスタファ) 「日本イスラーム史」日本イスラーム友好連盟, 1988年(昭和63年)。有賀については小村 PP.151-166, 山田については同 PP.131-150 参照。他に, 中田孝「イスラームのロジック」——アッラーフから原理主義まで」講談社 2001年12月 P.83-88。中田吉信「日本人ムスリム第一号は誰か」PP.28-32, 中村廣治郎「イスラーム教入門」P.13。岩波新書 1998(平成10年)年初版, 2006年(平成18年)第13刷, などを参照。
4. 杉田英明「日本人の中東発見——逆遠近法のなかの比較文化史」東京大学出版会, 1995年(平成7年)6月初版。P.133。
5. 長場 紘「山田寅次郎の軌跡——日本・トルコ関係史の一側面」上智アジア学第14号, 1996年(平成8年)所収。P.50。杉田は, 山田が日本人最初のムスリムで「茶道の宗徧流第八世家元であるが, 一九〇二年頃, 日本人最初のムスリムになっている」と記している。
6. 小村不二男 前掲書 P.146。
7. 杉田英明 前掲書 P.152。
8. 三沢伸生「1890年におけるオスマン朝への日本軍艦比叡・金剛派遣: エルトゥールル号遭難に対する日本社会の反応」東洋大学社会学部紀要第39-2号(第67集)2002年(平成14年)2月発行, 「1890年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金募集活動: 『エルトゥールル号事件』の義捐金と日本社会」同紀要第40-1号(第69集)2002年(平成14年)12月発行, 「1890-92年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金処理活動: 日本社会にとつての『エルトゥールル号事件』の終結」同紀要第41-1号(第72集)2003年(平成15年)11月発行, 「1890-93年における『時事新報』に掲載されたオスマン朝関連記事: 日本人初のイスラーム世界への派遣・駐在新聞記者たる野田正太郎の業績」同紀要第41-2号(第73集), 2004年(平成16年)2月発行, <The First Japanese Muslim, Shotaro NODA (1868-1904)> MISAWA Nobuo and Goknur AKCADAG, Annals of Japan Association for Middle East Studies No. 23-1. 以上の各論文と第1章第2節参照。
9. 三沢伸生 同上紀要第41-2号 PP.109-144 参照。
10. 同上 P.129。オスマン文書館。
11. 1891年(明治24年)6月24日付 *Mussavver Cihan*, 同年6月25日付 *Resimli Gazete* 三沢伸生 同上 P.139。
12. 1893年(明治26年)8月4日付毎日新聞。
オスマン朝トルコで日本人が回教(イスラーム教)を学んで帰国。日本人ム

スリム (イスラーム教徒) 第 1 号と見られる人物の記事。「明治ニュース事典 V 明治 26 年/明治 30 年」(株式会社毎日コミュニケーションズ 1986 年 1 月第 1 刷発行)

○ 最近のある西字新聞に、^{ふいふいきょう}回々教、日本に行われんとすとの奇異なる一記事あり。今訳して読者の^{りゅうらん}瀏覽に供すべし。

同新聞は記して曰く。従来東洋に於いて、豪も回々教旨の侵入せざりしものは、実に日本の一国にありしのみ。第十世紀の頃に於いて、^{アフリカ}亜比刺加の宣教師が支那の各地方に侵入せし時にも、日本は依然としてこれら外国の感化を受けざりし。しかるに日本人はその特質として、極めて新奇なるものを好むの風あれば、その宗教に関しても、また従来の神道主義、仏教主義、孔子主義もしくは道学主義等を倦厭し来たり、ついに日本現時の年少者等は、かの外種の宗教を注意するに至れり。しかしてさきに耶蘇教を以ってその国教となさん戸の議ありしも、これはすでに全く消滅に帰して止みたることなれば、いまや実に回々教が、その勢力を日本に振わんと試みるの順番に当たるものと謂うべきなり。これより先二年以前に於いて、日本貴人の年若きもの一人、特に^{ユーラン}苛蘭を研究せんとして土京コンスタンチノーブルに來たりたるに、土耳其皇帝陛下は非常に之を優待し、日本人のこの挙はその将来宗教上に於いて、土耳其画主宰の地位を保ち得べき機会を与うるものなりとし、すこぶる之を賛成し、特に一人の回々教教師を指定し、以ってその研究の師範たらしめたり。いくばくもなくしてこの貴人はアブダルハリルと名乗りし後、二年間はすこぶるその研究に刻苦せり。しかして今やこのアブダルハリルは、すでに学成り本国に帰ったり。さればその結果として、右アブダルハリルは、果たしてよく回々教を日本に拡め得るや否やを注意するは、最も面白きことなるべし云々。

13. 波多野勝「エルトゥールル号事件をめぐる日土関係」池井優・坂本勉編『近代日本とトルコ世界』所収、勁草書房、1999 年 (平成 11 年) 2 月第 1 版第 1 刷発行。P.58。
14. 三沢伸生 前掲書・紀要第 41-2 号 PP.124-125。
15. 同上 P.113, P.135。3 等機関士アーリフ・エフェンディ、3 等イマームアリー・エフェンディ、メフメト・アリー・ベイ大尉の 3 士官と懇意だったという。
16. 内藤智秀「日土交渉史」泉書院 1931 年 (昭和 6 年) 8 月発行。P.112?
17. 1890 年 (明治 23 年) 10 月 21 日付讀賣新聞。
18. 三沢伸生 前掲書・紀要第 41-2 号 P.112。

19. 同上, PP.122-125。なお, 時事新報に掲載された野田の記事については時間的制約から読了しておらず, 三沢氏の地道な調査, 分析に依拠した。
20. 同上 P.131。
21. 山田寅次郎「追憶録」『土耳其画観』所収。P.5。
22. 三沢伸生 前掲書・P.129-132。
23. 同上 P.132。
24. 1896年(明治29年)9月26日付東京日日新聞。三沢論文 P.132 所収。
25. 1900年(明治33年)7月23日付讀賣新聞)
26. 長場 紘 前掲書 P.46。
27. 三沢伸生 前掲書・紀要第40-1号(第69集) PP.86-92。
28. 1891年(明治24年)10月1日付讀賣新聞。
29. 山田寅次郎「追憶録」, 同「回顧五十年のトルコ」『月刊回教圈』第3巻第3・4号, 1939年(昭和14年)8月参照。
30. セルチュク・エセンベル 前掲書「世紀末のイスタンブールの日本人」P.77。
31. 山田寅次郎「追憶録」P.5。
32. 長場 紘 前掲書 P.49。
33. 山田寅次郎「回顧五十年のトルコ」P.157。
34. 山田寅次郎「追憶録」P.11。
35. 1893年(明治26年)4月18日 殖民協会演説会。
36. 長場 紘 前掲書 P.50。セルチュク・エセンベル 前掲書 P.72。エセンベルは, 名城大学の稲葉千晴氏の話として, 中村商店店員に元海軍軍人中村健次郎という人物がいた, と指摘している。
37. 山田寅次郎「追憶録」PP.11-12。
38. 1898年(明治31年)8月31日付報知新聞, 1899年(明治32年)1月21日付報知新聞。
39. 長場 紘 前掲書 PP.51-52。
40. 同上 P.55。
41. 松谷浩尚「イスタンブールを愛した人々 — エピソードで綴る激動のトルコ」中公新書1408 中央公論社 1998年3月発行。P.87。山田寅次郎「回顧五十年のトルコ」P.157 参照。
42. 山田寅次郎「回顧五十年のトルコ」月刊『回教圈』第3巻第3・4号 1939年(昭和14年)8月発行。P.157。
43. 山田宗徧「祖父 山田寅次郎のこと」『日本トルコ協会70年史』日本トルコ協会70年史編纂委員会編 1996年(平成8年)4月第1版第1刷発行。

PP.162-163。

44. 1938年（昭和13年）7月16日付讀賣新聞朝刊。見出しは「因習の覆面脱ぎ トルコ女性ハレムから街頭へ」（4段）となっている。
45. 田澤拓也「ムスリム・ジャパン」小学館，1998年（平成10年）2月初版第1刷。PP.37-38。
46. 小村不二男 前掲書 PP.151-152。大久保幸次治・鏡島寛之「コーラン研究」では、有賀がクリスチャンであると記されている。同書 P.225。
47. 有賀文八郎「日本に於けるイスラム教」日本宗教講座第13回配本 東方書院 1935年（昭和10年）2月発行。P.1。
48. 同上 P.1。
49. 四戸潤弥「アフマド有賀文八郎（阿馬土）：日本におけるイスラーム法学の先駆者としての位置付け（〈特集〉イスラームと宗教研究）」『宗教研究』第78巻第2号 日本宗教学会 2004年（平成16年）9月。P.304。
50. 小村不二男 前掲書 P.155。
51. 有賀文八郎 前掲書 PP.1-2。
52. 同上 P.21。
53. 笠間杲雄「回教徒」岩波新書 33 岩波書店 1939年（昭和14年）4月発行。PP.112-113。
54. 有賀文八郎 前掲書 PP.22-23。
55. イスラミック・センター・ジャパンのホームページ参照。
56. 笠間杲雄 前掲書 P.3。
57. 四戸潤也 前掲書 P.320。
58. 有賀文八郎 前掲書 P.2。四戸は有賀が60歳で引退したとしているが、「日本に於けるイスラム教」の出版年月が1935年（昭和10年）2月となっており、同書中の「一九三三年一月」現在の全世界のイスラム教徒数が6億7千万人で、有賀が実業界を「昨年九月引退」「昨年十月傳道開始」とあるので、「昨年」は1932年（昭和7年）で、有賀64歳の可能性があるが、詳細は不明である。
59. 有賀文八郎 前掲書。「日本に於けるイスラム教徒の礼拝の定めと信仰箇条」
60. 四戸潤也 前掲書 P.317。
61. 有賀，西本共著「聖ムハムマッド小傳」全58ページ。発行所 日本イスラーム布教本部，著者 有賀阿馬土，発行人 有賀文八郎，1935年（昭和10年）4月発行（非売品）。前内務大臣安達謙蔵が序文を書いている。奥付に西本幹の名前がないが，P.1に「イスラーム教祖 聖ムハムマッド傳 有賀阿馬土

- 西本幹共著」と記されている。第1章第1節4を参照。「聖香蘭経 イスラム教典」については第3章第1節2を参照。
62. 坂本 勉「山岡光太郎のメッカ巡礼とアブデュルレシト・イブラヒム」『近代日本とトルコ世界』では、山岡は1903年(明治36年)、第2期生として卒業した、とある。
63. 坂本 勉「山岡光太郎のメッカ巡礼とアブデュルレシト・イブラヒム」P.164. 田澤拓也前掲書 P.54。
64. 坂本 勉 前掲書 P.165。
65. 同上 P.166。
66. 同上 P.181。
67. 同上 P.184。
68. 山岡光太郎「世界の神秘郷 アラビア縦断記」東亜堂書房 1912年(明治45年)7月発行。P.46。
前嶋信次編『メッカ』第一編・山岡光太郎「世界の神秘郷 アラビア縦断記」復刻版 P.93。芙蓉書房, 1975年(昭和50年)3月第1刷発行。
69. 同上復刻版 P.93。
70. 同上 P.108。
71. 同上 P.112。
72. 田澤拓也 前掲書 P.58。
73. 杉田英明 前掲書 P.156, PP.157-158。
74. 山岡光太郎 前掲書 PP.91-92。
75. 坂本 勉 前掲書 P.200。
76. 小村不二男「日本回教界の草分け 山岡光太郎翁終焉の地を訪う」『アッサラーム』No.4(3), 1976年(昭和51年)12月5日発行。
77. 前嶋信次編 前掲書。序章「メッカ巡礼記に寄せて」PP.73-76。
78. 坪内隆彦「イスラーム先駆者 田中逸平試論」P.6。
79. 田中逸平「イスラム巡礼——白雲遊記」。前嶋信次編『メッカ』田中逸平「イスラム巡礼——白雲遊記」復刻版 芙蓉書房, 1975年(昭和50年)3月第1刷発行。P.173。

第2節 外国人ムスリムの日本訪問

アブデュルレシト・イブラヒムは1857年(安政4年)生まれのタタール(カザン・トルコ)人ムスリムで、ロシア帝政下でのタタール人の自主自立、

つまりロシア・ムスリムの民族独立をめざした指導者であり、汎イスラーム主義者だった。イブラヒムは帝政ロシアのウラル山脈東、トボリスク地方の村に生まれたタタールのパシキール人である。^(註1)

若くしてイスラーム学を目指したイブラヒムは1879年（明治12年）、メッカ、メディナを訪れ、イスラーム学を学んだ後、オスマン帝国のイスタンブールでイスラーム知識人と交流し、1885年（明治18年）故郷に戻った。だが、ロシア政府のムスリム抑圧政策に反発し、1894年（明治27年）イスタンブールに移住した。ここでイブラヒムはタタール人ムスリムの改宗とロシア化政策を告発し、ロシア・ムスリムの文化的復興と政治的覚醒を呼びかける論文を数多く発表した。イブラヒムは日露戦争（1904年—1905年／明治37年—明治38年）と1905年（明治38年）の第1次ロシア革命後、ムスリム・ジャーナリスト、政治評論家としてムスリムの連帯と権利の拡大に努力した。しかし、1907年（明治40年）ロシア帝政の反動でムスリムの新聞、雑誌の発行が禁止され、ムスリム運動は退潮した。このためイブラヒムは、長年の夢であったイスラーム世界への大旅行を始めることに決めた。1907年（明治40年）末、イブラヒムはまずロシア領トルキスタンに行った。^(註2) 彼はロシアに反対する政治活動から離れたわけではなく、他の戦略を模索した。1908年（明治41年）9月、カザンを出発したイブラヒムは、ヴォルガ川を汽船で旅し、シベリアを横断し、モンゴルと満州を巡った後、1909年（明治42年）2月2日未明、敦賀港に着き、日本への第1歩を記した。^(註3)

イブラヒムは明治維新後来日した初めてのムスリムではないが、滞在わずか5ヶ月の間に、日本各地で一般人から大隈重信^(註4)、伊藤博文^(註5)など明治政府の重鎮らと会談し、日本での見聞をタタールやイスタンブールの新聞、雑誌に寄稿し、タタール人やトルコ人読者の強い関心と呼んだという。

イブラヒムは1909年（明治42年）2月17日、大隈重信と会見した。大隈は「日本の最も偉大な政治家の一人」^(註6)であり、日本の将来について、中国との合併について、アメリカとの関係についてなどを尋ねた後に、日本国民は宗教の問題をどう考えているのか、古来の仏教を守ることの方が

日本人のためになると思っているのか、それとも改宗する考えを持つ人々もいるのだろうか、などと質問した。

これに対し大隈重信は、以前にもトルコ、エジプト、インドからもムスリム達が来て、イスラームを勧めるために来日したが、成功しなかったと話し、「我々日本人は宗教の問題をそれほど重視いたしません。日本人の信仰はたいへん神聖で信心は固いものです。そのよりどころは、ただ一つ。それは大和魂です。一人の日本人が、いかなる宗教を信仰したとしても、彼本来の信仰は大和魂です。日本人は何よりも大和魂を神聖なものと考えます。日露戦争がそれを証明しました。ロシア正教徒である日本人も、みな率先して武器をとり従軍していきました。」「日本人は大和魂を誇りとします。宗教ではありません。いずれにせよ、日本では信仰の問題はきわめて自由です。誰もが好きな宗教を宣伝することができます。」「日本人の利益は民族精神を守ることにあり、これを失うことは日本人であることを失うことです」と答えた。^(註7)

大隈重信と会談した後、ある日イブラヒムは大隈の創設した早稲田大学を訪問した。当時の学生は大学、予科あわせて約8000人で、うち約1600人余が留学生だという。イブラヒムの調査によると、「(留学生のうち)中国人が一二六一人、朝鮮人が四百人以上、フィリピン人が二十八人、アメリカ人が十四人」いるという。中国人のうち三十八人はムスリムである。^(註8)

イブラヒムはまた、日本では「報知新聞」、「やまと新聞」、「国民新聞」、「日日新聞」、「時事」、「朝日」、「毎日」、「みやこ讀賣」など、日刊新聞が非常に多いことを気がついて、多くの新聞社を訪問した。その中でいくつかの新聞は、イブラヒムと彼の活動について取材し、記事を掲載したので、イブラヒムはにほんの一部で有名人となった。

イブラヒムは「史談会」に出席し、イスラームなどについて演説した。彼は大学教授、学者として知られた有賀長雄^(註9)、戸水寛人^(註10)、服部宇之吉^(註11)などの知識人、政治家と知り合い、彼らから日本についての広範な知識を得た。またモンゴル学者、佐々木安五郎^(註12)とも友人となり、しばしば意見を交換した。当時の讀賣新聞はアブデュルレシト・イブラヒムの東京

での行動の一部を伝えている。

- 徒歩主義同士会にては明十八日午後一時より神田橋外和強楽堂に於いて韃靼志士として有名なる同会員エー、イブラヒム氏招待演説会を開催する由。^(註13)
- 孔子祭典会にては昨二十五日湯島なる大成殿に於いて「東亜の光」孔夫子の祭典を執行せり。……当日の来会者は清国公使胡惟往、露国方面マホメット教管長イブラヒム氏（韃靼人）……。^(註14)
- イブラヒム氏は「孔夫子に対する所観」と題して曰く 今や孔子教は支那、日本のみならず西亜細亜にも光被せり。予は親しく日本の紳士諸氏と歓交するの榮を得、其道德的常識のマホメット教の夫れと酷似せるに寧ろ喜悅ある一驚を喫したり」と。^(註15)

イブラヒムによると、「徒歩主義同士会」の会長はやまと新聞記者の梅原喜太郎で、同志は十万人に近いという。「節約に心がけ、出来る限り車や電車に乗らずに歩くこと、……こうして節約したお金を国家のために使おう、全て公共の福祉に役立てよう、というのである。」^(註16)

イブラヒムは日本と日本人について正しい知識を得ることに全力をあげた。そのため、日本の政治、社会、新聞メディアだけではなく、芸術、生活習慣、伝統文化、家庭教育、学校教育についても強い関心を持って観察した。例えば学校教育について、「史談会」の本部を訪問し、そこで日本の学校が国立、公立、私学に分かれていることを理解した。小学校から大学または師範学校の教員、生徒、卒業生の人数などについても細かく統計を集めた。彼はまた伯爵、松浦厚と友人になり、松浦とイスラームや互いの民族文化などについて意見交換した。^(註17) 松浦はモンゴル、タタールとトルコの歴史に強い興味を持ち、特に日本人とトルコ人が人種的に兄弟と思っていると話した。彼は日本が進歩し、文明化したのは外見だけで、日本に近い民族について何も知らず、欧州諸国に文化と教育を求めたことを遺憾とした。^(註18) イブラヒムは後日、再び松浦と会見した際、松浦からイスラーム

ムとカリフについて質問され、丁寧に答えたという。^(註19)

イブラヒムはカリフがムハンマドの継承者であり、宗教的、政治的な指導者であり、世界のムスリムに対する宗教上の首長であること、欧州諸国やロシア政府がいかにムスリムを圧迫し、法的権利が奪おうとしても、地球上のムスリムの精神的な結びつきを損なうことはないこと、などを松浦に説明した。^(註20)

イブラヒムは1909年(明治42年)3月11日、伊藤博文と会談した。伊藤は日露戦争でタタール人ムスリムが不本意ながら徴兵されたのに対し、カフカースのムスリムが志願したことが理解できないと話し、「ロシアではムスリムは従属民族」だからカフカースのムスリムは志願することで自らの権利を認めさせようとしたのだらうと語ったという。^(註21) イブラヒムは伊藤に、ロシアに住んでいるタタール人がロシア政府から虐げられているため、解決方法を模索していると答えた。イブラヒムはまた、ヨーロッパ人が十字軍以来イスラームに敵意を持ち、これまでの政策もすべて反イスラーム的だと主張した。

伊藤博文は、日本人の間ではイスラームの知識が少なく、キリスト教は日本に渡来したが、宣教師が政治的な志向を持っていたため成功しなかったと語った。従って、キリスト教を受け容れた日本人は下層階級の人々が多く、アジアに広がるイスラームは日本人にも容易に受け容れられるかもしれないが、ただ一夫多妻は障害になると話した。^(註22)

松浦厚も、キリスト教で真理を究明するためにはキリスト教徒であることが先決であり、キリスト教徒でなければ理解できないとされているが、イスラームには秘密の教えがあるか、イブラヒムに質問した。イブラヒムは「イスラームにはそうした秘密はありません。私たちのイスラームでは、信ずることは知ることであり、人は知らないことを信ずることはできません」と答えた。松浦は日本にはイスラームの信者がいないが、イスラームの信仰は東洋の民族の性質により適しており、又より近い、と話した。^(註23)

イブラヒムは5ヶ月余の日本滞在の際の見聞記をまとめ、イスタンブー

ルで刊行されている『スライト・ミュスタキム』誌や、インドで出版されていた『アル・バヤーン』誌等に見聞記を掲載し、イスラーム世界での日本観に大きな影響を与えたという。

イブラヒムは日本人について、生来性格がよく、階級文化が存在せず、天性の清潔好き、誠実である美德がイスラームの教えと完全に合致しているから、日本人がイスラームに改宗することは間違いないと見ていた。その理由は①日本人の習慣、道徳観がイスラームの習慣、道徳にかなっており、両者の間に基本的な違いが見られない②日本人はその精神を誇りとし、いかなる犠牲も惜しまない③日本人はイスラーム受容によって政治的にも大きな利益を期待できる、ことなどをあげている。日本人にとってもっとも安全な道はイスラームだが、言葉の問題がある。ヨーロッパの宣教師達がイスラームを誹謗する出版物を広めているため、イスラームを正しく理解するのが難しい。日本人がイスラームに改宗すれば、日本製品が中国ムスリムのいる中国市場に進出できるし、中国人ムスリムやインドネシアなどアジアのムスリムたちが日本を支持するだろう、日本でのイスラーム普及が日本人に多大の政治的利益をもたらすに違いない、とイブラヒムは考える。イブラヒムが日本の政治、経済、社会、文化などについて多くの知識を得たこと、日本の政治家と交流し、世界及びアジアにおけるイスラームの政治的な重要性を指摘したこと、などは、中国や東南アジアで具体化しつつあった日本の「回教政策」に影響を与えたと見られる。

イブラヒムは31年後の1933年(昭和8年)に再来日し、イスラームの普及活動に尽力した。1938年(昭和13年)東京代々木に東京モスク(東京ジャーミイの前身)が建設されると、イブラヒムが最初のイマームとなった。イブラヒムは、東京で発行されていたタタール語の雑誌『新日本通報 *Yaña Yapon Möxbire*』に、イスラーム世界と日本との連携を呼びかける論説を投稿するなど、晩年も盛んに文筆活動を続けた。イブラヒムは1944年(昭和19年)8月17日に東京で死去した。彼の墓は多磨霊園の外国人墓地にある。

イブラヒムの日本での見聞は1991年(平成3年)、「ジャポンヤ——イス

ラム系ロシア人の見た明治日本」という書名で、旧トルコ語から初めて日本語に翻訳され、出版された。訳者は「本書はおそらくイスラム世界から見た最初の日本及び日本人論であろう。……本書は実際の見聞にもとづいて書かれた初めての詳細な日本紹介の書と呼ぶに値するものである。……イブラヒムはわずか五ヶ月の日本滞在中に多くの知己を得た。中でも西洋の落日に日本の旭日を対比させた彼の弁舌は、明治日本のナショナリストの共感をかち得るに十分であり、世界とりわけアジアにおけるイスラムの政治的な重要性に関するイブラヒムの指摘は、東亜の盟主をめざす日本の膨張論者たちを大いに啓発することになった。イブラヒムの教えは、やがて大陸や東南アジアで具体化する日本の『回教政策』に寄与したにちがいない」と記している。^(注24)

第4章第2節 注

1. タタールのパシキール人はトルコ系遊牧民族で、主にロシア連邦のバシコルトスタン共和国に居住する民族。自称バシコルト。人種的には、モンゴロイドとコーカソイドの混血。パシキール語はテュルク系言語の1つで、アルタイ語族に属し、ブルガル・キプチャク語群と関係している。主要宗教はイスラーム教スンニー派。
2. ロシア領トルキスタン ウズベキスタンを示す。
3. アブデュルレシト・イブラヒム「ジャポンヤ——イスラム系ロシア人が見た明治日本」小松香織・小松久男訳 第三書館 1991年12月初版発行。P.5。訪日以前のイブラヒムの動静については、プロローグ PP.1-4 参照。
4. 大隈重信(1838年-1922年/天保9年-大正11年)は元佐賀藩士、政治家、教育者。第8代、第17代内閣総理大臣。従一位大勲位。侯爵。東京専門学校(現早稲田大学)の創立者。
5. 伊藤博文(1841年-1902年/天保12年(1841)-明治42年)は幼名を利助、のち俊輔(春輔, 舜輔)と称した。「^{しゅんぼ}春畝」,「^{そうろうかくしゅじん}滄浪閣主人」などと号した。政治家, 元老。明治憲法の起草に関わり, 初代・第5代・第7代・第10代の内閣総理大臣, 初代枢密院議長, 朝鮮統監府統監, 貴族院議長などを務めた。立憲政友会を結成し, 初代総裁。称号は名誉博士(エール大学)。1902年朝鮮で安重根によって暗殺された。従一位大勲位, 公爵。博文を「ハクブン」と

有職読みすることもある。

6. アブデュルレシト・イブラヒム 前掲書 P.33。
7. 同上 PP.35-36。
8. 同上 PP.40-41。
9. 有賀長雄 (1860-1921/万延元年-大正 10 年) は国際法学者、歴史家。陸軍大学教授。明治政府及び軍の法律顧問として重用された。
10. 戸水寛人 (1861 年-1935 年/文久元年-昭和 10 年) は法学者、政治家、法学博士。加賀国 (現・石川県) 出身。帝国大学法科大学卒業後、ヨーロッパに留学。1894 年 (明治 35 年) 帝国大学教授に就任、ローマ法、民法学が専攻。日露戦争開戦時には富井政章らと「七博士意見書」を提出し、ロシアへの武力侵攻を強硬に主張した。1905 年 (明治 38 年) ポーツマス講和会議に反対する論文を書いて休職となった (戸水事件) が、同僚の抗議で翌年 1 月に復職した。1908 年 (明治 41 年) の衆議院議員選挙で立憲政友会候補を破り当選。1909 年 (明治 42 年) 立憲政友会に入党、12 月に教授を辞職して政治活動に専念した。
11. 服部宇之吉 (1867-1939/慶応 3 年-昭和 14 年) は中国語学者、哲学者。東京帝国大学教授、ハーバード大学教授、東方文化学院院長などを歴任。帝国学士院会員。福島県出身。
12. 佐々木安五郎 (1872-1934/明治 5 年-昭和 9 年) モンゴル学者。蒙古を探検し「蒙古王」と言われた。1908 年 (明治 41 年) 衆議院議員となる。当選三回。国民党。
13. 1909 年 (明治 42 年) 4 月 17 日付讀賣新聞朝刊。同文の記事は 4 月 18 日付同紙紙面にも掲載された。
14. 1909 年 (明治 42 年) 4 月 26 日付讀賣新聞朝刊。
15. 同上。
16. アブデュルレシト・イブラヒム 前掲書 P.83。
17. 松浦 厚 (1864 年-1934 年/慶応元年-昭和 9 年) は旧肥前平戸城主松浦氏の後裔。英国に留学し、約十年間にわたり国際法を学んだ。貴族院議員、伯爵。
18. イブラヒム 前掲書 P.71。
19. 同上 P.183。
20. 同上 P.184。
21. 同上 PP.93-95。
22. 同上 PP.142-143。

23. 同上 P.185。

24. 同上 PP.405-409。訳者あとがき

第3節 クルアーンの日本語訳

クルアーンは天使ガブリエルが使徒ムハンマドにアラビア語で啓示したもので、アラビア語以外の言語に翻訳することは聖なるクルアーンへの冒涇とみなされてきた。クルアーンがムスリム（イスラーム教徒）にとって唯一絶対の経典であることは、世界的宗教としての教義の普遍性と共に、「コーランの流布、アラビア語という、その原典の言語の神聖観の保持、そしてひいてはコーランの翻訳の問題に極めて密接不可離の微妙な関係をもっているのである。」^(註1)

クルアーンはムハンマドが西暦7世紀のアラビア半島で啓示を受けた年代によって、メッカ啓示とメディナ啓示に分けられる。クルアーンは114の章(スーラ)からなり、章は6320の節(アーヤ)に分けられ、9万9464単語と32万113文字を含んでいると言われる。^(註2)クルアーンの章は長い順に配置されているが、後半のメッカ啓示の方が古い。メッカ啓示はムハンマドがメッカで懐疑的に見られていた苦難の時代の啓示で「全体的な調子は叙情的、詩的であり、教理的な内容としては比較的簡単なものが多い」。^(註3)これに対しメディナ啓示は、ムハンマドがメディナで受けた啓示で、社会問題、特に女性に関する宗教的なイスラーム法(シャリーア)に関するものが多い。クルアーンはムハンマドが布教活動の際に受けた迫害、憎悪と対峙した戦いの軌跡を強く反映している。

クルアーンは読誦を意味し、目で読むより声高く朗誦することで、ムスリムとしての一体感が生み出される。アラビア語によるアッザーンの荘重で荘厳、深みのある声がムスリムの心を揺さぶるからだ。従って、世界各地のムスリムはアラビア語でクルアーンの各章を暗誦し、朗誦しなければならないわけだが、「絶対」と言う訳ではない。クルアーン14章4節に「我ら(アッラー)が使徒を遣わす場合には、必ずその民族の言葉を使わせる。みなによくわかるように説明するために。」と明記されている。^(註4)ムスリ

ムはクルアーンをアラビア語の美しい音律で朗誦することで、より信仰を深めるが、アラビア語を理解しないイスラーム諸国のムスリムがアラビア語のクルアーンの内容を正しく理解しているかどうか、疑問である。中国西部の新疆ウイグル自治区のムスリムとインドネシアのムスリムの文化、伝統、日常生活が微妙に異なるように、クルアーンの解釈にも「ずれ」が出てくる。そうした「ずれ」を埋めるためにも、アラビア語から翻訳された各国語のクルアーンも必要となる。

中国の回儒（イスラーム法学者）、劉介廉の中国語ムハンマド伝「天方至誠実録（年譜）」（1721年＝享保6年）が1840年（天保11年）に長崎で禁書とされたことは第1章第1節で触れたが、ムハンマド、クルアーンに関する情報が日本に伝えられたのは明治時代以降のことである。クルアーンの日本語呼称は中国語訳の「古蘭」「克蘭」「可蘭」「香蘭」「古拉阿尼」などに影響されているとされる。鏡島寛之によると、中国語訳（漢訳）のクルアーンは①鉄錚「可蘭経」1927年（昭和2年，中華民国16年，回歴1346年）12月初版②姫覚弥「漢訳古蘭経」全8冊30巻，1931年（昭和6年，中華民国20年，回歴1350年）出版③王文清「古蘭注解」1932年（昭和7年，中華民国21年，回歴1350－51年）出版，などがあるという。^(註5)①は坂本健一の日本語訳とロドウェルの英訳に基づいた重訳で，①②共，非ムスリムによる翻訳で，③が天津の北清真寺（イスラーム寺院）の阿衡（イスラーム教師）による翻訳である。中国語訳のクルアーンには「儒教的，仏教的，道教的な，ないしは天の思想，時には鬼神思想，神仙説などの中国思想的色彩が色濃くみうけられる点は，やはり支那回教の特性の一つとして興味あることである。」^(註6)

日本で最初のクルアーン日本語訳は1920年（大正9年）に坂本健一が翻訳した「コーラン経」上下2巻である。大正時代までクルアーン日本語訳がなかったことは「日本における回教認識の不蒙，回教学の立ち遅れ，低調と言う事情」があった。^(註7)以下に，坂本健一をはじめ，部分訳を含めた日本語訳クルアーン9冊を紹介する。^(註8)

1. 坂本健一「コーラン経」上下

世界聖典全集刊行会 1920年(大正9年)9月

坂本健一は「コーラン経」上巻の「凡例」で「此訳本は、亜刺比亞本原本を座右に備へしも、訳者の原語の知識に貧しきため、主としてセール、ロドエル、パルマー諸訳本を参照して成れり。段落篇章に就きてはホヱリー本に出でシアブヅル・カドルにも拠れり」としている。^(註9)

坂本が言及したセールは、1734年(享保19年)ロンドンで英訳クルアーンを出版したジョージ・セール(1697年-1736年/元禄12年-元文元年)で、当時セールのクルアーンは英訳の中で最も人気があったという。セールのクルアーンはアラビア語原典からの直訳だが、1698年(元禄11年)にイタリア人神父、ルウドビゴ・マラッチのラテン語訳を参考にしたという。^(註10)ロドエルは1861年(文久元年)に英訳クルアーンを出版したキリスト教宣教師J.メドゥズ・ロドウェル(1808年-1900年/文化5年-明治33年)で、セールの訳と共に「コーランの英訳としては最も代表的なものである。」^(註11)パーマーは1880年(明治13年)、オックスフォードから英訳クルアーンを出版したエドワード・パーマー(1840年-1882年/天保11年-明治15年)である。^(註12)

セールの英訳「コーラン」は極めて優秀なものという定評があるが、「英雄崇拜論」のトーマス・カーライルは「予としては、予が試みた読書のうち、これほど厄介なものは嘗て無かったといわざるを得ぬ。粗笨、未熟にして退屈な紛乱せる混雑物。果てしなき重複、冗弁、錯乱、粗笨、未熟のきわみ、—要するに堪え難き愚昧。義務の念からでなければ、到底欧州人はコーランの通読に堪えないであろう。」と強く批判している。^(註13)

坂本は英訳クルアーンを参考にしながら、日本語訳の難業に挑んだわけで、下巻の巻末付録で「回顧すれば訳者の学窓を出で、始めて筆を執りしは明治三十二年刊行の「麻譚末の小傳なりき。爾来星霜二十一年、今にしてその聖典コーランの訳者たり得しは仏家の所謂因縁浅からざるもの歟。訳文の剪陋は深く自慚ずるものから、宛も身ムスルメンたるが若き愉悦を以て百十四品を一気訳了し得し快心事を録して跋に代へしめよ。若し幸い

に好機縁を得ば他年更に或はコーラン経の訳稿を推敲改修し得可く或はイスラム教の綱要を論述し得ん。アルラーオアクバル。」と回顧している。^(註14)

坂本は「コーラン経」に訳者、文学士と記しているだけで、詳しい経歴は不明である。おそらく東京帝国大学を卒業したエリートで、1899年（明治32年）にムハンマドの伝記「麻訶末」を上梓し、21年後に「コーラン経」を出版した。

坂本訳のクルアーンには仏教語の他、儒教、道教、神道の言葉が使われている。また、凡例に「可蘭経」と記し、クルアーンの「経」の文字を使い、各章は「序品」に始まり、114章すべてが「品（スラ）」の文字を使用している。「日本の仏教とイスラーム」の著者東隆眞は「標題に『経』字や、見出しに『品』字を使用するのは、漢訳大乘仏典のきわめて一般的な用例である」と記している。^(註15)

2. 有賀文八郎・高橋五郎「聖香蘭経・イスラム経典」

聖香蘭経刊行会 1938年（昭和13年）6月

有賀文八郎（アフマッド、阿馬土）については、第2章第1節3で詳述した。有賀は日本人3人目のムスリムで、1935年（昭和10年）4月には西本幹と共著で「聖ムハムマッド傳」を刊行して入る。明治時代に改宗した日本人ムスリムの中でイスラームの布教活動に本格的に取り組んだ最初の人物と見られる。坂本と同様、標題に「経」「経典」を使用している点、仏教語の影響を読み取れる。また、114の章（スーラ）を「宣言」と訳している。

鏡島寛之は有賀、高橋の日本語訳について「章節の分け方など何によったものかも殆んど分からないし、第一当時かかる訳が何を底本としたかを知りたいのである」と批判している。^(註16) 鏡島は以前高橋から直接に訳稿の一部を見せてもらったというが、底本について聞けなかったという。確かに、有賀の日本語訳では、底本となった英訳本など原著の明記がなく、章節の区分も不明である。この点、有賀の日本語訳は不完全で、章節によっては日本語として理解できない部分もある。共訳者の高橋五郎（1856年—

1935年／慶応4年－昭和21年)は明治、大正時代の英語学者、評論家で、外国人牧師から英語、フランス語、ドイツ語を学び、初期日本キリスト教の聖書翻訳に参加した。ヘボンの「和英語林集成」改訂に協力、「プルタルク英雄伝」「カーライル仏国革命史」などの訳書で知られる。日本語訳クルアーンを出版する際、高橋がなぜ英訳本と見られる原本について訳書で言及しなかったのか、明らかではない。

有賀のイスラーム理解は日本的ナショナリズムと融合した極めて特異なもので、イスラームの教えを無視したと酷評する意見から、日本的宗教性を導入したとして関心を示す意見、日本のイスラーム法学の先駆者と位置付ける意見まで、様々である。キリスト者としての有賀、ムスリムとしての有賀については今後も検証する必要があるだろう。

3. 大久保幸次「邦訳コーラン」

月刊「回教圏」第5巻第5号(1941年＝昭和16年)～第8巻第9号(1944年＝昭和19年)『コーラン研究』刀江書院 1950年(昭和25年)所収。

大久保幸次(1887年－1949年／明治20年－昭和24年)の「邦訳コーラン」は第3章までで終わっている。大久保は東京帝国大学で東洋史を学び、イスラーム教とトルコ問題を研究、昭和戦前のイスラーム研究の権威だった。1936年(昭和11年)文化使節としてトルコを訪問、ケマル・アタテュルク大統領をはじめトルコ政府要人、研究者らと会談した。1938年(昭和13年)回教圏研究所を設立し、1945年(昭和20年)11月まで所長を務めた。この間、駒澤大学、早稲田大学などでイスラーム文化などを教えた。回教圏研究所は軍部と結びついたイスラーム、アラブ研究という側面が強かったが、大久保らの研究は中国、アジア地域のムスリム人口とイスラームの教えを本格的に調査、研究し、明治時代以来の歪んだイスラーム像を正すという使命があった。

「邦訳コーラン」は「コーラン邦語訳中比類なきもの」「翻訳に際しては、回歴1332年(西暦1932年＝昭和7年)トルコ版アラビア語原典に依る。」^(註17)としている。大久保訳のクルアーン(一部)はアラビア語原典から

の日本語訳としては初めてのものとされる。

4. 大川周明「古蘭」 岩崎書店 1950年(昭和25年)2月

大川周明(1886年-1957年/明治19年-昭和32年)は太平洋戦争後、東京国際裁判でA級戦犯として起訴されるが、精神病を理由に不起訴扱いとなる。大川は東京の松沢病院に入院中「昭和二十一年初春に稿を起し、同二十三年初冬に至る約二年間の間に成れるもの即ち是なり。訳出に当たりては普く漢英仏独の諸訳を参照せり」と記している。^(注18)1948年(昭和23年)11月、東京裁判の最終判決が言い渡され、12月23日東条英機ら7被告の死刑が執行され、大川はその翌日に釈放された。

大川は1913年(大正2年)頃、クルアーンの翻訳を決め、ドイツ語、英語、フランス語、中国語訳クルアーンを参考に一部の翻訳に取りかかったが、アラビア語の知識が不足していたため中断した。1942年(昭和17年)には「回教概論」を執筆し、イスラームへの深い理解を示した。大川の「発狂」には一部で疑問視されているが、「発狂した」ことによって、中断されていたクルアーンの翻訳を続けられたと、する見方もある。

5. 井筒敏彦「コーラン」上中下

岩波書店 1957年(昭和32年)11月第1刷発行、1964年(昭和39年)改訂

井筒俊彦(1914年-1993年/大正3年-平成5年)は言語哲学、東洋思想専攻。慶応義塾大学教授、テヘラン王立哲学アカデミー教授、日本学士院会員。文学博士。ギリシャ語、アラビア語、ヘブライ語、ロシア語など多くの外国語を習得、研究を続けた。語学的な才能に秀でた井筒はアラビア語を学び始めて1ヶ月でクルアーンを読破したという。大川周明訳の「古蘭」も参考にしたと言われる。

井筒は「はしがき」で「一 この『コーラン』口語訳にはいわゆるフリーゲル版(1869年=明治2年)を定本として用いた。これは当時ヨーロッパきっての碩学として令名のあったグスタフ・フリーゲルが厳密な校訂を

加えて一八四一年に初版を出した最初の学術的テキストであって、今日に至るまで『コーラン』研究の基礎資料として西欧の学界にひろく使用されているものである。……『コーラン』は回教徒にとって何ものよりも尊い聖典であるから、古来その注釈は殆んど無数に作られており、各学派、各学者によって語句の解釈に大変な差違がある。この口語訳は、原則として、ザマシャリー系統の代表的な注釈であるバイダーウィーによって全体の基調を決定した。バイダーウィーは西暦十三世紀のコーラン学者、その注釈は回教の正統派では最上のものとして非常に尊重されて来たものである。」と書いている。(註19)

井筒は「改訂の序」で「前の口語訳を出版して後約二年余り中近東の回教国を旅しながらも絶えずこの問題は私の年頭を去ることがなかった。……この改訂は単に部分的な改竄ではなく、想を新たにして全部訳し直したものである。」と述べ、改訂に自信を示している。井筒訳は、厳密な言語学的研究を基礎とした秀逸な訳として、現在に至るまで高い評価を得ている。藤本勝次は「井筒氏の優れたアラビア語の知識を駆使された正確な論文」「名訳と言える」と高く評価している。(註20)

6. 田中四郎「秘典コーランの知恵 — 知られざる啓示の世界」

実業の日本社 1972年(昭和47年)7月初版発行

田中四郎は「あとがき」で「私がいかにそのアラビア語を正確に訳しても、その原典に並ぶ文章の順序をそのまま日本語で並べたら、せつかくコーランを読み始めた人々もおそらくその殆んどが途中で投げ出してしまうことだろう。……そこで私は、書かれている語句の意味と内容により、それらの項目別に分けるという、いささかさ乱暴と見えることを試みた。」と説明している。(註21) 内容は啓示、女性、祈り、金銭、信者と不信者、生活、経典の民、戦い、天国と地獄、など14項目に分けられている。簡便で要領よくまとめられているが、クルアーンの全体像はつかめない。

奥付の略歴によると、田中は1921年(昭和10年)生まれ。1942年(昭和17年)大阪外語アラビア語卒、1966年(昭和41年)大阪外国語大学教

授, 1969年(昭和44年)学園紛争に嫌気がさし, 辞職した, いう。

7. 藤本勝次責任編集 藤本勝次・伴康哉・池田修「コーラン」

中央公論社 1970年(昭和45年)9月初版発行

藤本勝次は関西大学在外研究員として1年間, アラブ連合(原エジプト, シリア, ヨルダンなどで調査, 研究した。京都大学東南アジア研究センターからの派遣で, マラヤのイスラーム社会を調査, 研究した。

藤本は解説「コーランとイスラム思想」の中で「本書の翻訳に用いた底本は, 一九二三年に刊行された『標準エジプト版』に準拠した『コーラン』である。……翻訳はできるだけアラビア語に忠実に行い, なるべく補筆しない方針をとった。訳注も個人的解釈をさけるために最小限にとどめた。……第1章から第25章, 第93章から第114章は伴康哉, 第26章から第92章は池田修が翻訳を担当した。」と説明している。^(註22)

8. 日本ムスリム協会「日亜対訳 注解 聖クルアーン」改訂版

日本ムスリム協会 1982年(昭和47年)10月

宗教法人, 日本ムスリム協会は, 日本で最初のムスリム団体として1952年(昭和27年)に設立され, 1968年(昭和33年)6月に宗教法人として認可された。東京都渋谷区代々木に本部事務所を置く。1960年(昭和35年)に初代会長, サディーク・今泉が死去し, 第2代会長にウマル・三田了一が就任した。三田は聖典クルアーンの日本語訳を実現するため, 1962年(昭和37年)メッカを訪れ, イスラーム法学者らからクルアーンの解釈などについて学んだ。1972年(昭和47年)三田は「日亜対訳 注解 聖クラーン」を日訳クラーン刊行会から出版したが, アラビア語原文に較べ, 僅かながらの不備が発見されたため, 神の啓示であるクルアーンの日本語訳すべてを破棄した。^(註23)

その後, 日本ムスリム協会が三田了一から改訂版への依頼を受け, ムスリム教会のアラビア語, イスラーム法専門家が改訂作業に取り組んだ。改訂作業は, 駐日サウジアラビア大使館のゼイン・アル・アービディン・アッ・

ダッバグ大使の同意と協力をのもに続けられ、サウジアラビアに本部を置く世界イスラーム連盟(ラービタ)の校正を経て、1982年(昭和57年)10月「日亜対訳 注解 聖クルアーン」改訂版が刊行された。本章で使用した『聖クルアーン』は、日本ムスリム協会が2004年(平成16年)に出版した第8刷である。^(註24)

「日亜対訳 注解 聖クルアーン」は日本人ムスリムが日本語に訳した最初のクルアーンで、世界ムスリム連盟に“公認”されたものといえる。アラビア語以外の外国語訳のクルアーンは禁じられているため、世界イスラーム連盟が“公認”することはありえない。だが、世界イスラーム連盟はクルアーンの各国語訳を認めるのではなく、各国語訳によるクルアーンの「解説(タフシール)」として翻訳を認めているようだ。

9. アリ・安倍治夫「日・亜・英 対訳 聖クルアーン」

谷沢書房 1982年(昭和57年)11月初版発行

日本人ムスリムのアリ安倍治夫は「わかりやすい日本語訳のクルアーン(コーラン)を日本の兄弟姉妹におとどけする。本書はイスラームの聖典クルアーンのうち、朗誦に適する肝要な三十八章をえらび、これをアラビア語の原典から正確に訳出したものである。」と書いている。^(註25) 安倍は「いわゆる逐語訳でなく、聖典のもつ深い味わいと意味とをよくかみしめた上で、これを朗誦にふさわしい、なめらかな日本語で言いあらわしたものであるから『心訳クルアーン』とでも呼ぶべきものである」と強調している。朗誦用の日訳クルアーンとしては、初めての試みだろう。「心訳クルアーン」は七五調でつづられ、アラビア語、英語の原文に続いて七五調の日本語(ルビ付き)、さらにアラビア語の発音がカタカナで表記されている。「第一 開序章(スーラトル ファーティハ) メッカ啓示」を以下に示す。

- 1 恵^{めぐ}みあまねく 慈^じ悲^ひふかき
神^{かみ}・アッラーのみ名^なにより
- 2 讃^{たた}えまつらん アッラーを
そは万^{ばん}有^{ゆう}を しろしめし

- 3 恵^{めぐ}みあまねく 慈悲^{じひ}ふかく
 4 審判^{さばき}の日^ひをぞ つかさどる
 5 おんみをこそは 崇^{あが}めなむ
 おんみにこそは すがらなむ
 6 導^{みちび}きたまえ 直^{なお}き道^{みち}
 7 嘉^{よみ}したまえる 人^{ひと}の道^{みち}
 怒^{いか}りにふれし 者^{もの}どもや
 迷^{まよ}える者^{もの}の 道^{みち}ならず^(註26)

第4章第3節 注

1. 鏡島寛之「各国におけるコーランの翻訳」大保幸次・鏡島寛之共著『コーラン研究』所収。刀江書院 1950年（昭和25年）12月発行。P.160。『コーラン研究』は①大久保幸次「イスラム教」前半部分，岩波講座「東洋思潮」第6回配本，1934年（昭和9年）11月発行②大久保幸次「邦訳コーラン」回教圏研究所機関誌「回教圏」第5巻第5号（昭和16年5月発行）から第8巻第9号（昭和19年12月発行）までの24回連載③鏡島寛之「各国におけるコーランの翻訳」回教圏研究所機関誌「回教圏」第6巻第1号（昭和17年1月発行）から第7巻第1号（昭和18年1月発行）まで7回連載，の3論文を太平洋戦争後，大久保の教え子たちが編集し，1冊にまとめたもの。

鏡島寛之（1912年－1945年）は曹同宗の学僧。大久保幸次駒澤大学教授の門下生。回教圏研究所員（所長・大久保幸次）。太平洋戦争末期の1945年（昭和20年）3月29日，ボルネオで戦死，33歳だった。「中世に於ける仏教理念の神道論的展開」駒澤大学仏教学会学報8，1938年（昭和13年）4月，「道元禅師の言語観と眼蔵の表現」『道元』1941年（昭和16年）1月号，2月号，「道元禅師研究の動向・回顧」『道元禅師研究』所収，1941年（昭和16年），「回教の『キブラ』について」宗教研究114，などがある。

2. 坂本健一「コーラン経」下巻，世界聖典全集刊行会，1920年（大正9年）9月。下巻付録第三 P.416。田中四郎「秘典コーランの知恵——知られざる啓示の世界」実業之日本社，1972年（昭和47年）7月初版発行。P.250。なお坂本健一は，7万7639単語，30万315文字，とする説も挙げている。
3. アンヌ・マリ・デルカンブル「ムハンマドの生涯」改訂新版 創元社 2003

年9月第1版第1刷発行。P.122-125 参照。

4. 井筒俊彦「コーラン」中 岩波書店 1958年(昭和33年)2月第1刷発行所収。「一四 イブラヒーム(アブラハム) — メッカ啓示, 全五十二節。P.56。日本ムスリム協会「日亜対訳 注解 聖クルアーン」では、「われはその民の言葉を使わないような使徒を遣わしたことはない。(それはその使命を)かれらに明瞭に説くためである。」と訳されている。

14. イブラヒーム章 マッカ啓示 52節。P.306。

5. 鏡島寛之 前傾書 PP.225-226。

6. 同上 P.227。中国社会科学出版社「古蘭経」(中国語)社会科学出版社 1980年(昭和55年)参照。

7. 同上(鏡島) P.227。

8. 国立国会図書館書誌(和図書)検索条件「コーラン」で検索すると、計204件が表示される。そのうちの主な「コーラン」は以下の通りである。

「コーラン経」坂本健一 世界聖典全集・第14巻・第15巻

世界聖典全集刊行会

上巻 1920年(大正9年)3月

下巻 1920年(大正9年)9月。

「聖香蘭経 イスラム教典」有賀阿馬土・高橋五郎 聖香蘭経刊行会

1938年(昭和13年)6月

「邦訳コーラン」大久保幸次 『コーラン研究』所収 刀江書院

1950年(昭和25年)12月

「古蘭」大川周明 岩崎書店

1950年(昭和25年)2月

「コーラン」上 井筒俊彦 岩波書店(岩波文庫)

1958年(昭和32年)11月

「コーラン」中 井筒俊彦 岩波書店(岩波文庫)

1958年(昭和33年)2月

「コーラン」下 井筒俊彦 岩波書店(岩波文庫)

1958年(昭和33年)6月

「コーラン」上中下 井筒俊彦 岩波書店(岩波文庫)

1964年(昭和39年)改訂

「コーラン」上中下 井筒俊彦 岩波書店(ワイド版岩波文庫)

2004年(平成16年)

「コーラン」藤本勝次・伴康哉・池田勝 中央公論社

1960(昭和45年)9月

「秘典コーランの知恵 — 知られざる啓示の世界」田中四郎 実業之日本社
1972年 (昭和47年) 7月

「日亜対訳 注解 聖クルアーン」日本ムスリム協会
1982年 (昭和57年) 10月

「日・亜・英対訳 (アンマ篇) 聖クルアーン」アリ・安倍治夫 谷沢書房
1982年 (昭和57年) 11月

「選文集聖コーラン」日本アハマディアムスリム協会
1988年 (昭和63年)

9. 坂本健一「コーラン経」上 凡例 P.1。
10. 同上 PP.425-426。鏡島寛之 前傾書 P.179。
11. 同上 P.427。鏡島 同上 P.180。
12. 鏡島 同上 P.181。
13. トーマス・カーライル「英雄崇拜論」岩波書店 1949年 (昭和58年) 5月
第1刷発行。P.94。
13. 坂本健一 前傾書同上 P.427。鏡島寛之 前傾書 P.181。
14. 同上 P.428。鏡島 同上 PP.229-230。
15. 東 隆真「日本語訳クルアーン (コーラン) と仏教語 — わが国初の日本語訳クルアーンを中心に」『日本の仏教とイスラーム』春秋社, 2002年 (平成14年) 1月第1刷発行。PP.159-169。
16. 鏡島寛之 前傾書 P.228-229。
17. 同上 P.2。P.46。
18. 大川周明「古蘭」「序」P.4。
19. 井筒「はしがき」PP.3-4。
20. 井筒改訂版「はしがき」
21. 田中四郎 前傾書「あとがき」P.251。
22. 藤本勝次責任編集「コーラン」世界の名著 15 中央公論社 1960年 (昭和45年) 9月初版発行。P.50。
23. 「日亜対訳 注解 聖クルアーン」原版まえがき P.VI。
24. 同上 日本ムスリム協会会長・五百旗頭陽二郎「改訂版によせて」P.I。
25. アリ・安倍治夫「日・亜・英対訳 (アンマ篇) 聖クルアーン」谷沢書房 1982年 (昭和57年) 11月初版発行。「日・亜・英対訳聖クルアーンの刊行にあたって」P.1。
26. 同上 P.15。

結 論

日本とイスラーム世界との出会いは決して幸福なものではなかった。イスラーム世界については古代、中世、近代を通じて「波斯(ペルシャ)」「大食(アラブ)」という呼称が示すとおり、中国経由の間接的な伝聞で、イスラーム世界の地理的位置、イスラーム教の預言者、ムハンマド、その聖典、クルアーンについてもほとんど理解されていなかった。イスラーム世界にとっても、日本は「すこぶる多量に金を産し……金をもって犬の鎖および猿首輪を作れり……」として、黄金の国ワークワーク(倭国)を記述している。

そして、多くの先行研究が指摘してきたように、明治時代以降の日本とイスラーム世界の出会いは、明治政府の欧化主義政策の影響を受け、日本に移入されたキリスト教に比べて偏見と誤解を生み、大多数の日本人にとって「未開の宗教」としてのイスラームだった。

日本で最初に翻訳されたムハンマドの伝記、ハンフリー・プリドー著、林董口述「馬哈默傳」の事例を見る通り、イスラームへの偏見は明らかである。また、トルコ軍艦エルトゥールル号遭難事件で「慈愛義侠」「国威発揚」を發揮したものの、汎イスラーム主義への関心は生まれなかった。明治、大正時代には極めて限られた日本人がムスリムとなり、先駆的な役割を果たしたが、日本におけるイスラームの布教活動はほとんど実現しなかった。明治時代後期に日本人ムスリムによるメッカ巡礼が実現し、汎イスラーム主義者の外国人ムスリム、アブデュルレシト・イブラヒムの動きが一部で注目された。特に、日本国内でイスラームへの関心がほとんどなかったころ、大隈重信、伊藤博文らの一部の政治家、知識人らがイスラームに強い関心を示していたことが注目される。

本論では、イスラームの聖典クルアーンの日本語訳についても調査、分析した。クルアーンの翻訳が大正時代以降に遅れたことは、日本におけるイスラーム受容が極めて困難だったことを示唆している。

21世紀の日本では、イスラームとイスラーム世界への偏見と誤解がいぜ

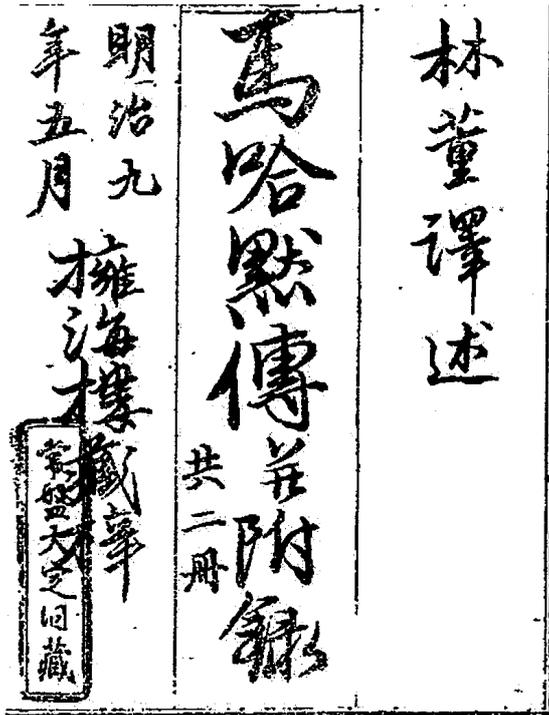
ん続いている。特に「9.11」米同時多発テロ事件以後、日本国内に居住するムスリムが集会を開いたり、モスク建設運動を行うと、警察当局が「監視」の対象にしているといわれる。20世紀後半「中東で戦争が起きるたび、イスラームを知らなければと大騒ぎしてはすぐ熱が冷める健忘症を繰り返してきた日本社会」^(註1)は、21世紀に入って意アウラ——みゆとイスラーム世界を正しく認識できるだろうか。

イスラームは「宗教というよりも、政治的、社会的課題を中心に語られることが多いが、当初から多元共存の理想を掲げたきわめて人間的な、柔軟で寛容な宗教であることに、あらためて注目したい」^(註2)

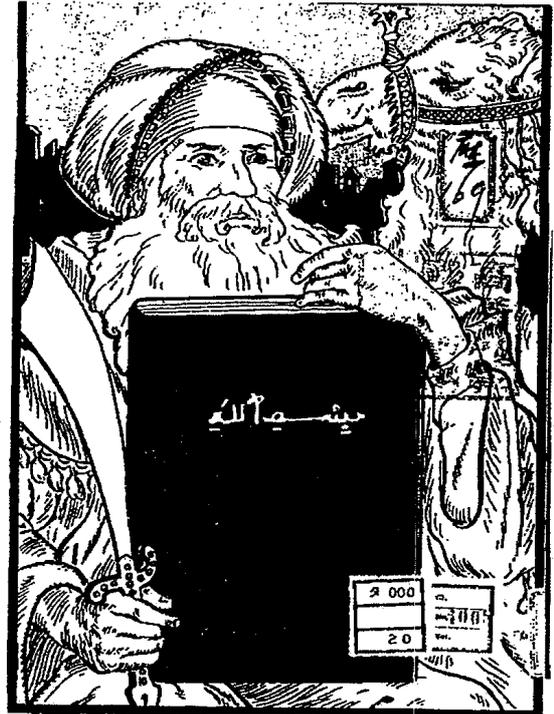
板垣雄三は「日本人が、ヨーロッパ中心主義の呪縛から身を振りほどくのと同時に、内向きで異質なものを排除する『単一の均質的な日本人』という日本イデオロギーの観念を脱却して日本社会を切り開いていくことこそが、人類の『都市』形成をめざすイスラームのグローバリズムと実りある対話を本格的に開始できる突破口となるのではないか」と主張する。^(註3)日本人にとって、イスラームとの政治、経済、社会、文化面での対話は至上命題である。日本とイスラーム世界との対話の深化が日本人のイスラーム誤認を解く鍵となるだろう。

結論 注

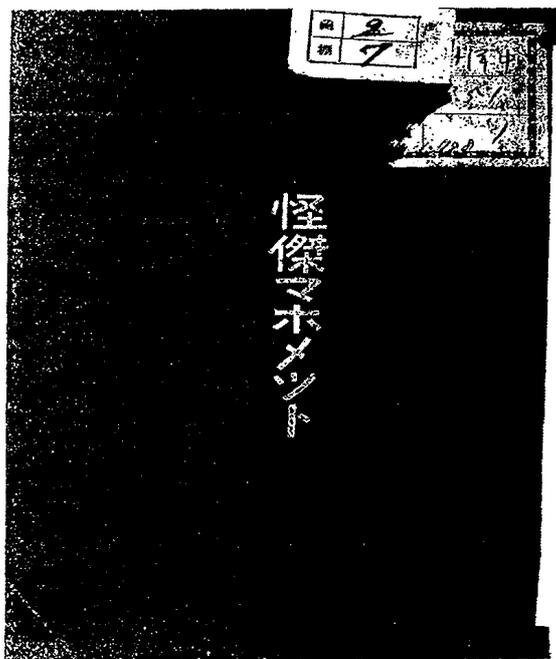
1. 板垣雄三「イスラーム誤認」前掲書。はじめに P.ix。
2. 塩尻和子「イラク問題と日本人」明石書店 2003年5月初版第1刷発行。PP.92-93。
3. 板垣雄三 前掲書 P.243。



林董訳「麻哈黙傳」中表紙
1876年(明治9年)刊行



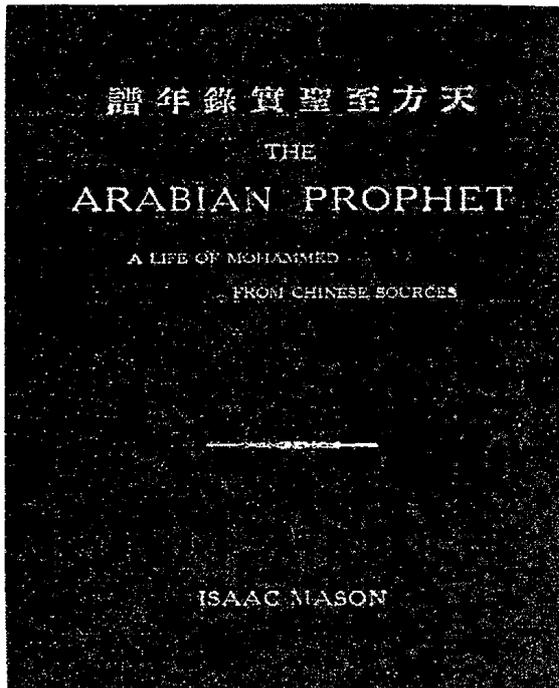
坂本健著「麻訶末」表紙
1899年(明治32年)8月発行



忽滑谷快天 表紙
1905年(明治38年)11月発行



口村著 中表紙
1923年(大正12年)4月発行



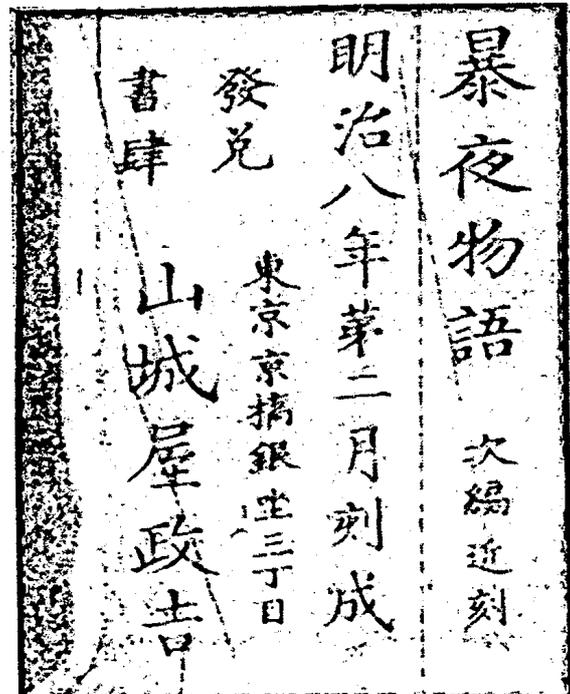
アイザック・メイソン英訳 表紙
1921年(大正10年)発行



深沢由次郎 訳 挿絵
1904年(明治37年)4月発行



「暴夜物語」挿絵



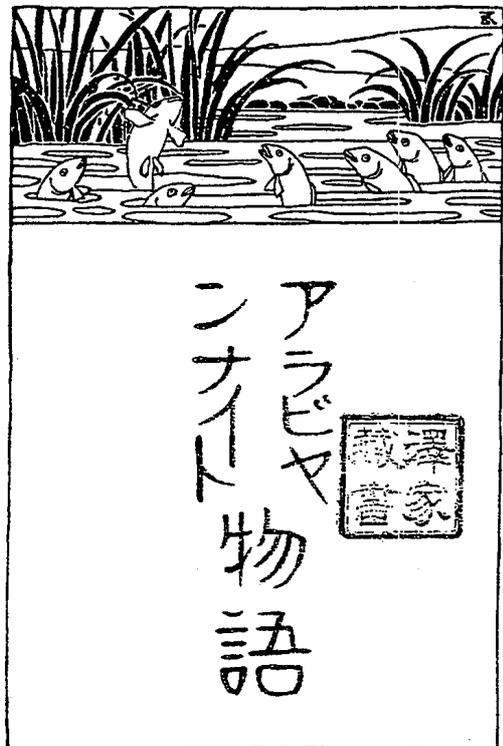
永峰秀樹 著「暴夜物語」中表紙
1875年(明治8年)2月発行



井上 勤 訳「全世界一大奇書」表紙
1883年(明治19年)発行



井上 勤 訳 挿絵
1908年(明治41年)2月発行・改訂版



井上 勤 訳 表紙
1908年(明治41年)2月発行・改訂版



尾崎紅葉「やまと昭君」中表紙
1895年(明治28年)8月発行



中村仲訳「アラビアンナイト」(日英対訳) 中表紙と挿絵
1928年(昭和3年)1月発行

WORLD'S CLASSICS IN ENGLISH

THE
ARABIAN NIGHTS'

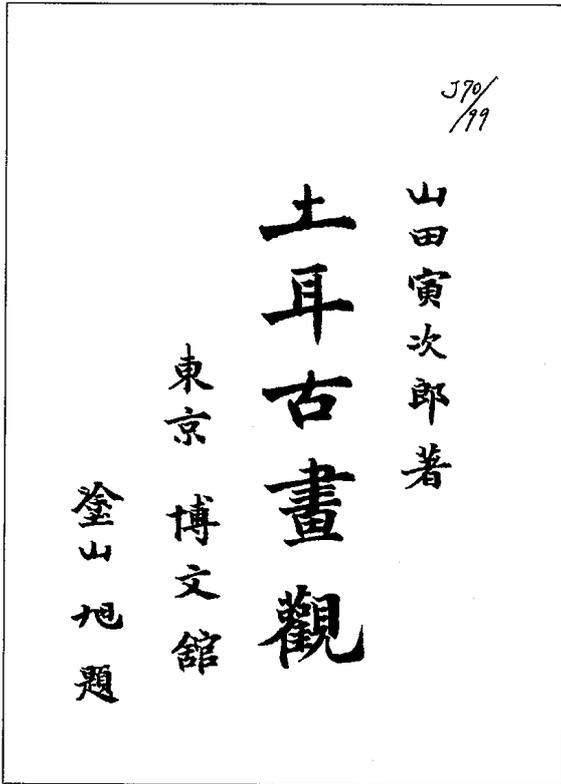
ENTERTAINMENTS

WITH TRANSLATION AND NOTES

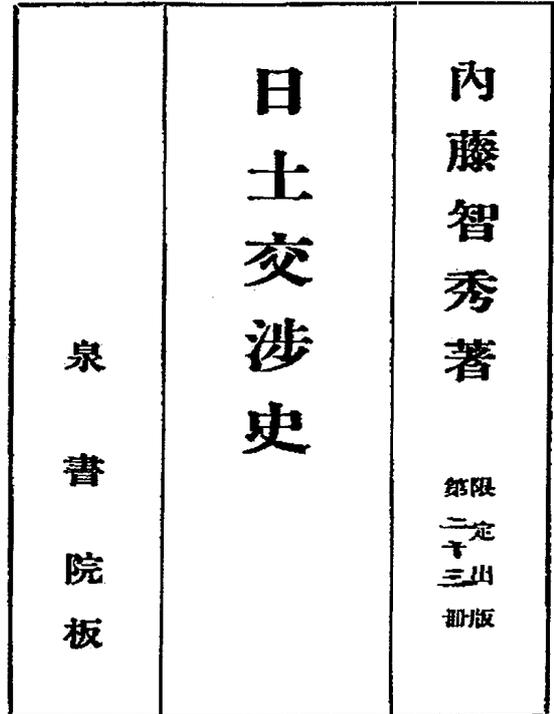
BY

N. NAKAMURA

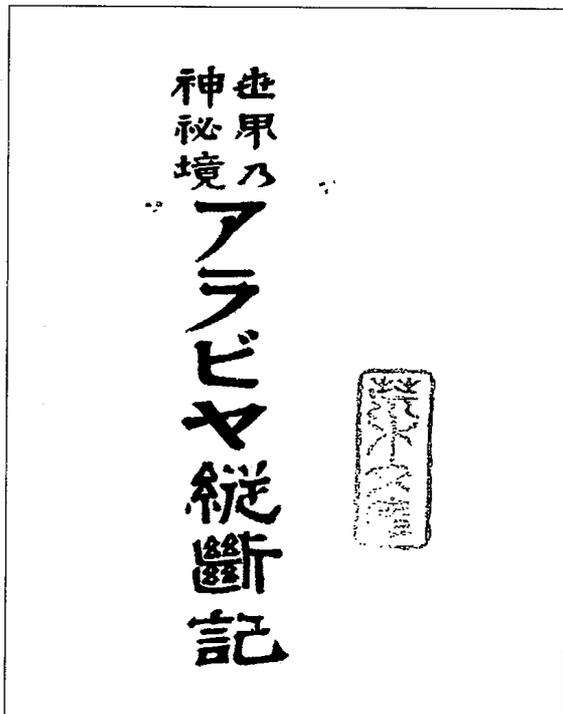




中表紙
1911年=明治44年1月発行



中表紙
1931年=昭和6年8月発行



山岡光太郎 中表紙
1912年=明治45年7月発表

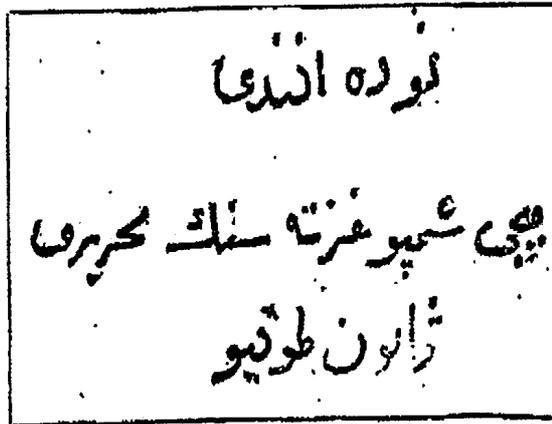


山岡光太郎……著者記断縦ヤビラア
山岡光太郎 写真
(アラビヤ縦断記) より



Resimli Gazete, 1. sene, 14, R. 1307 年
Haziran 月 13 日 (=西暦 1891 年 6 月 25 日)
に所収

野田正太郎 写真 (トルコ滞在)
(三沢伸生・論文より)



○土耳其字の名刺 時事新報の土耳其特派員野田正太郎氏の彼の地到着の後、交際上の便利の爲とて同じ比敵に在る土耳其士官アリフエンヂーとして其名刺と認めしめ其印刷と長崎新聞社に托しより本に掲ぐるの期ち其名刺にして俗に云ふ號稱の違ひ纏れるが如く一種不思議の字体あるを此土耳其字と日本に翻譯すれば(野田イフエンヂー、時事新報記者、日本東京と譯む可くイフエンヂーの土耳其の尊稱あるよし土耳其文字の名刺の日本初りての跡ある可し。

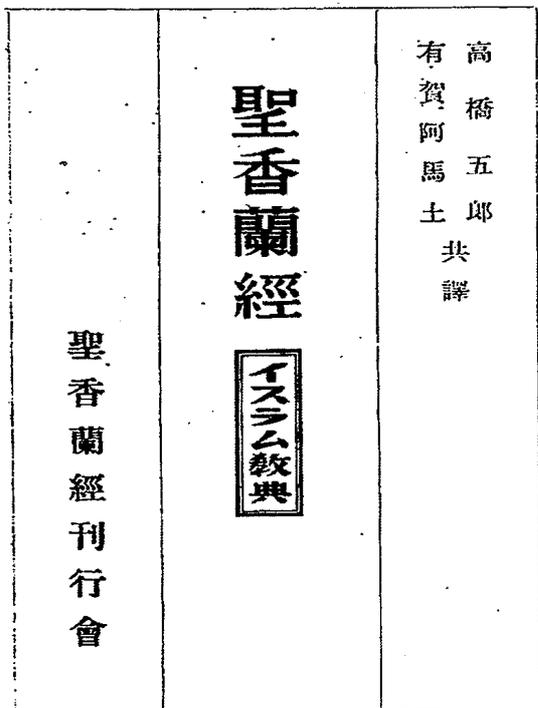
野田正太郎の土耳其字名刺
(1890 年 = 明治 23 年 10 月 21 日付読売新聞朝刊より)



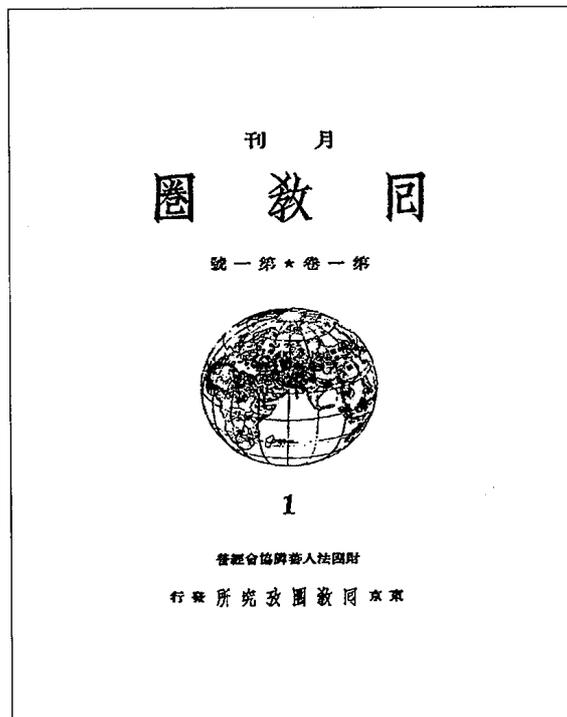
坂本健一訳・「上」中表紙
(1920年=大正9年3月発行)



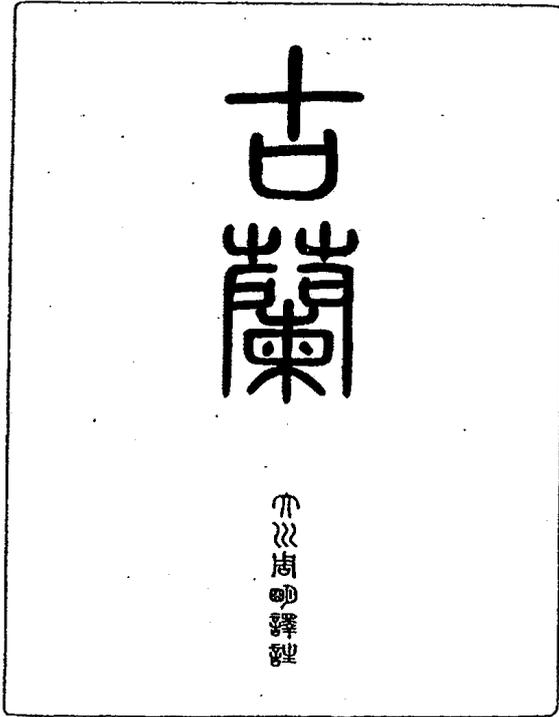
坂本健一訳・「下」中表紙
(1920年=大正9年9月発行)



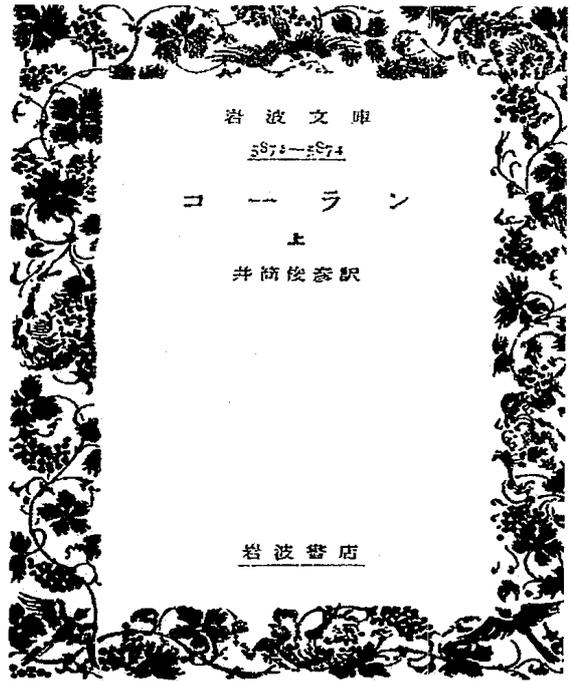
1938年=昭和13年6月発行



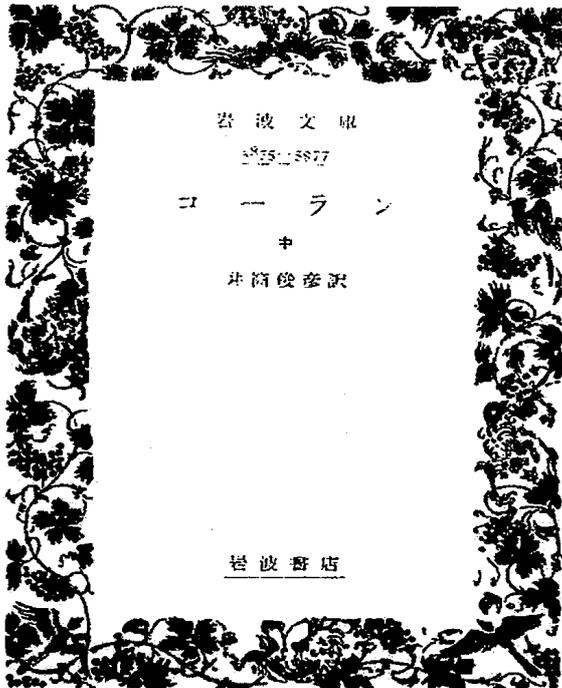
第一卷 第一号
1938年=昭和13年7月発行



大川周明・中表紙
1950年=昭和25年2月初版



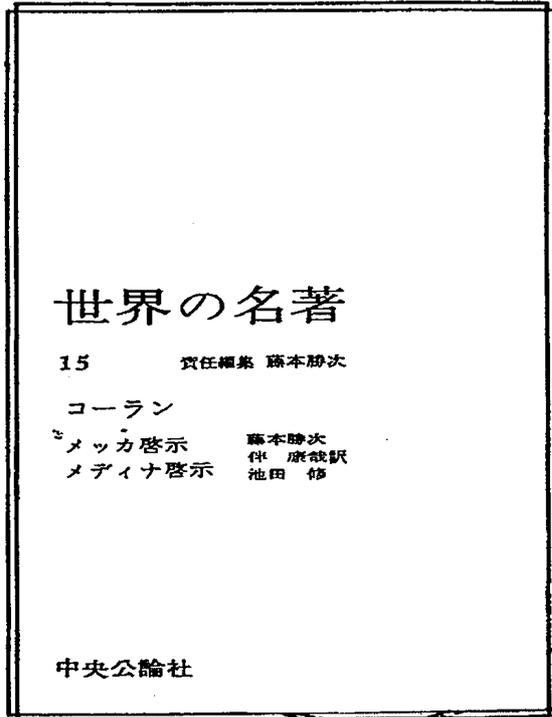
井筒俊彦訳・「上」表紙
1957年=昭和32年11月発行



井筒俊彦訳・「中」表紙
1957年=昭和32年11月発行



井筒俊彦訳・「下」表紙
1957年=昭和32年11月発行



藤本勝次他訳・中表紙
1970年＝昭和45年9月発行



日本ムスリム協会訳・中表紙
1982年＝昭和57年12月改訂版発行

参考文献

- 「イスラム事典」平凡社 監修・日本イスラム協会 嶋田襄平 板垣雄三 佐藤次高 1982年(昭和57年)4月
- 「新イスラム事典」平凡社 監修・日本イスラム協会 嶋田襄平 板垣雄三 佐藤次高, 編集委員代表・佐藤次高 2002年(平成14年)3月
- 「岩波イスラーム辞典」岩波書店 編集・大塚和夫 小杉泰 小松久男 東長靖 羽田正 山内昌之 2002年(平成14年)2月
- 「イスラーム世界事典」明石書店 編集代表・片倉もところ 編集委員・加賀谷寛 後藤 明 内藤正典 2002年(平成14年)3月
- 「西洋史辞典」改訂増補 京都大学文学部西洋史研究室編 東京創元社 1958年(昭和33年)6月
- 「中国伊斯蘭百貨全書」四川辞書出版社 1994年(平成6年)
- 加藤 博「イスラム世界論 トリックスターとしての神」東洋叢書10 東京大学出版会 2002年(平成14年)4月
- 羽田 正「イスラーム世界の創造」東洋叢書13 東京大学出版会 2005年(平成17年)7月
- 小杉 泰「イスラーム世界はイラク戦争をどう見るか」『現代思想』総特集イラク戦争 2003年(平成15年)4月臨時増刊
- バーナード・ルイス「アラブの歴史」みすず書房 1967年(昭和42年)11月
- エドワード・ギボン「ローマ帝国衰亡史」第9巻 中野好之訳 筑摩書房 1992年(平成4年)4月
- ダンテ「神曲」世界古典文学全集35 筑摩書房 1964年(昭和39年)7月
- 鈴木邦武「ゲーテとコーラン——『西東詩集』成立に関する比較文学的研究, その1」南江堂 1977年(昭和52年)1月
- 小林 元「日本と回教圏の文化交流史——明治以前における日本人の回教及び回教圏知識——」1939年(昭和14年)未刊。中東調査会 1975年(昭和50年)8月
- 小村不二男「日本イスラーム史」日本イスラーム友好協会 1988年(昭和63年)
- アブデュルレシト・イブラヒム「ジャポンヤ——イスラム系ロシア人の見た明治日本」第三書館 1991年(平成3年)12月
- 板垣雄三「イスラーム誤認——衝突から対話へ」岩波書店 2003年(平成15年)9月
- 保坂俊司「イスラム原理主義・テロリズムと日本の対応——宗教音痴日本の迷

- 走——」北樹出版 2004年(平成16年)8月
- 杉田英明著「日本人の中東発見——逆遠近法のなかの比較文化史」中東イスラーム世界2 東京大学出版会 1995年(平成7年)6月
- 大庭 脩「江戸時代における中国文化需要の研究」同朋舎出版 1984年(昭和59年)6月
- 傳統先「中国回教史」原書房 1942年(昭和17年)刊 1975年(昭和50年)2月復刻
- Issac MASON <THE ARABIAN PROPHET A Life of Mohammed From Chinese and Arabic Sources.> A Chinese Moslem Work by LIU CHALIEN, Translated by ISSAC MASON of Friends' Foreign Mission Association, and Christian Literature Society for China. Honorary Secretary, Royal Asiatic Society, North-China Branch. Printed by the Commercial Press, Limited Shanghai 1921年(昭和10年)
- ホンフレー・プリドゥ「馬哈默傳」明教社 1876年(明治9年)5月
- 坂本 健「麻譚末」博文館 1899年(明治32年)8月
- 忽滑谷快天「怪傑マホメット」井冽堂 1905年(明治38年)11月
- 口村信朗「野聖マホメット」ライト社 1923年(大正12年)4月
- 有賀阿馬土, 西本幹「聖ムハンマッド小傳」日本イスラーム布教本部 1935年(昭和10年)4月
- ワシントン・アーヴィング「予言者マホメット」新樹社 1991年(平成3年)4月
- エミル・デルマンゲム「マホメット伝」白水社 1940年(昭和15年)12月
- 藤本勝次 「マホメット」中央公論社 1971年(昭和46年)
- 嶋田襄平 「マホメット」清水書院 1975年(昭和50年)
- モンゴメリー・ワット「ムハンマド——預言者と政治家」みすず書房 1970年(昭和45年)12月
- 井筒俊彦「マホメット」講談社 1989年(平成元年)5月
- ビルジル・ゲオルギウ「マホメットの生涯」河出書房新社 2002年(平成15年)8月
- アンヌ・マリ・デルカンプル「ムハンマドの生涯」改訂新版 2003年(平成16年)9月
- 千葉県佐倉市教育委員会「佐倉市郷土の先覚者 林董」1997年(平成9年)9月
- 東海散士「佳人之奇遇」『明治文学全集6 明治政治小説集(二)』著者代表 東

- 海散士 筑摩書房 1967年(昭和42年)8月
「日本文芸鑑賞事典——近代名作1017選への招待——」第1巻(明治3年—28年)ぎょうせい 1987年(昭和62年)8月
藤田みどり「アフリカ『発見』——日本におけるアフリカ像の変遷」世界歴史選書 岩波書店 2005年(平成17年)5月
柳田 泉「政治小説の一般(二)」『明治文学全集6 明治政治小説集(二)』筑摩書房 1967年(昭和42年)8月
柳田 泉「『佳人之奇遇』とその作者について」『明治文学全集6 明治政治小説集(二)』筑摩書房 1967年(昭和42年)8月
柳田 泉「明治初期翻訳文学の研究」明治文学研究第5巻 春秋社 1961年(昭和36年)9月 1935年(昭和10年)初刊本の復刻版
矢野龍溪「波斯新説 烈女之名譽」文泉堂(村上真助)1887年(明治20年)
中川重麗「一千一夜譚」『通俗学芸志林』第9,10号 1887年(明治20年)2—3月
横山峰一「波斯奇談 奇遇夢物語」盛春堂 1888年(明治21年)
長尾藻城(玉藻生)「^{アラビアン}亜刺丁物語 一名怪シノランプ」『西洋叢談』第1号 1888年(明治21年)
尾崎徳太郎(紅葉山人)「やまと昭君」文庫 1889年(明治22年)8月
高橋七郎(太華山人)「宝ばなし」青木嵩山堂 1896年(明治29年)5月
尾崎紅葉「東西短慮之刃」春陽堂 1902年(明治35年)1月
深沢由次郎「アラビアンナイト物語」世界奇書第1編 英語世界社 1904年(明治37年)4月
井上 勤「アラビアンナイト物語」改訂 服部書店 1908年(明治41年)2月
村田祐治・中村徳助「アラビアンナイト」精華堂 1909年(明治42年)9月
巖谷小波編「世界お伽噺」63冊 博文館 1898年—1908年(明治31年—明治41年)
巖谷小波編「世界お伽噺」27冊 博文館 1908年—1913年(明治41年—大正2年)
杉谷代水「アラビアンナイト」上下巻 富山書房 1914年—1915年(大正3年—大正4年)
日夏耿之介「一千一夜譚」上巻『世界童話大系』第12巻(亜刺比亞編)1925年(大正14年)
菊池 寛「アラビア夜話集」興文社 1928年(昭和3年)
中村 伸「アラビアンナイト」〈ARABIAN NIGHTS' ENTERTAINMENTS〉

- 英文世界名著全集 第24巻 英文世界名著全集刊行所 1928年(昭和3年)
1月
- 大宅壮一「千夜一夜物語」全13巻 中央公論社 1929-30年(昭和4-5年)
- 森田草平「千一夜物語」第1-4巻 国民文庫刊行会 1930年(昭和5年)
- 大木篤夫「千夜一夜詩集：アラビアンナイトより」春陽堂 1941年(昭和6年)
- 前嶋信次著 杉田英明編「千夜一夜物語と中東文化」前嶋信次著作選1 東洋文庫669 2000年(平成12年)4月
- 保坂修司「千夜一夜物語翻訳事始——前嶋信次『アラビアン・ナイト』の歴史的意義について」『日本中東学会年報』第1号 1986年(昭和61年)
- 西尾哲夫「アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語」岩波新書1071 岩波書店 2007年(平成19年)4月
- 大山鷹之介「土耳其航海記事」1891年(明治24年)
- 池井 優・坂本勝編「近代日本とトルコ世界」勁草書房, 1999年(平成11年)
2月
- 内藤智秀「日土交渉史」泉書院, 1931年(昭和6年)8月
- 小松香織「アブデュル・ハミト二世と19世紀末のオスマン帝国——『エルトゥールル号事件』を中心に」東京大学文学部内史学会『史学雑誌』第98編第9号 1998年(平成10年)9月
- 三沢伸生「1890年におけるオスマン朝への日本軍艦比叡・金剛派遣：エルトゥールル号遭難に対する日本社会の反応」東洋大学社会学部紀要第39-2号(第67集) 2002年(平成14年)2月
- 三沢伸生「1890年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金募集活動：『エルトゥールル号事件』の義捐金と日本社会」東洋大学社会学部紀要40-1号(第69集) 2002年(平成14年)12月
- 三沢伸生「1890-1892年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金処理活動：日本にとっての『エルトゥールル号事件』の終結」東洋大学社会学部紀要第41-1号(第72集) 2003年(平成15年)11月。
- 三沢伸生「1890-93年における『時事新報』に掲載されたオスマン朝関連記事：日本人初のイスラーム世界への派遣・駐在新聞記者たる野田正太郎の業績」同紀要第41-2号(第73集), 2004年(平成16年)2月
- MISAWA Nobuo and Goknur AKCADAG <The First Japanese Muslim, Shotaro NODA (1868-1904)> Annals of Japan Association for Middle East Studies No. 23-1
- 新井政美「トルコ近現代史」みすず書房 2001年(平成13年)4月

- 中田 孝「イスラムのロジック」——アッラーフから原理主義まで」講談社
2001年12月
- 中村廣治郎「イスラム教入門」岩波新書 1998年(平成10年)
- 長場 紘「山田寅次郎の軌跡——日本・トルコ関係史の一側面」上智アジア学
第14号, 1996年(平成8年)所収。
- 長場 結「近代トルコ見聞録」慶応義塾大学出版会 2000年1月
- 山田寅次郎「土耳其古画観」1911年(明治44年)1月
- 山田寅次郎「回顧五十年のトルコ」『月刊回教圏』第3巻第3・4号, 1939年(昭和14年)8月
- 松谷浩尚「イスタンブールを愛した人々——エピソードで綴る激動のトルコ」
中公新書1408 中央公論社 1998年(平成10年)3月
- 日本トルコ協会70年史編纂委員会編「日本トルコ協会70年史」1996年(平成8年)4月
- 田澤拓也「ムスリム・ジャパン」小学館, 1998年(平成10年)2月
- 有賀文八郎「日本に於けるイスラム教」日本宗教講座第13回配本 東方書院
1935年(昭和10年)2月
- 四戸潤弥「アフマド有賀文八郎(阿馬土):日本におけるイスラーム法学の先駆者としての位置付け」〈特集〉イスラームと宗教研究『宗教研究』第78巻第2号 日本宗教学会 2004年(平成16年)9月
- 笠間杲雄「回教徒」岩波新書33 岩波書店 1939年(昭和14年)4月
- 山岡光太郎「世界の神秘郷 アラビア縦断記」東亜堂書房 1912年(明治45年)7月
- 前嶋信次編「メッカ」芙蓉書房, 1975年(昭和50年)3月
- アブデュルレシト・イブラヒム「ジャポニヤ——イスラム系ロシア人が見た明治日本」小松香織・小松久男訳 第三書館 1991年(平成3年)12月
- 大保幸次・鏡島寛之「コーラン研究」刀江書院 1950年(昭和25年)12月
- 回教圏研究所機関誌「回教圏」第1巻第1号(1938年=昭和13年7月)～第8巻第9号(1944年=昭和19年12月)
- 田中四郎「秘典コーランの知恵——知られざる啓示の世界」実業之日本社, 1972年(昭和47年)7月
- 中国社会科学出版社「古蘭経」(中国語)社会科学出版社 1980年(昭和55年)
- 坂本健一「コーラン経」世界聖典全集・第14巻・第15巻 世界聖典全集刊行会 上巻 1920年(大正9年)3月 下巻 1920年(大正9年)9月
- 有賀阿馬土・高橋五郎「聖香蘭経 イスラム教典」 聖香蘭経刊行会 1938年

(昭和13年) 6月

大川周明「古蘭」岩崎書店 1950年(昭和25年) 2月

井筒俊彦「コーラン」上中下 改版 岩波書店(岩波文庫) 1958年(昭和33年)
6月

藤本勝次・伴 康哉・池田 勝「コーラン メッカ啓示 メディナ啓示」世界の
の名著15 中央公論社 責任編集 藤本勝次 1960(昭和45年) 9月

藤本勝次「コーランとイスラーム思想」『コーラン』中央公論社 1960年(昭和45
年) 9月

日本ムスリム協会「日亜対訳 注解 聖クルアーン」1982年(昭和57年) 10月
アリ・安倍治夫「日・亜・英対訳(アンマ篇) 聖クルアーン」谷沢書房 1982
年(昭和57年) 11月

日本アハマディヤムスリム協会「選文集聖コーラン」1988年(昭和63年)

トーマス・カーライル「英雄崇拜論」岩波書店 1949年(昭和58年) 5月

若宮啓文「右手に君が代 左手に憲法——漂流する日本政治」朝日新聞社 2007
年(平成19年) 3月

東 隆真「日本の仏教とイスラーム」春秋社, 2002年(平成14年) 1月

中国イスラーム百科全書委員会『中国イスラーム百科全書』四川辞書出版社 1994
年(平成6年)

塩尻和子「イラク問題と日本人」明石書店 2003年(平成15年) 5月

塩尻和子「イスラームを学ぼう——実りある宗教間対話のために」秋山書店
2007年(平成19年) 6月